

# 琉球大学学術リポジトリ

## 第14回琉球大学びぶりお文学賞受賞作品集

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学 公開日: 2021-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 琉球大学附属図書館編 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/47967">http://hdl.handle.net/20.500.12000/47967</a>

第14回

# びぶりお文学賞 受賞作品集


琉球大学附属図書館報「びぶりお」特別号 2020

小説部門

或いは 凜藤海

詩部門

こんにやく 綾村湯葉



琉球大学

第14回

# びぶりお文学賞 受賞作品集

琉球大学附属図書館報「びぶりお」特別号 2020

小説部門

或いは 凜藤海

詩部門

こんにやく 綾村湯葉



琉球大学

第十四回琉球大学びぶりお文学賞受賞作品集

第十四回琉球大学びぶりお文学賞受賞作品集 目次

小説部門受賞作

或いは

凜藤 海

(琉球大学人文社会学部人間社会学科二年)

6

小説部門佳作

泥中の眠り

葬ヤマメ

(沖縄国際大学総合文化学部日本文化学科三年)

36

この血漿を巡る物語と共に

プラネット

(沖縄国際大学総合文化学部人間福祉学科四年)

82

詩部門受賞作

こんにやく

綾村 湯葉

(沖縄国際大学総合文化学部日本文化学科三年)

118

詩部門佳作

人間裁判

網取 汐音

(琉球大学法文学部人間科学科四年)

122

死亡遊戯フタマル

葬 ヤマメ

(沖繩国際大学総合文化学部日本文化学科三年)

126

一畳の平和に甘んじる

プラネット

(沖繩国際大学総合文化学部人間福祉学科四年)

130

目蓋

今山 燈治

(琉球大学農学部地域農業工学科一年)

134

選評小説部門

138

選評詩部門

150

選考経過

157

琉球大学びおりお文学賞は、琉球大学が基本目標として掲げる「地域及び広く社会に貢献する人材」「意欲と自己表現力を有する人材」「育成の一環として、言語力(読む力、書く力)を向上させ、想像力、表現力、創造力豊かな学生を育成するとともに、文学の啓蒙活動を高め、地域社会における文学・文化活動のリーダーを輩出することを目的に琉球大学に在学する学生を対象に平成十九年度に設けられました。第七回(平成二十五年度)から、応募資格が沖繩県内の大学生(高等専門学校の場合は本科四年次以上)及び大学院生に拡大されました。

装  
丁  
  
阪  
田  
  
清  
子

# 小說部門



## 小説部門受賞作

# 或いは

凜藤 海

主のいなくなった部屋で、私物はノートと筆記用具だけだった。

ひどく穏やかな人だった。哲学や倫理を読むのが好きだったようで、分厚い本をひたすら読み耽っていた姿が記憶に残っている。

最後に書いたものがあるから、私がいなくなったなら読んでね。多分あなたなら否定しなさそうだから。置かれていたノートを見て、数年前にそう言われたことを思い出した。顔を合わせるだけで特に話した記憶も無いのに、何故かわたしの事をどことなく信用してくれていたらしい。書いたものというのは、恐らくこの古びたノートの中身だろう。

何が書かれているのかまでは流石に教えてくれなかった。一つ息をついて、わたしは柔らかな厚紙の表紙を開いた。

「私は、私に出来る全ての事をしたままであった。それが世間から疎まれると言うならば、甘んじて受け入れよう。しかし、このまま死ぬというのも妙に癪に障る。このノートは小学生になる直前、おばあちゃんに買ってもらったものだ。お守りのように大事に取っていた。」

だが今日は、そんな死んでも死にきれない思いを書き留めるために使おうと決心した。世間様はきっとそんな記録や感情表現をすることさえ目くじらを立てるのだろうが、素直に鬼籍に入ると決めた身なのだから許して欲しい。」

「私はおばあちゃん子だった。保育園や幼稚園から迎えてもらうのはいつもおばあちゃんです。帰ったらおやつを作ってくれるのが嬉しかった。他の子がお母さんに迎えてもらってるのが少し羨ましかったけど、お母さんは忙しい人だから仕方ないと分かっていた。聞き分けのいい子供だったと思う。」

小学校に上がってもそんな生活はずっと続くと思っていたし、小学校の友達が出来たらおばあちゃんのおやつと一緒に食べてみたいと思っていた。夏はスイカのジュースが絶品だから、夏休みは楽しくなりそうだと思っていた。

しかしそれが起きたのは、そんな夏休みに入る直前だった。学校から帰るとおばあちゃんがいなくて、どこを探しても見つからない。たまに近くのスーパーに買い物に行ってる時があるから、すぐに帰ってくると思ってテレビを見て待っていた。でも、待てど暮らせど帰ってこない。

いよいよ心配になってきた時、現れたのはおばあちゃんじゃなくてお母さんだった。お母さんは凄く取り乱した顔をしていて、だけど落ち着いて私におばあちゃんが倒れて病院に行ったことを教えてくれた。

もし運命というものがあある一点で変わるとするならば、私のそれは間違いなくその瞬間だろう。病院に向かうと、おばあちゃんはガラスの向こうで眠っていた。急に心臓の病気になっちゃったから、しばらくはこうして窓越しでしか会えないのだと聞かされたところまでは覚えてる。その後は誰かに絵本を読んでもらっていた気もするし、何かをもらってそれを食べていた気もある。

そしてその日以来、何も考えられなくなる日が続いた。好きだった本も読まなくなっただし、給食も男子にあげるようになった。先生が心配して声をかけてくれたのは何となく覚えている。

しばらくして一般病棟の個室に移って、やっとおばあちゃんに会えた。おばあちゃんの姿は変わり果てていて、管が身体中から伸びていた。体が動かしにくいと聞いていた。少しでも何かしたら管を引っ張ったりしてしまいうで固まっていた私を、おばあちゃんが声を出さず手招きして呼んだ。思えばその頃から、手には管の引き抜き防止のグローブが着いていた。そんな手で、おばあちゃんは私の頭を撫でてくれた。

ぼろぼろ泣きそうになったのを必死にこらえた。私が泣いたら、おばあちゃんは病気なのに私の心配をしてしまうと思ったから。

でも、意思疎通が出来たのはそれが最後だった。行くたびに、私のことなど分からなくなっ

ているようだった。か細くなった声で、どこの子だと聞かれた時はショックだった。その瞬間、私の知っているおばあちゃんに戻ることはないと察した。私の知っているおばあちゃんはいなくなってしまうた。夏に美味しいスイカジュースを作ってくれるおばあちゃんはいなくなってしまうた。

その時のおばあちゃんは、暴れるからとベッドに手を括りつけられるようになっていた。日が経つごとに、両手はその拘束故にだんだん固くなっていった。息がだんだん苦しうになっていった。ついには、起きているのか寝ているのかさえ分からなくなっていた。

私はその日の事を何度も想像し、考え、練習することにした。おばあちゃんはもうすぐ死ぬらしい。それが避けようのない事実であることを知り始めたから。

死ぬ、それって何だろう。病院のドラマで体が動かなくなる人がいた。多分あれが死ぬってこと。体が動かなくなる、何も考えられなくなる。それって多分、いつも通りが無くなること、明日が来なくなることと一緒だ。それに気づいたとき、急に足元がぼろぼろと崩れて落ちるような感覚がした。当たり前に来ると思っていた明日が、突然消えて真っ暗になった。明日が来るといふのは、もしかしたら、当たり前じゃない。心臓がぎゅっと冷えた。明日、今日と同じように学校に行けなくなると、二度と友達と会えないとしたら。もうご飯が食べられないとしたら。

訳が分からなくなると泣きそうになったのを、唇を噛んで耐えた。私が泣いてるって知ったらおばあちゃんは心配するだろうから、泣いちゃいけない。もう私の事なんか分からないかもしれないけど、それでも泣きそうになつたらいつもそう言い聞かせるようになっていた。

死んだら動かなくなるけど、固くなっちゃった手を揉んであげたら喜ぶかな。お手紙書いたら天国で読んでもくれるかな。天国はお花畑だと言うけど、どんな花が咲いてるんだろう。最近学校でパンジーとかコスモスとか、花の名前を少し覚えたから、それがあつたら嬉しいかも。そんなことをいろいろ考えた。

毎日来る日も来る日もそんなことを考えて、準備した。

そして実にあっけなく、その日は来た。準備はしていたから受け入れられたけど、いざその日が来ると実感は湧かないものだった。

葬式の間、ずっと頭が痛かった。いつものように学校に行くことはなく、普段着ない式服を着て大人たちと一緒に座っている。おばあちゃんのいた頃には、もう本当に戻れなくなったことだけを、何となく理解した。

その時に見た棺に入ったおばあちゃんの顔も、もう温かくも無ければ柔らかくも無くなったその頬も、火葬後の何もなさも、骨壺の小ささも。小学生が一気に受け止めるには、きつと全てが重く、強すぎた。

次の日は朝から熱が出て、すぐには学校に行けなかった。それから回復し、お母さんが前のように仕事に行くようになって徐々に元の日常が戻り始めたが、以来ずっと私まで魂が抜けたような毎日が続いた。何をしても楽しくなくなった。みんながドッジボールや図書館の漫画で楽しそうにしているけど、少しも響かなくなつた。心の中から、白以外の一切の色が無くなった。

その状態はしばらく何年も続いた。しかし小学校最後の年のある日、それは突然思いついた。おばあちゃんのような人が、もういなくなるような世の中にしよう。誰かがあんな風に苦しむ前に、救ってあげられるような人になろう。そうしたら、おばあちゃんもきっと喜ぶ。私はおばあちゃんを助けることは出来なかつたけど、おばあちゃんの代わりに誰かを助けることは出来る。それに気づいた私は、人が変わったように勉強し始めた。その為にはお医者さんにならなきゃいけないと思って、理科や算数の勉強を頑張り始めた。だけど、本来の私の得意科目は国語と社会。その二つと同じくらいの点数を理科や算数で取ろうとすると、想像以上に難しいことに気づいた。あまりにも分からなくて泣きそうになった時もあったけど、中学に上がって高校受験を意識する時期になった頃には、どちらも常に同じくらい出来るようになっていた。成績も上から数えた方が早くなったから、その時の私はかなり頑張っていたのだと思う。

高校に入ってから、ひたすらに医学部を目指して勉強していた。同じ医学部志望の、真子という友達が出来た。環境が変わってしんどくはなつたけど、友達が出来たから楽しかった。

だがすぐに、私が目指すべきは医学部ではなく薬学部であると気づくことになった。

きっかけは一年生の頃に出した延命治療についての意見文で先生に呼び出され、書き直しを食らったときの事。延命治療はやるべきじゃない。快方が望めなくなった段階で安楽死をするかどうか選べるべきだ。それ以上病気に苦しめさせるのは人生の無駄だ、ということを書いたと思う。

その時先生に、どういふことだと聞かれた。どうもこうもそういうことですが、と返した。

すると先生は目の色を変えて、命を大事にしろ、もう少し希望を持って、無闇に人の命を奪うべきじゃないと言われた。そして、どれだけ病状が重くたって、現代の医療なら苦しみを緩和することも出来る続けた。医学の発展は目覚ましいから、きつとお前が医学部を卒業するころにはもっと優れた医療技術で、どんな病気も簡単に治せるようになってははずだとも。

何をぬるいこと言ってるんだ、と叫びそうになったのを寸でのとこで抑えた。意味が分からなかった。私は命の重要性も分かっているつもりだけど、それと同じくらいかそれ以上に人生を自分らしく生きることも重視しているだけだ。

自分の意見と合わないから書き換えろって言いたいだけじゃん。当時はそう思って書き直すとはなかった。嫌だと言ったらそうかとあっさり諦めてくれたし、その程度で引き下がってくれらんならそんなことも言わないでくれと思った。その先生が少しだけ嫌いになった。

しかし、その時から何かがおかしいと思い始めた。その話を、同じ医学部志望の真子なら分かってくれるだろうと思って、彼女に話してみた。

すると真子は、考えは理解できるし尊重するけど、先生の言ってることももう少し考えてみて、と諭すように言ってきた。彼女なりに言葉を選んでそう言ってくれたのだろう。

だけどそんなことは理解できるはずもなく、真子の言葉の真意を考えることすら、怒りのあまり出来なくなっていた。

そっか、信じてたのに、真子も分かってくれないんだ。真子も先生の意見に従っちゃう人なんだね。あんまりだよ、見損なった。

そんな言葉を彼女にぶつけた。

真子は私の言ったことを聞いて、凄く驚いたような顔をしていた。違う、そういうんじゃない。だけどその考え方を本気でしているならもうはっきり言う、お願いだから考え直してほしい。そう真子は続けた。

これ以上何かを言ったら、友達がいなくなる、大切な友達を失ってしまう。違う、それよりも、何かを越えてもう戻れなくなる。

そんなことを察していた。どこかでもう何もするなと警告していた。

しかしそれでも、私は言葉を繋いでいた。私は本気だよ、そのために勉強も頑張ってるの。分かってくれないならこれ以上、余計な口を利かないで。

それが言い過ぎだと気づいたときには、もう撤回などできなくなっていた。真子は酷くショックを受けて、悲しそうな、寂しそうな顔をしていた。

真子と話したのは、それが最後だ。

後悔は今でもしていない。しかしどうやら私はおかしい、世間とどうやらずれているらしいとその時はつきりと認識した。同時に、もう戻れないところまで来てしまっていると感じていた。だったら、もう最後までやるしかない。

私の考えが変なら、何かあったとき真っ先に疑われるような医師はリスクだ。医師がダメなら、じゃあ薬剤師になろうと決意した。薬なら、苦しみを取ってあげるのは容易い。使い物にならなくなった体から、命を取ってあげることも出来る。



立場ではなく役割を考えるなら、薬を扱える薬剤師は医師よりもはるかにいい気がしてきた。それから変わず私は勉強を続け、何とか薬学部に合格出来た。大学での六年間は本当に楽しかった。カタカナだらけの薬の名前、作用と副作用、病気とそれに対する禁忌の薬。覚えることの連続で辛いことも多かったけど、やっと薬学を学べている喜びの方が勝った。

どの病気にどの薬がなぜ効くか学べる。それは裏を返せば、どの病気にどの薬を投与すれば、症状を悪く出来るかが分かるということだ。

これだと思った。患者本人によってあまりよろしくはないけど、症状を意図的に悪化させれば、死をもたらすことが出来る。急変扱いになれば、何故亡くなったのか深く追及されることも無いだろう。出来るだけ苦しみは緩和させる必要があるが、これなら私が出したということを知られることなく、患者を恒常的な苦しみから解放させることが出来る。

それに気づいたとき、もっと勉強が楽しくなった。この方法を使えば、多くの人を苦しみから逃すことが可能になる。

そういえば、大学では最初で最後の彼氏が出来た。色恋なんて私には縁遠いと思っていただけ、意外と出来るものだったらしい。

了くんと呼んでいた。優しくて、真面目で、絵に描いたような純朴な男の子という感じの人だった。隣にいと落ち着くというのが実際本当に起きると知って、ちょっと感動した。

一年くらい付き合っていたと思う。私は了くんと一緒にいる将来を考え始めた。二人で穏やか

に過ごしていけたらそれでいい。子供は要らないな。お互い薬剤師として働くとは忙しくなるだろうから、年に一度旅行にでも行けたらそれでいい気がする。

そう思っていたし、それが私の理想の人生だった。

しかし了くんは違った。

了くんは家族を求めた。子供を産んで、一緒に育てて、孫たちに囲まれながら長生きしてほしいような人生を求めた。世間一般の言う普通の人生が、彼は欲しかったらしい。

私はその将来像を聞いたとき、少しだけぞっとした。長生きという言葉があまりにも不快だった。

長生きするというのは、私にとっては無為に命を長らえることに他ならない。おばあちゃんがベッドに横たわる姿が、いつでも痛々しく思い出せた。私はそんなに生きたくない、老いて苦しむ前に死にたい。

何度も話し合ったけど、話し合う度に埋めようのない溝が深まった。金銭感覚も衛生観念も同じくらいの感覚だったから、結婚するならこれ以上ない人だと思っていたけど、将来像だけはどうしても合わせられなくなっていった。話せば話すほど、取り返しがつかなくなる感覚さえ覚えた。

そして結局、了くんとは別れた。今となっては正真正銘、最初で最後の彼氏になった。一度きりの異性とのお付き合いだったけど、それはそれで楽しかったとも思える。あんなに誰かと将来像や人生のことを話すことなんてない。

了くんは今頃何をしているんだろう。卒業して以来連絡は取ってないけど、どこかで将来と一緒に考えられる人と幸せになってくれていたらいい。私にはどうしても添えない将来だったから。そうしてなかなか刺激的な六年間は過ぎて行った。了くんの件以外なら、卒業するころには私は私の思想を隠すのに慣れていた。多分誰にもおかしいと感じさせることはなかったと思う。レポートや卒論の内容だって、将来取りたい方法と怪しまれないところの妥協点を探りながらテーマを選んでいたし。

そしてその末に国試に合格して、私は念願叶って薬剤師になることが出来た。あの時の気持ちは今でも熱を持って思い出せる。

やっと報われた、やっと人の役に立つことが出来る、やっと私は誰かを救うことが出来るんだ。人生で初めて、胸が喜びで満ちるといった感じになった。

心がふわふわ舞い上がって体まで軽くなって、そのままどこまでも飛んでいけそうだ。そう、少しだけ本気で思った。」

「最初の就職先には、大学の附属病院を選んだ。知ってはいたし覚悟もしていたが、その多忙さは想像を超えていた。実際に一人前の薬剤師として働くのだから、実習なんて比じゃない責任も押し掛かる。しかも大学病院なのだから、症状の比較的重い患者たちが集まる。その分、慎重さも求められる。」

疲れ切りながら勤務を終えるような日々だったが、しかしそれでも楽しさの方が勝っていた。私だって毎日人を殺そうと思って生きていくわけじゃない。医療人らしく患者が回復して、嬉しそうに笑う姿に満たされていた。むしろそんなときの方が多い。そこだけはもう誰にも信じてもらえないだろうけど、そんな日々があったと記しておきたい。

そう、もちろんある程度の倫理は持ち合わせている。無闇に命を無駄にはいけないことも分かっているし、多くの人は生きたいと思うから病院で治療しているのだ。時に人は想像を超えるほどの回復力を見せる。無事に回復した時は本当に嬉しかったし、やり甲斐もひとしおだった。そんな風に生きようとするその活力には、十分添えたい。私に出来ることで手伝いたい。退院を見送ったことだって喜べる。

そしてそんな気持ちと同じくらい、苦しみから抜け出せなくなったと分かった時、それに苛まれる時間を一秒でも短くしてやりたいと思う。奇跡的な回復力を見せるときだって、博打ぐらいの確率しかない。年齢が若ければ望みもあるが、流石に高齢者に若い人と同じ体力は望めない。なら、これ以上苦しむ前にその苦しみを取ってあげる方が本人も楽であり、合理的だと思う。誰にだって拘束されてまで生きる必要は無いのだ。

その考えの根源は、患者の快方を喜べる気持ちと何も変わらない。ただの奉仕精神である。その人にとっての最善を目指して、その手伝いをする。そんな、ただの奉仕精神だ。

働いて一年経った頃、ある患者の事が気になった。大腸にがんを患ったおばあちゃん、名前

は藤田シズエさんと言った。その時すでに入院して半年が過ぎていたが、その病状は悪化の一途をたどるばかりだった。転移した部位も多く、もう回復は見込めないと判断されていた。

入院してきた頃は会話も出来たし、家族の話や昔の話を生き生きとしてくれる可愛いおばあちゃんだった。しかし日を追うごとにそんな話どころか会話すら出来なくなっていく。

辛そうにベッドに横たわる姿を見て、鎮痛剤を投与しながら私は初めて問いかけてみた。楽になりたくはないかと。

その瞬間、藤田さんの目は久しぶりに見たほど活力を取り戻し、小さな声でなりたいたと答えてきた。好きな話をするときの目とそう変わらない輝きを見て、実感した。

そうだ、人って本当は楽になりたい生き物だ。痛み止めや吐き気止め、その他諸々のその場凌ぎの薬にまみれる生活なんて、誰もしたくない、と。

藤田さんの返答を聞いて、いよいよだと震えそうになったのを覚えている。

行為を行うにあたって、簡単な同意書を作成ことにした。これは藤田さんのためである。急に気が変わっても、それは一瞬の死の恐怖のせいだ。しかし急に起こった気まぐれの正体なんて、その場で理解して受け入れられるものではない。同意書は、そんな気まぐれなどが起きた時に備えて、決めたからには最後まで遂行しても構わないと示すためのものだ。藤田さんと私、それぞれのための同意書である。

説明は誰にも不審がられないようなタイミングを選びながら、何度も入念に、言葉を尽くしな

がら話した。

私が採る方法も、がんが悪化して病死を待つ方法も、どちらも大して経る苦しみは変わらないこと。遅効性であること。

そうしてサインをもらった翌日、早速私は藤田さんに薬を調剤して飲ませた。その様子から目が離せなかった。人が嚙下する瞬間を、あんなに真剣に見たことはないと思う。

飲み込んだ後、藤田さんは安堵したような表情を浮かべて目を閉じた。

ありがとう、幸せな最期を送れますように、と声をかけて、私は病室を出た。

その数時間後、急変を告げるアラートが鳴った。藤田さんの病室。看護師たちが急いでその病室へ向かう。私も向かったが、そこでは誰もが回復を願って大丈夫ですか、分かりますかと声を飛び交わせていた。

その中で、彼女の容態はもう回復しないことを、私だけが知っている。

良かったね、もうすぐ楽になれるよ、藤田さん。

その時ちようどお見舞いに来た家族に看取られ、藤田さんは息を引き取った。まだわずかに温度がある手を触りながら、お子さんやお孫さんは泣いていた。でも、やっと苦しくなくなったね、あれ以上苦しむよりこれでよかったね、と呟いていた。

その瞬間を見て、私は堪らず病室を出た。ああ、やっと、やっと私の手で誰かを助けられた！顔が綻ぶのを抑えきれなかった。流石にこの状況で笑っているのを見られてはまずいから、トイレへ駆け込んだ。

やった、やっと、私はこの瞬間のために、あの時から人生を捧げてきたんだ。国試に合格した時よりはるかに嬉しかった。誰かのためになれるってこんなに嬉しいんだ。そう思うと、全身が喜びに震えた。

一面花だらけの天国で、解放されて喜んでいいな。久々に自由が利くようになった体を楽しんでくれるだろうか。その様子を想像していたら、気づくと涙が出てきていた。

ああ、どうか幸せであって。あなたの幸せを心から願います。そうひっそりと祈った。

今でも藤田さんには感謝しかない。若く経験の浅い私を信じて、サインしてくれてありがとう。同意書は召し上げられてどこにあるかも分からないが、間違いなく私の宝物だ。

それから大病院では、あと一人を助けた。九十代のおじいちゃん、須藤葉蔵さん。酒の飲み過ぎで肝臓を壊してから、幾度も入退院を繰り返してきた。もういい加減酒に追われずに楽になりたい、と溢されたのがきっかけだった。きっともう限界だったのだろう。

アルコール依存に陥るのは、生活苦や人間関係の苦しみなどが関連している場合が多い。誤解されていることも多いが、アルコールに限らず依存というのは、ただ単にお酒やギャンブルなどが好きでやり続けてしまっただけのものばかりではない。

須藤さんは、酒に追い立てられる原因にも、酒に逃げてしまう自分にも、嫌気がさしていたのだろう。

二例目になると、調剤にある程度余裕が持てるようになってきた。

病状の悪化はするが、少しでも楽に逝けるように。何が起きたか検証不可能なように。調べるまでもなく、自然な病死に見えるように。

もちろん自分のやり方が良くないことは重々分かっていた。薬でわざわざ症状を悪化させて急変を狙い、苦しい記憶が最後になるなんてあんまりだ。事故で管が外れたとか、そんな感じのやり方もあると思う。

だが、そういうのは遺族にとって残酷だ。もし苦しさに耐えかねて、自ら管を引き抜いたとしたら。誰か一人はそう考えるだろう。自分の大事な人が自死を選んだなんて、まあ実際そうなのだけど、そんな可能性に行き当たるだけできつと辛い。

私のやり方は最高では無かったが、遺族のことも考慮に含めた最良の妥協案だと信じている。

その二例目を終えた後、落ち着いた環境を求めて緩和ケア病棟のある病院に転職した。そこが、私の仕事の本領だった。

そこでは八人を救った。佐藤フネさん、伊澤昭義さん、関ますみさん、杉田一彦さん、石井雄二さん、宮崎てる子さん。それぞれ、病状も同意に至る経緯も、事細かに覚えていた。

一人一人見送る度、おばあちゃんの死に際が脳裏を掠めていた。こんなことが出来るのに、どうしておばあちゃんはあんなに苦しまなければならなかったんだろう。手が硬直するほど拘束される必要も、ベッドに横たわって死を待つ必要も無かった。今の医療は簡単に死なせてくれないけど、命さえあればそれでいいとは思えない。



もちろん命さえあればなんとかなることもある。でもそれは急性期の話だと思う。命がある事で妥協するような状況に、慢性的に置かれることを誰が欲する？ 年を食った体で、明日救われる技術が来るのを待ってベッドの上で呼吸を続けるのか？

私は嫌だ。あんな死に方はしたくないし、誰にもさせたくない。

だから調剤を続けた。医療や薬学を利用し続けた。誰かを助けるために。

しかし『悪事』というのは、必ずバレるものらしい。私を警察に突き出したのは、その病棟の医師だった。名前はハタセと言ったはずだが、その苗字すらもう自信が持てない。

あまりにも真っ直ぐで純情な女だった。患者が息を引き取る度、いい人生だったかな、最後のお手伝いちゃんと出来たかなと心を痛めるような医師だった。あまりにも、あまりにも初心。

正直そんなことでは緩和ケアなど務まらないと思っていた。恐らく配属がたまたまそこになっ  
てしまっただけだろう。

そんなことから、油断していた。

その医師は、高校時代末の間の友達だった真子と、同じ大学だったという。お喋りな看護師から聞いて連想したのか、真子から喋ったのかは分からない。だが、とにかく私が真子と接点があることを知り、そして真子から注意してくれと言われていたらしい。流石にそんな繋がり  
の存在まで想定に入っていない。

誤算も誤算、大誤算だ。

真子の言うことを信じたその医師は、急変して亡くなった患者の薬剤師が私であること、亡くなる数時間前にその病室に私が入りしていることなどをご丁寧にも調べていたらしい。そして、私が担当している中で急変して亡くなった患者の血液を採取して、その病状を悪化させる成分が含まれていることを突き止めたという。それらを纏めて警察に情報提供し、私は捕まるに至った。

その初心さで油断していた。私が想像していた通り、単純で馬鹿な女であればよかったのに。普段の言動からは想像できない有能さに、白旗を上げるしかなかった。

その話は本人からされた。翌日本当に警察が現れた時は流石に肝が冷えた。お前のしていることは悪だと、突き付けられたような感覚がして。

彼女には逮捕されてから一度だけ会った。お前のせいどころなつた、という怒りをぶつける代わりに、刑事ドラマの主人公にでもなった気分はどうですか？なんて嫌味を言ってみた。ごめんなさいと泣いてくれでもすれば、少しは気が晴れる気がした。

しかし彼女は私の嫌味に怯むことなく、一滴の涙も溢さなかった。ただ毅然と、罪は償ってくださいと言うだけだった。

あまりの真つ直ぐさに、最早呆れて笑ってしまった。あまりの眩しさに倒れてしまいそうだった。

罪は償ってくださいだなんて、私の考えも知らないでよくそんなことが言えるものだ。真つ直ぐが過ぎると、自分の道しか見えなくなるらしい。その性格自体は褒められるものかもしれない。

確かにその素直さはいいことだ。

だが、貫かれる考え方の対極にいる人間からすれば、それは真つ直ぐさや純情を通り越して最早暴力だ。自分に見えない考え方を、自分が暴力を振るっていると気づかないまま、平然と蹂躪する。この多様性の時代で、他の視点に立つということを知らずに生きてきたのだろうか。自分の正当性を微塵も疑わないなんて、なんとまあ素晴らしい人生を歩まれてきたことだろう。こんなのがもてはやされる世の中なんて、こっちから願ひ下げだ。

あの女には本当に腹が立つ。二度と顔を拝みたくない。」

「罪だと認める気は無いけど、したことは認める。それを素直に言うとは自白扱いになったらしく、すんなりと逮捕後の事は進んだ。どうやら世間では、大分センセーショナルに報道されていたらしい。医師でもなく、薬剤師が十人も殺したなんて、医療現場は恐ろしいと。転職以前の二人まで判明しているのは驚いたが、その時点で同意書は召し上げられていたようだからそれだろう。私はその報道の中で、専門家の皮を被った狂人だと言われていたらしい。世間でどう言われようと、私がずれているらしいことは確かに分かっている。

だが、私を狂人と呼ぶなら、世の中だってみんな狂っている。善人と呼ばれる人は、もれなく全員狂っていると言えるはずだ。そうでなければ釣り合いが取れない。

私はただ、人を助けたかっただけだ。おばあちゃんのような人を生みたくなかっただけだ。

そんな奉仕精神が否定されるなら、世の中でまともなのは悪人、利己的な欲求だけを追い求め

るような極悪人の方だ。

でもまあ、いくら報道されても、どんな風に記事にされても、別に良いと思っている。

多くの人にとって怒りは最も簡単な娯楽で、かつ自分が正しいと手っ取り早く感じられる便利な感情だ。世の中は、そんな怒りを感じるための、分かりやすく叩きやすい話を求めている。

みんな、そんな怒りから生まれた、歪んだ自己肯定感で満足したいらしい。

そして私の人生は、そんな醜悪な道楽に消費されるにはきつと格好の餌なのだろう。

しかしそんなことさえ、今まで日陰に隠れてきた人間としては日の目を浴びることを許されたように思えてならない。

つまり、あまりやぶさかではない。

何より、私がしたことは事実である。その事実を自ら否定することは、私の人生そのものを、自ら否定することに他ならない。その事実が罪であると認めるかどうかは別として。

私がしたことは殺人と呼べるかもしれないが、私は病に苦しむ人を救おうとしたままである。

取り調べの中で、私は刑事に事件について尋ねられる度そう言い続けていた。

するとなんと、精神鑑定を受けさせられた。流石に少し笑ってしまった。そうか、そこまで私はおかしいらしい。

来た精神科医に、ねえ先生、そこまで私は変ですか、私の信条はそんなにおかしいですかと尋ねてみた。ほんの遊び心というか、いたずら心である。だから別に回答を求めているわけではな

いし、興味はなかった。

だが、医師はしばらく顎に手を当てて真面目に考えてくれた後、『あなたの意思を遂げる力は素晴らしいです』と言ってくれた。

その表情は穏やかだった。少しも私を非難する気はないと伝える表情だった。ほんの少し、私の努力が認められた気がした。

実際その部分は認めてくれたらしく、私は完全責任能力を判定された。つまり起訴され、法廷で裁かれることが決まった。

当たり前だが、私はどこに行っても罪人として扱われるようになった。番号で呼ばれることが増えた。家族には勘当を言い渡された。

何だか不思議な感覚だ。普通に生きていただけなのに、ある日突然世界が変わってしまったよ。うな。その感覚は、おばあちゃんが倒れた日に近い。現実味がなくて、浮遊しているような。

またいつの日か仕事を頼まれそんな感じがするけど、私に二度と薬剤師を名乗れる日は来ない。それどころかもう自分の名前を名乗ることさえ出来ないかもしれない。

このノートを開いている今日は、裁判を終えた日だ。初公判の時はドラマやニュースでしか見たことのない法廷に、年甲斐もなく浮足立っていた。傍聴席には想像以上に多くの人が座っていた。腕章をつけていたりパソコンを叩いていたりしていたから、報道陣が多かったのだろう。

何もせず腕組みして座っている人もいたが、きつとその人は野次馬だ。興味本位で、私の人生と思想を消費しに来たのだ。そんな大量の人間はいるのに、家族は誰もいなかった。

あの日は久し振りに番号ではなく名前を呼ばれて、人心地がついた気がした。そうだ、私は罪人じゃない。私だけがそう思っているとしても。

裁判では、あの初心ちゃんが提供したであろう映像やデータが証拠として挙げられていた。それに対抗して私の弁護士は少しでも罪を軽くするために、被告は病に苦しむ人を救おうとしたまじでだと主張してくれた。この人を裁くなら、安楽死や延命治療の是非についても同様に裁くべきだ、と。

出た判決は、死刑だった。

法廷はざわついたが、裁判官は続けた。

被告人の心持からすれば、確かに慈悲の精神で行われたことであると認めることは出来る。だが、それでも殺人は殺人である。医療者に十人も殺害されるなど、医療の信頼の根幹を揺るがしかねない大事件だ。被告人には完全責任能力が認められている。また犯行は、同意書を書かせるなどの入念な準備をした上で実行されていた。その危険性や考えが変わる可能性を分かった上で行われた、殺人の責任は重い。よって、死刑に処する。

納得も反発もなかった。ただそうされるのが私に求められることならば、甘んじて受け入れようと思っていた。どうせこの先生きていても一生涯の中か、良くて隠れながら世間の隙間で生

きる未来しかない。そんな未来を生きるくらいなら、この辺で死んどいた方が身のためにもなる  
と思った。

そこで終わるかと思ったが、裁判官は続けた。

あなたは同意書を作成してまで犯行に及んでいます。何故いかにも証拠になるようなものを作ったのですか。あなたは入念に準備をして十人も殺害するに至ったのに、この書面の存在だけ迂闊に思えます。同意書にサインした以上、患者が抵抗するのは難しい。患者の気が変わるのをそんなに恐れたのですか。死ぬのが怖いのを、本当はあなただって知っていたのではないですか。あなたのしたことは、間違いなく暴力だ。精神的にも物理的にも患者を抑圧した、暴力だ。そう言って、裁判は閉廷した。

しばらく呆然としていた。何を言われていたのか全く理解出来なかったが、改めて書き出ししてみると凄く鋭いことを指摘されていたようだ。

弁護士は私のショックの受けようを心配したのか、裁判が終わってすぐに声をかけてきた。弁護士は、今あなたの事件に対して医学や薬学界からの反発が凄いですと教えてくれた。裁判官はきつとそこに配慮したんだ、死刑は重い。せめて無期懲役ではないかと思えます。

だが、私が愕然としているのは死刑になったことじゃない。ひとまず控訴はしないとその場で言った。

裁判官は、私のしたことを暴力だと言った。

実際そうなのか？

あまりにも向き合いたくない問いが、厳然と目の前に立ちはだかっている。

いや違う、私はおばあちゃんのように死にきれずに苦しむ人を助けたかっただけだ。救いたい、助けたい、幸せを願いたい。その気持ちの間違っているとも言えるのか。

そんなただの奉仕精神まで暴力に数えらしたら、世の中は地獄だ。この世でまともなのは悪人だ。

同意書は、最初は藤田さんと私のために作ろうと思った。直前になって起こる一瞬の死の恐怖は、その場では分かってももらえないものだ。しかし、死を決めたのは藤田さんであり、私もそれを実行したいと思う。そのため同意書。

契約を履行するためと考えるなら、確かにその意図であれば必要に足る。気の迷いが生じて、ちゃんと最後まで意思を遂げられるようにするため。

でも、本当に死が誰にとっても喜ばしいものだと思えば疑わなかったら、それは同意書ではなく契約書という名前になるはずだ。ただ淡々と決めたことを履行する、そのためだけの契約書。そこに重大な気持ちの変化などは想定に入っていない。

だから同意を求めたんだ。死は怖くない、死は幸せだ、そうだよね？と。

そうだ、やっぱりそうだ。避けられない死の恐怖が存在することを、私はやっぱり分かっていたんじゃないか。

おばあちゃんが死ぬ前に感じた、足元が崩れるような感覚。あれは間違いなく、死への恐怖だ。



いつも通りがいつも通りでなくなることが怖いと言い換えてもいい。心臓がいつも通り動かなくなることは、ああ、そうだ、確かに怖い。

そんな感情の変化が想定されるようなことを、書面による同意で私は見て見ぬふりが出来るようになった。

そんな事態になっていることにすら気づかず、私は十人の命を亡き者にした。

気付きたくなかった。あまりにも目を背けたい事実。裁判官の言う慈悲の精神に則ってやったつもりなのに。

結局はあの初心な女と、何も変わらないということか。」

「これで私は名実ともに罪人になった。やっと罪人を名乗る気になれた。ああ、確かに間違っている。感情を抑えてまで命を奪ったのは、間違っている。

でも、私の信じてきたことまでは、まだ間違いだと認めたくない。おばあちゃんがいなくなってしまった日から、私は死こそが苦しみから解放される最終手段だと信じてやってきた。それをもたらすことが善だと信じてきた。

これが世間からそうずれているとは、流石に思いにくい。何かに苦しめられ追い詰められた時、世間が許さなくとも個人にとって許された最終手段は、命を絶つことだ。だから安楽死は是か非か問われているし、自殺も存在する。信じたくななくても、嫌だと拒んでも、死はモルヒネを超越

した最後の術になり得る。

つまり、私が間違っただのはやり方だ。

やり方を間違ってしまっただけで、私は死刑囚と呼ばれ拘置所で最期を迎えることが決まってしまったのか。

今心の中を占めているのは、虚無と無力感だ。

感情を抑えてまで死に追いやったのは、確かに私も必死過ぎたところがあるのだろう。

全ては、おばあちゃんのような人を繰り返し返したくなかっただけだ。あんな拘束によって大事な人の手が固くなるなんて、誰が見たいんだ。誰が、大好きな人が起きているのか寝ているのか、生きているのか死んでいるのかも分からないまま横たわっていると見たいんだ。何も出来ないことが辛かった。死ぬってどんなことだろうと考えると、自分のための準備しか出来ないことが歯がゆかった。

そんな悲劇はもうごめんだ。誰にもこんな思いしてもらいたくない。人生の貴重な時間を、あんな苦しい様子を眺めることに費やすのはいけない。百害あって一利なしとはこのことだ。

そのために、今日に至るまでの十数年を費やしてきた。

しかしどうやら、私は人生の全てを無駄にしまったらしい。人生で一番腹立たしい女と自分が同じであったと、認めざるを得なくなるなんて。そんなこと思ってもみなかった。

小学生のほとんどを無為に過ごしてしまったことや、真子を失ったこと、了くんとの将来を諦

めたこと。全て、本当に何も辛くなかったと言えば嘘になる。最終的にこんな無駄だったと思われるようなことをしてきたにしては、犠牲にしたものが多すぎる。

私の死刑が執行されるのはいつだろうか。今までニュースで見えてきた死刑執行の話を思い出すに、年単位は覚悟しておかなければならない。流石に明日刑執行となったら、お大臣様の方が叩かれるに決まっている。

独房に入るまで、死に繋がりそうなものは徹底的に排除された。パーカーの紐でさえ駄目って、死んでほしくなさ過ぎでしょう。死刑囚なのに。矛盾がひどすぎていつそ笑える。ああ、こうなる前に自殺でもすればよかった。

おばあちゃんの事なんか忘れて、ただひたすら患者の回復だけを願う薬剤師として生きる選択をしていれば、もう少し普通の人生が歩めたのかもしれない。

だが、それは私じゃない。私の人生じゃない。

おばあちゃんの有様とその死を忘れきれず、それを繰り返したくないと思ったのが私だ。それを着実に実行してきたのが、私の人生だ。

でも、この人生だってこれなりに楽しかったとせめて言いたい。何かに向かってひたすら努力を続けたこと、一医療者として患者の回復を喜べたことは、私にとって大事な人生のページだ。それだけは誰にも否定されたくない。

もちろん、本当は私の人生全てを肯定したい。しかし、この独房の景色は、否が応でも何かを否定される心地がする。人間の尊厳とかそういうものを、言葉にせずとも否定されている気がする。

私の人生は、こんな、こんな檻の中に続いていたのか。

酷いやりきれなさに襲われている。

これからこの独房の中で、どういう風に過ごそうか。本は読めたりするのだろうか。それなら、そこら辺の一般人より時間が有り余っていて、ご飯の保証もされていることを利用しよう。倫理の本とか哲学書でも読んでみよう。

今は何となく、この虚無を救ってくれるのは哲学や倫理のような気がしている。命とは何か、最良の人生とは何か、もしかしたら答えはそんな学問にすらないかもしれないけど、まあ読んでみる価値はあると思う。どうせ時間は死ぬほどあるのだから。

今日、この人生は首を括って終わることが決まった。

ああやっぱり、私の人生を全否定したくはない。例え不名誉な絞殺に続く道だったとしても、私の奉仕精神はきつと、というか絶対、無駄じゃない。

私の事件をきっかけに、誰かが安楽死についてもっと考えてくれればいい。あくまでその人のための死ぬ権利であることを尊重した案を、誰かが作ろうと思ってくれればいい。

そうだ、私が間違っただのはやっぱりやり方だ。自ら薬剤師として手を下そうと考えなくても、

私の本来得意だった文系を生かして法律を作る道だってあったかもしれないな。

気づくのが遅すぎた。真っ直ぐが過ぎると自分の道しか見えなくなるって、私は誰に向かって書いたんだろう。

きっとこれに気づけただけで、今の人生はきっと万々歳だ。

もし来世があるなら、必ずもっと上手くやれる。やってやる。

次はもっと受け入れられる方法で、皆を救おう。無駄な苦しみに、誰も晒されずに済むように。」

彼女の記述はそこで終わっていた。

昨日、確かに彼女はこの世を去った。彼女の言う、不名誉な絞殺で。

辺りを見回し、清掃が最後まで済んだことを確認する。

いつも通りがいつも通りでなくなる恐怖、と思いながら、わたしは彼女のノートと筆記具を持って、空っぽになった独房を出た。

死刑が執行されたことは直ちに報道され、瞬く間に拡散された。ネット上にはあらゆる意見が散らばっている。彼女のしたことに対する肯定派、否定派。そしてそこを超えた、安楽死の権利に対する議論。

そんな彼らに共通しているのは、何かに対する怒りの感情。

しかし彼女はどう言われようと、もし生まれ変わりがあんならばその人生で、また死に向かつて生きるのだろう。

その真っ直ぐさ——否、暴力性と共に。

凜藤 海（りんどう かい）琉球大学人文社会学部人間社会学科二年

小説部門佳作

# 泥中の眠り

葬ヤマメ

妙な重みのある生ぬるい風で顔中に汗をかく夏。褪せたピンクのバラソルが通りに立った喫茶店を過ぎれば、『ソープランドルビー…2F』と霞んだ文字で刻まれた、ネオン切れの看板がぶらさがるビルの前に出る。一階には自営業のカラオケバー、三階には同じような風俗店。八尾は何となくその全ての部屋にくすんだ肌をした老婆が座っている想像をした。想像の中で背中を丸めて座る老婆の手は皺くちやだが、それぞれ一様にマイクを、ローションのボトルを、アダルトグッズをいやらしく握り込んでいて嫌な気持ちになった。

古谷は詩集が何冊も入った粗末なショルダーバッグを汗だくで抱えていた。その姿は下品な風俗店にとっては酷く異質だった。近道だと言って古谷は八尾を連れてよくこの道を通るが、八尾が通りを抜けるときはこの空間そのものから異物として吐き出されているような気がした。全身を汗でぐっしょり濡れさせた古谷が、借りてきた本を汗で濡らすまいとしきりに体の面に接したショルダーバッグの中身を気にしている。八尾が荷物を持ってやろうか逡巡していると、

ラングストンの詩集を返却し忘れた、と頭を掻いた。古谷が人懐っこい笑顔で笑う。陽光の下で見ると、その表情は子供のようなあどけない面影を僅かに宿した愛嬌のある顔つきだ。古谷の頬は日光で赤く照っている。風俗街の埃を含んだ塩辛い汗。古谷はいつも本の返却期限を延滞する。

初めて古谷を認識したとき。古谷は黴臭い外国の詩集を数冊抱えて、返却期限を延滞していたことを謝りながらカウンターに持ってきた。毎週のように図書館に訪ねて来ては詩集ばかりを借りていく妙な男だと思っていた為、期限超過の度に謝られているうちに名前と顔を覚えた。四度目の謝罪をされたとき、この人か、と勘付いた。

ある日いつものように古谷から返却された詩集をチェックしていると、中原中也の詩集の隙間に、小さなメモ用紙が一枚、葉のように挟まっていた。抜き取って紙片に書かれた文字に目を落とす。「夏」という題目の詩が載った頁に挟まれていたその詩は、「夜を掘る者」と題され、まだ途中と思しき何かの一節が滑らかな字で連ねられていた。

夜を掘る

そこに何を埋めるわけでもないが

掘り終えた頃には

埋めるべきものが見つからるだろう



人並みの感傷も焦燥も憂鬱も

手垢塗れでまるで別の人のものみたいに思えて

しかしながら、ここで気を病むのもなんだか凡庸な気がして

嫌になる気持ちを抑えて息を殺してくぼんだ土地にまたスコップの先端を突き刺す

何か別の本の一節か、どこかの曲の歌詞か。どちらとも判断がつかないほどの短い文だったが、八尾はそのたった数行を何度も読んだ。真っ白な紙にボールペンで書かれた断片。もしかしたら自作の詩かもしれない。そう思った瞬間、紙片を摘まむ指先が痺れるような感覚がした。常に本の返却期限を超過する怠惰さからは想像もできないような滑らかな文字で書かれたそれは、間違いなく『詩の才能』を持つ人間が書いた詩だった。八尾は詩の良し悪しなど全く知り得なかったが、この文章は一朝一夕で書けるようなものではないことだけは感覚で分かった。普段ならこういう物は遺失物としてカウンター横の「忘れ物ボックス」に一定期間保管され、自主的に取りに来てもらうものだったが、八尾は古谷が書いたであろう詩をエプロンのポケットに折れ曲がらないよう慎重に入れた。この男に次会ったらこの紙を渡す。素性も知れない男の遺失物を直接会って渡したいという、感じたこともないような興奮にも、緊張にも似た好奇心を抱いた。

それから四日ほど経つと古谷がいつも通り図書館へやって来た。カウンターに並んだ古谷に小さく会釈し、無造作に積み上がった本を上から引っくり返してバーコードリーダーの光を滑らせ。半分ほどチェックした辺りでパソコン画面を見て「『少女詩集』と、『砂金』の返却期限が過

「ぎてます」と伝えると、古谷は既に見慣れた表情で「ああ、すみません。明後日あたりにまた改めて返却しに来ます」と小さく頭を下げた。お気を付けください、と決まりきった注意をするとまた頭を下げられた。

「あと、これ。先日返却なされた本の間に挟まってましたのでお返しします」

エプロンのポケットから紙片を取り出して目の前に差し出すと、古谷は僅かに驚いた表情をし、すぐに「ありがとうございます。すいません」と紙片を受け取った。渡す瞬間、先日この紙片を読んだときと同じような好奇心が湧いた。この男のことを知りたい。

「ご自身で書かれたんですか」

その言葉に古谷が顔を上げる。そして予想よりも落ち着いたトーンで「そうです。途中ですけど、僕が書いた詩です」と頷きながら言い切った。古谷の素直な視線が八尾の目の一点を見つめたとき、八尾はこの人は世界に存在する一握りの特別な人間なんだと信じた。それはどこか陶酔に似た感覚だった。例えるならタールの濃い煙草を数本吸った後に飲み干す酒のような、一瞬間にして体中に巡り、酩酊させる。これまで奇妙な存在だった古谷の姿が、この世に誤って存在した若き文豪の姿に見えた。

「今度、オススメの詩集を教えてくださいませんか」

詩が読めるようになってみたくて、と付け加えると、古谷は一度紙片に目を落とした後、すぐに顔を上げ八重歯の僅かに大きい白い歯を見せながら「いいですよ」と応えた。八尾は古谷のそのほにかみを見届けて、緊張から柔く組んでいた指先の骨を微かに鳴らしながら、ありがとうございます

ざいます、と小さく会釈した。

思えばそれが古谷との出会いだった。

古谷は詩を作るとき苦しそうな顔を一切しない。八尾はそれが好きだった。文学専攻の大学に通う八尾は、創作をする人間は皆つねに眉を顰め、難しく苛立った表情をする病んだ不良のものだと見て感じていた。しかし古谷は食事でも摂るような当たり前の表情で日常的に詩を書いた。八尾くん、詩書いたんだけど読んでくれないかな、と有無を言わさず手渡してくる詩はどれも魅力に満ちていた。なるほどこれが天賦の才かとその都度感心し、そして古谷の底抜けの才能に恐れを抱いた。その恐れは常に電流のように体内に留まり、古谷がいつか文豪と語られる姿を見たいという八尾の個人的な欲求を刺激し続けた。

埃っぽい風俗街を抜けると潰れた鮮魚店が見える。その角を曲がれば古谷の住む安アパートがある。古谷がTシャツの袖で額の汗を拭った。黒いTシャツの袖が汗で濡れて光る。その部分だけはこの街に似合っていた。垂れ落ちる汗で前髪がべったりと貼り付いた古谷がアパートの階段でゆっくりとバッグを下ろし、肩を大袈裟にぐるぐる回して「暑い」と呟いた。

古谷の住むアパートは違法風俗店街の端に建てられており、大学や高等学校などの建つ表通り

とは一線を画し常に犯罪と性愛が横行している。アパートの前で煙草を吸いながら街を眺めているだけで退屈しない。八尾にとっては古谷の暮らしそのものがサードプレイスのようなものだった。

八尾は日常的に古谷の家に上がり、よく大学生活のことを話した。古谷は八尾の与太話のあと、決まってリビングの畳の上で胡坐をかいて、小さなメモ帳に熱心に筆を走らせていた。ある日八尾は古谷が席を外した際にそのメモ帳を覗き見た。「どう足掻いても僕ら所詮アニマルさ」「一輪咲いた曼珠沙華の花が月のよう」「兎にも角にもこの街のネオン・サインは月を見る」詩の題材か、それともどこかの一節になるのか。散文じみた走り書きの文字が乱雑に連ねられていた。

八尾は掌に収まるほどしかないこのメモ帳を、まるで聖書のように感じた。しばらくして戻ってきた古谷に「古谷さんと一緒に住んでもいいですか」と訊くと笑われた。

「どういうこと。俺と八尾くんが住むの」

はい。駄目ですか。真剣な顔で続けると古谷がまた笑って、テーブルの上で既に温くなった作り置きのお茶を二人分注ぎながら「いいけど、俺何もしないよ」と答えた。別に、古谷の面倒を見るわけでも、八尾自身の面倒を古谷に見てもらうわけでもない。古谷の生活を傍で見えいらればそれで充分だった為、そのことはどうでもよかった。自分のことは自分でするんで大丈夫ですと返せば、古谷は二つ返事で了承した。手が掛からなければ同居人が一人増えようが気にならなうと感じたらしい。そのまま静かに茶を飲み、そっか、ここからの方が大学近いもんね、ともっともらしく頷いた。古谷の家は隣の市にある八尾の通う大学からほど近い距離にある。また八尾

のバイト先の図書館も近かった為、何かと都合がよかった。加えて古谷の家は不思議と自宅より居心地が良い。古谷と会った日に一人で帰る自宅は妙に静まりかえっていて寂寞としている。それなら古谷と寝食を共にした方が精神的にも金銭的にもありがたい。同時に古谷と同じように、この街を見てみたいという気もあった。

「再来週あたりにでも、引越します」

手伝おうか、とらしくもなく古谷が尋ねてきたが、古谷が自らの自室に居ることを想像するとなぜかひどくアンバランスだったため断った。古谷はあっさり退いた。

古谷に居候を持ちかけてから二週間後、八尾は荷造りをすることにした。突発的に決めた古谷との同居。八尾は肉親以外と暮らしたことが無い。共同生活の具体的な想像は全くできなかったが何とかなるだろうと楽観的に捉えていた。寝癖のまま一服してから重い腰を上げ、座椅子の背もたれに引っ掛けていたタンクトップを適当に取って着る。大学生男の一人暮らしは日常生活で使用する物の最低限しか買ひ揃えない。片付けようと部屋を見渡すと、白い壁に垂れるヤニばかりが浮き彫りになって、あまり物が無いことに気が付いた。ほとんどの物を処分しながら、古谷のことを思った。

定職に就いていない古谷は、フリーターの抱く不安や罪悪感を一切感じさせない。古谷は見た目こそ若々しく純朴な大学生のように見えるが、実質その中身は暴力的なまでの非常識が蔓延っている。そして八尾はそんな古谷に神秘すらも感じている。

こうして八尾は大学一年から約二年間居住していた部屋を引き払った。大学生に貸し出す用の流動的なアパートだからか、現在は離島に住んでいるという大家に連絡すると手続きさえすればその日に出て行っても構わないとのことだった為、今日か明日には退去することにした。荷物は最小限でまるで夜逃げか駆け落ちのようだと思った。

鼠色の薄暗いエントランスを抜けて長い階段を何度も上る。一度も住人とはすれ違わない。古谷が建付けの悪い扉を開くと、部屋の中から蒸れた夏の匂いが溢れ返った。ああ、と声を出して古谷がバッグの重みに引つ張られるように玄関に座り込む。サンダルを脱ぎ、古谷を跨ぐようにして先に部屋に上がった。

「疲れた」

暑いね、と古谷が呟く。冷蔵庫から冷えた麦茶を取り出してコップに注いで渡してやると、ありがとうと汗だくのまま微笑んだ。「散歩ついでに歩いて図書館まで行ったのは間違いだっただよ」窓を開け放つと幾分か涼しい風が入り込んでくる。部屋中の窓を開け、リビングに移動した古谷に濡れタオルを手渡し汗を拭くよう促すと、素直に首肯して受け取った。足の裏が汗で湿りフローリングに貼り付く。風呂に入ろうとユニットバスの扉を開くと、古谷は濡れタオルを首にかかけ、早速バッグから本を取り出し読み始めていた。開け放った窓から吹き込む風で薄いカーテンが大きくはためく。陽の差し込むリビングに座り込み真剣に本を読むその様は、少し綺麗だった。

古谷は本当に一日中本を読んでは詩を書いていた。朝は遅く起きて、陽の差すリビングで丸一日本を読む。夜になると詩集を傍らに積み上げて、その側で詩を書く。ほとんど毎日規則正しく、そのルーティンを続けていた。ほっそりとした腕がよれたTシャツから二本突き出して、当然の義務のようにペンを握る。どうして詩を書き続けるのか、いつからそうしているのかと訊いても、「ここ七年くらい前だったと思う。理由は憶えてない」と興味なさに言うばかりだった。気が付いたら詩を書いてたよ、八尾くんもそういうときあるでしょ、気が付いたら寝てた、気が付いたら食事を摂るのを忘れていた、それと同じだよ。と、詩作に熱中していたあまり失念していたという一日ぶりの食事を摂りながら、古谷は当たり前のように言った。

古谷は職に就いていない。就くつもりもないのか、時折、午後にアパート周辺を散歩しては、ここは昼間から歩いても誰にも何も言われないから良い所だとよく言っていた。前に家賃や食費はどうしているのかと訊くと、実家からの仕送りがあるとあっけらかんと言った。両親は古谷のことをどう思っているのだろうか。古谷に両親がいる、という想像はあまり現実味がなかった。黙って仕送りをしているということは、実家はそれなりに裕福なのだろうか。ただ誰にも邪魔されない安住の地としてこの街を選んだ古谷は、きっと両親から穀潰しと追い出されたのだろうかと思った。それなら金が生活していく最低限しかなく、新品の本すらもまともに買えないことにも納得がいった。哀しい人だ、と思った。同時にそんな古谷がとてつもなく愛おしく思えた。

眠気によく似た渴いた風が吹く秋。珍しく古谷が何処かへ行きたいと言い出した。読んでいた詩集から突然顔を上げ、八尾くん何処かへ行こうよ、とのんびりとした声で言う。何処にですか、と訊くと「わからないけど、俺は八尾くんと何処かに行きたい」と真面目な顔をして呟いた。焦がれるように窓の外を見ている古谷を見て、季節ではないが、と八尾は一つ思いついた。古谷が退屈せず居られそうな、非日常な場所。

「植物園行きませんか」

秋に咲く花は少ないが、うら寂しい植物園は人も少なく古谷の好みだろう。案の定、古谷は喜んで賛成した。

スマホと財布だけを手にして、着の身着のまま二人車に乗り込んだ。エンジンをかけると助手席で古谷がシートベルトを締める。「植物園があ、行ったことないな、鰐に会いたいな」ホームページに載った熱帯雨林ゾーンの項目を見ながら古谷が無邪気にはしゃぐ。大通りを家とは反対方向にしばらく走ると街を抜け、大きな海沿いの道に出た。コンクリートの低い壁越しに、黒い砂浜の濁った海が見える。長い水平線を指差して、薄曇りの寒空がくすんだ海と混じり合いそうだと古谷が嬉しそうに告げた。

古谷は本で読んだことのある植物園について、まるで子供のように八尾に話して聞かせた。「静かで湿った温室の中には鰐が居るんだよ、クロコダイル、カリアだ。カリアは身体が物凄く大きいから、世界最大の鰐カリアと同じ名前をしてるんだ、カリアの居る温室には蘭やヤシが咲き乱



れてる、真っ青なジエードバイン、熱帯性の蓮だって咲いてる。カリアはその中心で長い尾をぐるりと巻いて眠ってる。運が良ければ鈴生りのパイヤを落として食べるところが見られるよ」興奮気味に話す古谷の声は高揚して、一気に話し終えてから暑くなったと窓を開けた。

到着した植物園は平日の夕方だけあって廃墟のように空いていた。浮かかない顔をした受付員から入場券を買う。学生じゃない古谷は少し割高だった為ひっそりと払ってやった。間拔けな形のゲートをくぐると、閑散とした園内にまるで生き物の卵のように幾つも球体ドームがある。ドーム内では疑似的に熱帯気候を再現している、とパンフレットに書かれている文字を古谷が声に出して読んだ。そのまま目の前のドームを指差す。

「八尾くん、あそこ行こうよ」

併設し合ったドームの入り口に連れ立って入る。入り口のガラス戸を潜った途端に湿度のある熱が体中を包み、まるで蛇に丸呑みにされたみたいだと思った。厚いガラスの向こうから曇り空の微かな日光が差し込んでいる。貼り巡らされたガラスがプリズムのようになり、微かな光ですらも乱反射させて金色に輝く。客引きの為か、入り口近くには色味が鮮やかで見映えのする花が植わっていた。

「ブーゲンビレアだ、クレマチスも咲いてる」

古谷が背筋を伸ばして息を吸う。興奮して急くように花を見る古谷は、早足にドーム内を行ったり来たりして、アナナスの燃える赤色に心を奪われたり、マダガスカルジャスマシンの冷涼な香りに目を細めたりしていた。パンフレットによると四つ目のドームが水源地帯を模したエリアに

なっているらしい。古谷にそれを告げると、本当に鰐が居るかも、と息巻いた。

「八尾くんは何の花が好き」

併設したドーム内を繋ぐ通路を移動しながら、古谷がにこやかに訊ねた。

「極楽鳥花が綺麗でした」

大体の花の名前はあまり憶えていない。一番印象に残った鮮やかな花を答えると古谷が意外そうな顔をした。八尾くんって意外だね、静かだからもっと大人しい花が好きだと思っただけど、極楽鳥花か、派手だけど確かに綺麗だよ、と呟く。その言葉になぜか気恥ずかしくなって、はい、と素っ気ない返事をした。

「極楽鳥花の花言葉は「気取った恋」だよ。八尾くんらしくないね」

恋だって、と笑う古谷に苦笑した。極楽鳥花。細く鋭い茎の先端から橙の花弁が破裂するように開いていて、その中心には二枚だけ青い花弁が潜んでいる。それを憶えていたのはその花が古谷の詩の持つイメージに似ていたからだというのは黙っておいた。

四つ目のドームに入ると川が流れていた。湿地帯特有の泥臭い水の香りがする。その香りに混じって噓せ返るような甘い匂いがした。水源エリアと看板のあるここは、川の上流に人工の滝がしつらえてあって微かに涼しい。八尾は顔を上げて頬を掠める霧を感じた。その間も爽やかな水の中に粘っこい蜜を混ぜ込んだような香りがしている。鼻を吸りながらドームの中心に架かった橋を渡ると、橋の下いっぱい蓮が咲いていた。大ぶりの深緑の葉の間、突き出すように咲いた華から甘ったるい香りがする。ああこれか。八尾は初めて見る蓮の花弁を覗き込む。花托と呼

ばれる華の中心部分からかぐわしい香りがしていた。薄桃色の柔らかそうな花卉が黄金色の花托を愛おし気に包み込んでいる。古谷が橋の下を覗き込み、大きな蓮だ、すごい匂いだねと笑った。形の良い蓮の葉の上に滝から飛散した水滴が溜まり、小さな碗のように水たまりを作っている。その澄んだ翡翠色をとても綺麗だと思った。

「あっ」

古谷が声を上げる。蓮から目を逸らし古谷の方を向くと、巨大な鰐が居た。ドーム内に作られた鰐の水槽だった。沼地に腹這いになった鰐がじっと水面を凝視している。口先の細く尖った凶悪な顔つきの鰐。ガビアルだ、と古谷が息を飲むのが聞こえた。鰐は微動だにせず泥の中に身を屈めて、顎の先だけを水に浸けている。茎から離れた花卉が滝の波紋で流されて、静かに鰐の眼前に流れ着いた。それを合図にしたように鰐がゆっくりと歩きだす。そのまま目の前の水の中に溶け込むように入ってしまった。

「ガビアルは大人しいんだ。人間は襲わない鰐だよ」

古谷が水中のガビアルを食い入るように見つめたまま呟いた。ガビアルは目と鼻先だけを水面に出して滑る様に泳いだ。

「あいつ名前は何だろう。カリアよりは小さいね」

古谷が橋の上から移動し、ガラスに鼻先を擦り付けるのではないかと思うほど近づけてガビアルの目を見ていた。ガビアルは静かに古谷の目を見つめ返している。その姿は古谷と鰐が、何か特別な言語を使って会話をしているんじゃないかと錯覚するほどだった。古谷の目が瞬きを忘れ

て、男にしては長い睫毛が空中にびんと張る。じっと鰐を凝視する古谷のその目は鰐に似ている。大人しい動作をしても何を考えているのか掴みどころがない、不思議な目。八尾はガビアルを見つめる古谷のその目が少し怖かった。

結局古谷はガビアルに夢中になり、後半のほとんどの時間を水源地帯エリアで過ごした。ガビアルは古谷の目を見つめ返しながら時折瞬きをする。その度に古谷は嬉しそうに微笑んだ。

鰐の目を忘れないうちに、と帰りの車で狂ったようにノートに鰐の質感や息遣いを書き綴っている古谷を見て、また二人で行きたいと思った。その日見た古谷の目は風呂に入っているうちにぼやけた記憶になって、白昼夢のような思い出になった。

古谷がおかしな行動をし出したのはその年の暮れだった。ある日八尾が大学から帰ると、古谷が履歴書を書いていた。それにひどく焦り、何をしているのかと問うと職に就くと答えた。その言葉を聞いた途端に足を拘われたような気になった。自分でも理由はよく分からなかったが、就職を考える古谷に対しどうしてそんなことをするのか、という激しい怒りを抱いた。

「働くんですか、」

なぜ、どこで、何して？ 矢継ぎ早にそう問い詰めそうになって、すんでのところで飲み込む。すると古谷は当たり前のように「働くよ。表の新しくできたコンビニ。求人してたから」と答えた。新品の履歴書には小綺麗な格好をした古谷の写真が貼り付けられている。その真面目ぶった顔に

苛立ちを覚えた。当然のように働くと言った古谷の背中を見ていると余計なことばかり考えしてしまう。適当なサンダルを履いて、煙草吸ってきますと早口に告げて玄関を出ると、背後から「いつてらっしやい」と朝出る時と何ら変わらない古谷の声がした。頭が痛い。そのまま階段を駆け下りて、アパート横の駐車場の低い塀に腰掛ける。煙草を啞えマッチを擦ると暮れかけた駐車場に一瞬だけ明るい光が灯り、すぐに消えて細い煙だけが空中に伸びた。燃えて曲がったマッチ棒を見ながら、古谷との生活のようだ、と思うと悲しくなった。煌めく瞬間はほんの少しで、あとは燃え滓。煙を肺一杯に吸い込み、古谷は、と八尾は思う。古谷は孤独な暴徒だ。一人きりでこの街に立ち、犯罪と性愛の温床になったこの街から、何か巨大な壁を打ち壊そうという目をしている。

古谷を見ていると、八尾は生活の中で度々、自身が何か薄く張った膜のようなものに覆われている気がした。身体を柔く包むその膜は、八尾が何をしても慢性的な苛立ちと窮屈感を与える。その度に古谷の自由さを求めた。古谷のその溢れる自由な暴力性がいつか膜を引き裂き、八尾自身を誕生させてくれるのを待ち望んでいた。詩以外の何物にも興味を示さない古谷の盲目さ。その目が今ゆっくりと、詩以外に開かれようとしている。煙草を啞えたまま俯くと火種がアスファルトに落下した。数本しかない煙草はすぐに無くなっていく。サンダルから突き出した足先が冷えた。古谷が働く。あの古谷が。あれだけ没頭していた詩の世界から抜け出そうとしている。どうしてなのか、自分が古谷と住み出したからか、何か古谷に悪影響を与えるようなことをしたか、幾ら考えても分からなかった。

深夜二時になった。ぬるい茶を飲み干すとザラついた茶葉の塊が舌の上で拡がる。あのあと結局寒くなり、煙草を吸い尽くしたあたりで手持ち無沙汰に部屋に引き返した。家出のようなガキ臭いことをしても古谷は変わらない。部屋に戻ると履歴書を書き終わったのか古谷は既に読書に夢中だった。

空腹からキッチンに立つ。お湯を沸かしインスタントの袋ラーメンを二人分作っていると「いい匂いがする」と古谷が呑気な声を上げた。

リビングで顔を突き合わせて飯を食う。この時ばかりは流石の古谷も本を置いた。安い袋ラーメンのスープは濃いから飲まない。麺だけを吸いながらネットニュースを読んだ。煙草が吸いた

い。  
食べ終わると古谷が唐突に「八尾くんはハララカに似てるよ」と言った。古谷の会話は常に突拍子もない。碗に残った油の浮く茶色の汁を流しに捨てて。ハララカとは南アメリカに生息する蛇で、毒性が強く一度咬まれると完治はほとんどできない毒蛇だ。古谷は八尾がそれに似ていると言った。色の暗いシャツを着ているからか、顔か。別に興味が無かったから聞かなかった。古谷が背後の本棚から大きな生物図鑑を取り出して、ほらこれ、と重たい背表紙に手を当てて付箋の刺さった頁を広げる。覗き込むと、首を擡げこちらを見ているハララカと目が合った。笑っているようにも見えるその顔は、今にも大口を開けて目の前の獲物に飛び掛かりそうな緊張感をも湛えている。八尾の一重で切れ長の目がその頁を見つめると、その横顔をまじまじと見ていた古谷が似てるでしょと笑っていた。そうですかね、と首を傾げて、さも興味ありげに図鑑を眺め

ながら、八尾は古谷の就職について考えていた。その日は適当に大学のことや最近観た映画のことを話して寝た。あまり眠れなかった。

翌朝洗顔をし、顔を上げ目の前の鏡に映った自らと目が合ったとき、両目のぎよろりとした爬虫類のような男に見つめ返された。濡れそぼった八尾自身の顔だった。似ている理由はなるほど顔か、と下着姿のまま蓋を下ろした便座に横向きに腰掛け、買足した煙草に火を点けながら思った。ハララカ。鰐とどっちが強いんだ。鰐の喉元に噛みつこうと飛びかかるハララカを見てみたい気になった。ユニットバスの浴槽の縁に折り曲げるようにして乗せた足の爪が伸びている。換気口に向けて煙を吹いて、洗面台に灰を落とした。

一時頃に友人のミサキに今から会わないかという連絡を送る。すぐに『ええよ』と簡素な返事が返ってきて、一時間後にはアパートの駐車場にバイクで乗り付けて来ていた。ミサキがヘルメットを取ると脱色した髪の鮮やかな金色が陽光で照る。男にしてはやや長い中性的な髪型が、不健康に白い輪郭を包んでいる。

「何や八尾ちゃん、どっか連れてってくれるん」

鋭い釣り目を瞬かせてミサキが笑う。期待を含んだその言葉に「行先は決めてないけど、そうしようかな」と返すと、派手なパーカーのフードを揺らしてミサキがバイクから降り、ヘルメットをミラーに刺した。寒さから逃げるように二人で車に乗り込む。

「ほなドライブやな」

行こ、と助手席のミサキが上機嫌に言う。それもそうだと車を出した。のろのろと走り出した

銀の軽自動車静かな街を抜け出す。ミサキに目をやるとダッシュボードに乱雑に入ったCDを漁っていた。ミッシェルのCDが入ってる、好きだろ、と訊くと大袈裟に声をあげてCDを引っ張り出した。前屈みになると金色の襟足から白いうなじが覗く。ふと見えたその白さはまるで汗をかかなさそうに見えた。

「神の手は滲むピンク」となる声が車内に響く。ミサキが煙草の箱を開け閉めしながら、八尾ちゃん吸ってええ、と訊く。それに首肯すると助手席から伸びてきた手が八尾の唇に煙草を一本挟んだ。吸い口が紺色をしたこの煙草は海外産らしい。アンタも吸いなはれ、とミサキの愛用するジッポライターの炎が細い煙草に触れ、微かな火種が呼吸に合わせて燃えていく。煙が充満する前に窓を開ける。

「きのう古谷さんが働くって言ってた」

宛てもなく車を走らせながら話し出すと、車窓から吹き込む風に毛先を踊らせていたミサキが「古谷？」と首を傾げて、八尾ちゃんが一緒に住んでるやつ？ と何度目かわからない質問をした。そう、と言えば「働かなさそやのにな、何でやろ」と目を伏せて煙を零す。何でだろう、八尾はそれが一番知りたかった。

「俺は働いてほしくなかった」

素直にそう言えば何だか悲しくなった。ドアの取っ手の隙間に入れていた携帯灰皿に灰を捨てて、また甘い味のする煙草に口を付けた。八尾ちゃんは何であんなが好きなんや、おかしいやろ、とミサキが笑う。古谷じゃなくて才能に惚れていると言いつつ直した。ミサキの細い目が愉快そ



うに歪められる。お前も大概「あんなん」の部類だ、とハンドルを握り直した。とつくに街を抜けた車はいつの間にかビルがちらほら建つ都市部に差し掛かっている。

「でもアンタ、働くのが嫌ってなんでや、働いてくれたら嬉しいがな、金も入るし昼間っから家におらんのやろ。昼間中家におられたら好きなこともできんわ。俺も兄貴が働いとらんかったときは一人でネカフエ行つてしてんねんぞ。そんな最悪や。かなんではんま、終わつたあと家に帰るまでクソ踏んだみたいな気になる」

ミサキが左手の指先に挟んだ煙草をひらひらと振りながら話す。その苦々し気な表情に思わず噴き出した。八尾ちゃんはどうしてんの、と訊かれて俺はいいよと苦笑する。「勃たんのか」と目を丸くしたミサキの後頭部を平手で打ちながら「勃つ」とだけ言っておいた。

「いった。おいやめろや昨日兄貴にも同じとこ殴られてんねんぞ。煙草一本盗んで吸うたんがバレたんや、ボコボコに怒られたわ」

間抜け、とこぼすと誰がやねんと抗議された。兄貴と言ってもミサキと住んでいるのは実兄ではない。ミサキの中学時代からの先輩で、ミサキが本当の兄のように慕っている人だ。一度だけ見た「兄貴」の姿は高身長で坊主頭の男だった。いかにもやんちゃそうな多数人と肩を並べている写真の中で、「兄貴」は笑顔すらも想像できない仏頂面でこちらを睨んでいた。その人も今は鳶職をしているらしい。

「まあその古谷っちゅうんも八尾ちゃんの兄貴みたいなものか、怒ると怖いん？」

ミサキから拝借した二本目の煙草に火を点ける。古谷は怒らない、と言うと珍しいものを見る

ような顔をされた。そのまま目にかかった前髪をかき上げながら「変わったやつちやな、八尾ちゃんに似てるわ」と笑った。ミサキ、俺は怒るよ。現に今、古谷さんに怒ってる、意味もわからないけどあの人をぶん殴りたいと思ってる。そう一気に言う、「えらい本気やな」とミサキが愉快そうに笑った。

古谷が働き出して一週間経つ。表通りにオープンしたコンビニに勤務しだした古谷は、業務態度が良いと店長に気に入られているらしい。そんな話を嬉々として話す古谷に腹が立つ。寂れた街に便利さを、とオープンされたコンビニは買い物客が絶えないという。街中に貼り出されたアルバイト募集中の張り紙を見る度、この街に便利さは要らない、と苛立った。この街は昼間はこんこんと眠っている。そんな街の眠りを妨げるような店など要らない、八尾は眉間に皺を寄せた。もっと癪に障るのは古谷が女の話をしだすようになったことだった。古谷より先にアルバイトをしていたヤナギという女が、古谷の話題に度々登場した。「ヤナギは猫と爪の長い男が大嫌いなんだ、変わってるよね、爪の長い男って猫みたいじゃないですかっしょっちゅう言うんだよ」ヤナギのことを話す古谷の顔はいつもより少し優しい感じがして苛ついた。ヤナギに関する話は大抵つまらない話題だった。近頃の古谷の話すことといえば専らヤナギのことでうんざりする。つまらない女の話なんか聞きたくもなかった。

この日はバイト前の古谷から食事に誘われ、講義後に喫茶店に行った。席に座るなりヤナギの

話をされたのですぐに帰りがたくなった。暖房のよく利いた薄暗い店内は客があまり居ない。古谷はダーズリンティーを、八尾はブラックコーヒーを注文した。古谷が慣れた手つきで角砂糖を入れて、男の手には華奢な金のスプーンで器用にかき混ぜた。ここよく来るんですか、と訊ねるとそう、いいところでしょと言いながら頷く。窓際の席にヤナギと二人で座る古谷の姿が容易に想像できた。何となく嫌な気持ちになる。

「最近、詩、書いてますか」

古谷は働きだしてから日中寝て、夜中は夜勤で家を空けるというルーティンに変化していた。図書館にもほとんど訪れない。

「詩はあんまり書いてないかな」

古谷が目の前に置かれたパフェを頬張る。詩を書いていないことに対する興味はあまり無いらしい。八尾くんも食べる、と甘ったるいチョコアイスが鼻先に突き出された。胃がむかむかする匂いだ。顔を逸らして断った。

「美味しいのに」

細い銀のスプーンがマーブル模様のアイスに沈み込む。詩を書かない古谷からは毒気のようなものが感じられない。古谷の内に渦巻く凶暴性が身体のどこかに空いた穴から漏れ出してるようだ。この穴を空けたのはヤナギだ。ヤナギとは前に一度だけ会った。ヤナギは八尾にとつて身近で唯一接しづらい人間だった。初めて会ったときは今時な栗毛色のロングヘアにゆるいウェーブをかけて、ある程度整った鼻に銀縁の可愛らしい丸眼鏡をしていた。古谷から「バイト先で

知り合つた子が八尾くんと会つてみたいって言うから紹介したくて」と言われ呼び出されたファミレスで、古谷の側に行儀よく座っている姿は何だか滑稽で笑えた。たらこパスタを注文したヤナギは八尾を見るなり「八尾くんって天然パーマなんですね」と言つて笑つた。それが癩に触つたから何を返したかは憶えていない。「ヤナギは俺がコンビニで働く前から知り合つてたんだ。先にあのコンビニでヤナギが働いてて、それから仲良くなつたんだよ」とはにかむ古谷の口から覗く八重歯が白く照つた。古谷が席を外し手持ち無沙汰になつて、小洒落た銀縁の丸眼鏡を指して「視力悪いんですか」と訊くと伊達メガネだと返されて何だか無性に苛つた。それだけ憶えている。

八尾はヤナギのことが心底嫌いだ。どうして古谷を優しくさせるのか。昼間、薄暗い部屋でのっそりと身体を横たえ目を閉じる古谷を見ると死にゆく鰐を見ているようで嫌になる。抜け殻になつた古谷の中には何が残るのか。想像したくもなくて目の前の古谷から目を逸らした。この後はまた予定があるから先に帰つてと古谷が上機嫌で話す。嬉しそうな古谷の声を聞いていると喉の奥に熱の塊が詰まつたようになって、少し温くなつた珈琲を一気に煽つた。

古谷と別れた後、一人で風俗街を歩いてみることにした。夜間になり昼間よりも僅かに活気がある街は、ネオンをぎらつかせどうにか若い男を貪ろうと躍起になっていた。タンクトップを着た痩せこけた女が、ホットパンツから突き出した生白い足をくねらせて街灯の下に立っている。唇だけがぬめぬめ光つてナメクジのようだ。ヤナギも古谷と二人きりで会うときナメクジのよう

な唇をしているのだろうか。傍を通り過ぎると女が何やら声を掛けてきたが無視した。ふと古谷の未来を想像して、この街に住んでいる人間のようになったら殺そうと思った。老いて醜くなった古谷が安物のマイクを握って音痴な歌を歌ったら、生白い足をくねらせる女の肩を抱いたら、そのときはこの手で古谷を殺そう。八尾は老いて見る影も無い古谷に馬乗りになって首を絞める自身を想像した。風俗店の明かりを眺めていると、そんな未来がすぐ鼻先まで迫ってきているような不吉な死の感覚がして想像を辞めた。

いつの間にか吸い始め、ついに最後の一本になった煙草に火を点けながら自販機で真新しい煙草を購入していると、ポケットに入れていたスマートフォンが鳴った。買ったばかりの『HOP E』を胸ポケットに滑り込ませる。画面を見ると『古谷』と表示されていた。通話をタップする。ふと鼻先に迫る死が脳裏を過ぎった。

「もしもし」

八尾くん、八尾くん今どこ。間抜けな声が出た。一瞬誰だか分らなかつた。しつこく「八尾くん」と呼び掛けてくる声は古谷だった。

いま何してるの。俺ね、八尾くんもっと恋愛とかした方がいいと思うんだよ。人って一番好きな人ができるよ、その人の為なら死んでもいいって、思うようになるんだよ。八尾くんそんなこと思ったことないでしょ。それはだめだ。もっと八尾くんは、人を愛する心を知るべきだよ。他人の為に、命を捨てる覚悟を、持つべきだよ。八尾くんは好きな子とかいないの。

間延びした古谷の声がする。全身の血液が冷えていくような気分になるが、反対に身体はじっ

とりと汗ばんでいく。苛ついてスマートフォンを強く握り締めながら意味も無く足先を見つめた。好きな人間はいない。「いません」とぶっきらぼうに答えると古谷が笑う。舌打ちをしそうになるのを必死に堪えた。頭全体が熱く熱を持ったようになって、首筋に妙な汗が流れた。古谷さん、酔ってるんですか、だとしたら切りますよ。返事は無かったが、もしかしたら今古谷のすぐ傍に誰かが居るのではないかと思った。八尾の知らない女か、もしくはよく知ってる女。

「じゃあ、八尾くんはどんな子が好きなの」

腑抜けた声なんか出しやがって、何だこいつは、誰だ、今日も詩を書かないのか、ふざけるのもいい加減にしろよ。引き攣った片目が痙攣した。八尾は舌打ちをした。

「いねえよそんなの」

反射的に声を荒げた。それに古谷がまた笑った。苛ついて胸ポケットに入れたばかりのまだ封を切っていないホープを引つ張り出す。マッチを買い忘れた、車に余りがあっただろうか。八尾くん、それじゃ駄目だよ、八尾くんのことを好きな子なんて大学に沢山いるんじゃないの。古谷の愉快そうな声が路上に響く。蛍光色に輝くネオンが、箱をびっちり包むビニールの封の上で煌びやかに滑った。「俺に恋愛は難しいと思いますよ」これ以上古谷の戯言を聞いてると腸が煮えくり返りそうだ。駐車場へと急ぐ。こめかみが熱い。

「切りますね。おやすみなさい」

古谷が何か言う前に電話を切った。そのまま携帯をマナーモードにしてからズボンのポケットに捻じ込んで、車のキーを押しながら煙草の封を切った。運転席に乗り込むなり天井のマップ

ランプを点けて、ダッシュボードを漁る。助手席側のダッシュボードにまだ十本ほど入ったマツチ箱があった。窓を開けてすぐに煙草に火を点ける。口内いっぱいタルの苦い味がして、煙と夜風の混じる良い香りがした。五分ほど吸ってから啜え煙草のまま車を発進させる。なるべく古谷の愚行を忘れようとして、普段は聴きもしない洋楽をかけた。窓から突き出した右肘だけが別世界にあるように涼しい。先刻の怒りが渦を巻いて、自然と涙が出た。ふざけんな、何でだよ、お前笑ったじゃねえか。恋だつて、つて。ふざけんな。怒りで涙が溢れて、慌てて車を路肩に停め直した。

古谷が働きだす前から、二人は面識があった。そういうことか、とわかった途端に全てが馬鹿らしくなって、頭が冷えていった。それに気が付いたときは涙が止まった。

その後はしばらく宛てもなく辺りを走り、ガソリンを入れて家の近くの路肩に停めると、そのまま車で寝た。翌日の昼頃に家に戻った。幸い古谷は留守だった為、手早く風呂に入り服を着替え大学へ向かった。

講義は退屈だった。ぼんやりとした膜のような感覚が強くなる。動きづらい、と感じればその感覚はより一層濃くなっていった。ノートの上に腕を置いて倒れるように机に凭れる。古谷は今何をしているんだろうか。ぼんやりと古谷の事を思った。

「八尾ちゃん何してんの」

肩をつつかれ顔を上げると、遅刻して来たミサキがいつの間にか横に座っていた。遅刻しておきながら人のノートの端に何か落書きをしている。咎めるような目で見ると「ごめん」と笑った。

廊下の電灯が切れかかっている冬の安アパートは一層寒々しい。階段を一段登るごとにもの悲しい気持ちになっていく気がした。鍵束を左手に扉を引くと、「おかえり」と古谷の明るい声が出た。開いた扉から抜けていく空気の中にほのかに良い香りが混じっている。キッチンから漂う懐かしい匂いは少し甘口のスパイスの香り。古谷が珍しく夕食を作っている。

「カレーですか」

肩から提げていた小さな鞆を寝室の角に置き、キッチンに立つ古谷の後ろに立った。古谷の肩越しに見た鍋の中には野菜の歪なカレーライスがたっぷりと入っていた。カレーだよ、八尾くん好きでしょ、と古谷が笑う。

「好きです。ありがとうございます」

鍋を見つめているとまた腹の底から苦々しい思いが湧いてきたので慌てて目を逸らした。鍋は泡を浮かべて、黄金色の液体の中に熱を秘めている。歪な野菜は今の古谷に似ていた。

「八尾くん、来年の夏さ、三人で植物園に行こうよ」

鍋をかき混ぜて古谷が言う。液体の隙間からあふれ出た湯気がキッチンの天井に備え付けられた蛍光灯を包み込んだ。部屋が白く煙る。八尾くん来年の冬には卒業でしょ、その前にもう一回行こうよ。

「ヤナギも含めて三人で」

駄目押しのように古谷がもう一度言う。三人で。八尾は思わず眉を擡めた。この世の楽園のようだった植物園に立つヤナギを想像して嫌な気持ちになった。楽園に割り込む恐ろしい化物。



八尾は醜い女の姿をした化物が古谷の居る楽園を破壊するところを思い浮かべた。あの繭のようなドームが割れて、ありとあらゆる熱帯の植物が群れをなして逃げ出していく。それはきっと古谷の、鰐の血肉だ。

「ヤナギに植物園の話をしたら行きたいって言ってさ」

あの楽園を、古谷はヤナギにどんな風に語ったのだろうか。八尾の中に残る白昼夢のような植物園の思い出は、蓮の中を我が物顔で歩くガビアルと同じ目をする古谷の姿だった。古谷が平皿に白米をよそっている。「ヤナギも楽しみにしてるよ」と笑う古谷の顔を殴りたくなった。死んだ鰐の目。濁った白目をして笑う古谷に哀しみの影はどこにも無かった。

湿った熱がしつこく尾を引く夏の終わり。晴天に巨大な樹木のように白雲が伸びていく頃、八尾は窓際に腰掛けて、しつこく吸っていた煙草を傍の灰皿に押し付けた。肺に残っていた煙を吐き出しながらベランダ用サンダルを放り出して立ち上がり、窓を閉ざす。灰皿は窓際に置いたまま、玄関先に出て外出用のサンダルを履いた。扉を開ける前に振り返って見回した部屋は真夏の屋中だというのに薄暗い。何となく玄関に散乱した履物を並べ直していると背後の扉が開いて、ヤナギが顔を覗かせた。「八尾くん大丈夫？」何が大丈夫、だ。何も大丈夫じゃないぞ。八尾は今猛烈に嫌な気持ちだった。

「はい。今出ます」

眩いて古谷の部屋を後にする。駐車場に降りると古谷は既に後部座席で植物園のパンフレットを熱心に読み込んでいた。運転席に乗りエンジンをかけると、案内するね、とヤナギが助手席に乗り込む。上品な甘い香水の匂いがして、冷房の向きを変えた。

「じゃあ八尾くん、よろしくね」

シートベルトを引っ張るヤナギの白い手首に小さな桃色の腕時計が光る。前に会ったときは無かった時計だ。シートベルトを締めてアクセルをゆっくりと踏み込みながら、暑中の街に車は滑り出した。

「植物園、三人で行けるの嬉しいな、古谷くん八尾くんの話ばかりだから。八尾くんの大学の話とか、好きな食べ物とか、八尾くんが行ったところとか、何でも私に話すんだよ」

そうかよ。車中はまだ暑い。八尾は信号の停車線ぎりぎりまで慎重に車を寄せながら、適当な相槌を打った。空調の風速を上げる。古谷はとっくにパンフレットを読み終わって、持参した詩集を読んでいた。ルームミラーでちらとそれを見たが、目は合わなかった。

「八尾くんってどこの大学通ってるの」

ヤナギがサンダルから突き出した足先のネイルを気にしながら訊ねる。退屈そうな顔だな、とヤナギの横顔を一瞥して「この近くの文系の大学です」とだけ返事をした。ようやく冷房の効きだした車内は快適な温度となり、首や胸に纏わりついていたじっとりとした汗が冷えた。涼しい車内から茹だるような路面を眺めていると、不思議と留飲の下がるような気持ちになる。大通りが近くなるとハンドルを握る手からも徐々に力が抜けていった。次どこですか。と言えば

ヤナギが「えっとね、右」と妙な上機嫌で答えた。

ヤナギはよく笑う人で、八尾たちと頻繁に会いたがった。健康的な肌色で少し鼻上にそばかすがあるが、いわゆる美人。そのくせ顔に似合わず矢継ぎ早に話すから苦手だった。

「八尾くんって好きな本とかある？」

濡れたように真っ黒な路面は今の俺の目に似ている。ハンドルを握り、まっすぐと前の車を見ながら「無いです」と話を終わらせた。青い空は濼んだ海との間に綺麗なコントラストを作っている。その狭間を白い鳥が飛んでいった。

夏だというのに数台ほどしか車はいなかった。前回と違う受付員から入場券を三枚買う。古谷の分の代金はヤナギが払っていた。

「懐かしいな」

古谷が辺りを見回しながらゲートをくぐる。夏の真昼に見る園内は以前と違って活き活きとした花々に溢れて見えた。「あそこだよ。熱帯ドームだ」古谷が走り出す。それを追いかけるようにヤナギとドームへ向かった。夏空の下に連なるドームは内側にたっぷりと湛えた緑を揺らして人々を誘っている。夏場はミストが撒かれているらしい。中に入ると俄雨のような細かな水滴が肌にかかって微かにひんやりとした。静かなドーム内は夏の光に満ちている。入口に滝のように垂れ下がったブーゲンビリアを見たヤナギが「綺麗」と小さく呟いた。小麦色の横顔に当たった光の中に霧が舞う。

「ここね、鰐が居るんだよ。四つ目のドームに鰐が居る」

古谷がヤナギの方を振り返りながら子供のような目を向ける。通路に突き出さんと伸びているシダに指先を触れさせながら、鰐が居るの、見てみたい、とヤナギが弾んだ声で返した。足早に水源地帯エリアに向かう二人を見送って、通路脇に植わったカランコエを眺めた。密集したカランコエは餌を求めて群がる金魚に似ている。ギザギザした葉に触れると指先がくすぐったい。しばらくそれを見ているとヤナギが引き返してきた。

「八尾くん大丈夫？ 古谷くん先行っちゃうよ」

大丈夫です、先行っててください、ゆっくり見て行くんで。そう告げると曖昧に頷いたヤナギの背が遠くなる。耳を澄ますと水のせせらぎが聞こえて心地良い。古谷は今頃鰐を見ているだろう。八尾はガビアルが分厚いガラス窓を叩き割って古谷とヤナギの目の前に這い出る空想をした。大口を開けたガビアルが脳内で喋り出す。古谷を呪うのか。いや違う、ヤナギが憎い、古谷に近付いたヤナギという女が許せない。ガビアルは水の中から八尾を見ている。お前はハラハラだろう、お前の毒で簡単に殺せるぞ。

頭の中のガビアルと目が合った気がした。はっとして顔を上げる。カランコエは燃えるような赤色をしていた。涼やかに茂る花々の隙間から古谷とヤナギの話し声がする。八尾は足早に水源地帯エリアに向かった。古谷とヤナギはいない。鰐の水槽を振り返ると、ガビアルは此方に背を向けて水の中を泳いでいた。蓮の香りが鼻を衝く。橋の上から鰐を見ていると、目の前に突き出した蓮の花弁が一枚、ぼたっと鈍い音を立てて水面に落下した。

八尾はその日一日中、古谷とヤナギから少し離れた位置で行動した。身体が重たい。目を瞑ると薄膜の向こうから此方を見ているガビアルが居る気がして落ち着かなかつた。テラス席に座っているとヤナギが三人分のアイスクリームを買ってきた。薄ピンク色をした桃のアイス。さっぱりとした良い香りがした。早く帰りたい、アイスにプラスチックのスプーンを突き刺しながら思った。

「帰りどこかでご飯食べようよ」

上機嫌でアイスを食べる古谷の誘いは断った。喫茶店でチョコレートアイスを頬張る古谷の姿を思い出した。舌先に触れているアイスの冷たさにもうんざりする。帰り際にもう二度とここには来ないだろうと思った。もうここは楽園じゃない。アイスの冷たさに支配された冷酷な鰐の国だ。あの鰐とも二度と会うことはない。瞼の裏で尖った口先を歪めさせたガビアルの目が光った。

地べたを這う寒風が吹く冬。忙しかった就職活動と卒業論文がようやく一段落した後は、飲み会やインターンであつという間に時間が過ぎた。卒業式の前日、八尾は久しぶりにミサキと会った。ミサキは髪の毛の脱色が少し落ちて、つむじの辺りから地毛の黒髪が出ていた。夕方に入店した焼き肉屋は家族連れでこつた返している。喫煙席を選択して案内されるまで三十分ほどかかった。

「八尾ちゃん卒論お疲れさん、仕事決まったんやっつて？」

すつかり伸びた髪を髪紐で結んだミサキが煙草に火を点ける。八尾は一般企業に就職が決まっ

た。この街から少し離れた都市部にある広告代理店。この就職をきっかけに古谷の家からは出て行くつもりだ。そう言うときミサキが目を丸くして驚いた。

「八尾ちゃんあんな好きやったんに。ほんまに離れるん」

「今の古谷さんには女がいる。ちょうどいいよ」

店員が七輪のスイッチを入れる。熱を持ち始めた七輪越しにミサキが心底面白そうな顔をした。「何やあの兄ちゃん女できたんか、はよ言うてくれやそんなおもしろいこと何で黙ってんねんな、どんな女？ 絶対うっとい女やろ」と笑いながらタッチパネルを操作して大皿の肉を幾つか注文した。うっとい女、対して面白くもない話を延々と話すヤナギを思い出して薄く笑う。「鬱陶しい。悪意は無いけど」と言うときミサキが仰け反って大笑いした。

「えらい女やな、あんな男のこと好きなん八尾ちゃんだけで充分よ、かなんなほんま」

先に運ばれてきた肉を七輪に乗せる。肉の焼けていく音がして空腹が刺激された。ミサキが生焼けの肉を落ち着きなく何度も引っくり返す。

「どんな姉ちゃん？ やっぱ可愛らしい子か、子持ちとかちやうやろ流石に。せやったら危ないぞ、最近俺の知り合いが子持ちの女と付き合ったら旦那と別れてへんかってん、旦那の家族も乗り出して裁判よ。危うく慰謝料取られるとこやったって、肝冷えたでほんま」

流石に子供はいないと否定すると「ほなええがな。俺も可愛らしい姉ちゃんと付き合いたいわ」と悔しそうな顔をした。そういうえば卒論は終わったのかと問うときミサキがトングを片手にピースサインをする。完璧よ八尾ちゃん、と口の端を釣り上げた。ミサキのいるゼミの卒論は簡単な

内容でも受理されるらしい。飲んだくれの先輩から貰ったレポート改変して作った卒論出したつたわ、と煙草を揉み消して舌を出した。

「最低だな、お疲れ」

「おおきにね。アル中飲んだくれやけど賢いねん、ほんに助かるで」

焼けた肉を均等に取り皿に放り込みミサキが拝むように両手を合わせる。そのまま運ばれて来た白米にカルビを乗せて口に放り込み、んん、と感嘆の声を鼻から漏らした。八尾もそれに倣うように肉をつつく。

「就活はどうしてた」

「俺はせんな、もうちよいしたらするわ」

ミサキが髪を結い直す。もう漫才師にでもなるかな、といたずらっぽく笑った。「漫才師なったら八尾ちゃんツッコミしてや、そんなときは一緒に養成所行こ」と意気込むミサキに「考えとく」とだけ答えると、真面目やなあ、ほんまになつてもらうでと念を押された。塩コシヨウをまぶした肉を頬張りながら、少しなつてみてもいいかもなと何となく思った。

「明日でついに卒業よ、高校の卒業式ってエグい盛大やったけど、大学つてどないなんやろ」

ミサキが新しい肉を注文する。「兄貴の友達なんか皆中卒でや、最初俺が大学受かった言うたら胴上げの大騒ぎやったわ、卒業式も駆けつける言うて意気込んで、オッサン連中が恥ずいわほんま」とミサキが照れたようににかんだ。その姿を見ていると少しだけ切なくなる。七輪を見つめてらしくもなく感傷に浸っているとミサキにからかわれた。

大皿を幾つか空にして、小休止とばかりにミサキが煙草を取り出して唇に啞えた。それに誘われるように八尾も煙草を啞える。二人分の煙が七輪の上の換気口に吸い込まれていく。その間中、ミサキは神さま仏さまアル中の先輩さまがやってると言いながら、箸で摘まんだ焼けて萎びたキャベツの切れ端を換気口に近付けて「ぴろぴろ」させていた。濃く短い煙草の煙を肺まで深く吸い込む。ふとミサキが「古谷の兄ちゃんには詩人にはならんのか」と訊いた。古谷が詩人に。なつてほしいな、とこぼすとミサキが当然の如く頷く。「せや八尾ちゃん、俺にオススメの詩集教えてや」煙の中で唐突に投げかけられた。

「いいよ。選ぶよ」

唇を舌先で舐めると、肉の油に混じってタールの苦みがした。ミサキに読ませたい詩集、ふと脳裏に古谷の詩が挟まっていた中也の詩集が思い出された。就活に向けて本腰を入れるとき、図書館のアルバイトを辞めた。八尾はその日に古本屋に行き、中也のその詩集を探し出して購入した。それを貸そう。じゃあ明日渡すよ、と言えば「おおきにね」とミサキが嬉しそうに笑った。

卒業式当日、ミサキの先輩たちは本当に大人数で駆け付けていた。大学構内に押し掛けた敵めしいスーツの男たちが人目も憚らず泣いている光景は妙に滑稽に見えた。ミサキは顔をしかめ「恥ずいねんで」と泣いているのを誤魔化していた。その日は珍しく古谷も参観に来た。履歴書と同じスーツ姿をした古谷は、体育館の入り口で同じくスーツ姿の八尾を見て「八尾くんも卒業



かあ」と間延びした声で呟いた。その目を見てみると罪悪感によく似た気持ちになって、八尾は誤魔化すように笑って見せた。就活ですっかり見慣れたスーツは何度着ても相変わらず動きづらい。身体を覆うように包んでいるあの薄膜のようだと思った。古谷のもとを離れてもこの膜が消えなかったら、そう思うと途端に恐ろしくなつて俯いた。磨かれた革靴が外の光を照り返す。

ふと、穴を掘りたいと思った。穴を掘ってそこで眠りたいという強い衝動。とにかく穴を掘ってその中でうづくまってみたい。いつからか古谷を見つめると湧く重苦しいこの膜の正体が、穴に入れば分かるのではないかと思った。

式はつつがなく終了し、学生たちは学内でそれぞれ別れを惜しんだ。厳めしい大人に囲まれるミサキに声をかける。染め直してすっかり元の金色に戻った髪を揺らしながらミサキが走り寄る。その姿を見てもなお、スーツの男たちは涙ぐんでいた。真ん中には例の「兄貴」もいる。こちらに駆けてくるミサキの背を見て、本当の兄のように嬉しそうに微笑んでいた。

「八尾ちゃん、卒業おめでとさん」

「お前もだろ。おめでとろ」

これ、と紙袋に入った中也の詩集を手渡した。ミサキが中身を覗いて「あら、おおきにね。お菓子まで入れてもろて」と笑顔を見せる。「これお礼よ、何も持たなくて堪忍やで」とミサキが八尾のポケットに煙草の箱を捻じ込んだ。ミサキが普段吸っている花の香りのする海外の煙草だった。

「読んだら感想送るわ、俺こう見えて本読むの早いねん」

また近いうち遊ぼうや八尾ちゃん、と紙袋を掲げてミサキが呟いた。わかった、と答えれば「俺がツッコミで八尾ちゃんがボケでもええな」と顎に手を当てて真剣に考えていた。

部屋でスーツを脱いでいると古谷に卒業祝いとして来週寿司屋に行かないかと誘われた。まだスーツ姿のままの古谷は、珍しくリビングに座って新しい詩集に目を落としている。スーツを着込んだ男が膝を抱えるようにして本を読んでいるのはかなり異様だが、どこか懐かしいようなその光景はとても綺麗だった。「ヤナギも一緒に行きたいって。奢るよ、どう？」と訊かれたので、いいですよ、と答えた。やった、と嬉しそうに呟いた古谷の背中を見つめる。今は寿司を奢れる金があるのか、と思うと笑いたくなるほど穏やかな気持ちになった。明日は穴を掘りに山へ行こう。手元のスマートフォンで穴掘りに必要そうな道具を調べながらそう思った。

陽の上がり切らない早朝にひっそりと布団を抜け出す。こちらに背を向けて眠る古谷を一瞥する。古谷は八尾を蛇に似ていると言った。蛇のように土の中で眠れば、何か深い安心感が得られるんじゃないかという好奇心が湧いた。顔を洗っていると初めて古谷と二人で植物園に行った日の朝を思い出す。あの日も今日のような冷え込んだ朝だった。寝巻のタンクトップの上から適当な長袖のTシャツを着る。上着は厚手のものにした。スウェットをジーンズに履き替えて、

テーブルに置かれた煙草をポケットに滑り込ませる。山中でも平気そうな底の厚い靴を履いて家を出た。

早朝開店のホームセンターまで車を走らせて、大きな銀のシャベルと軍手を買った。シャベルは冷え冷えとした冷徹さをしていて、よく手に馴染む。そのままホームセンターを後にする頃には時刻は六時を回っていた。後部座席に荷物を積み、スマホのナビを頼りにひたすら北上する。早朝の薄白い空がしんとした空気を震わせて、澄んだ気持ちになる。赤信号で停まったので窓を開けて煙草を吸おうとポケットに手を入れると、昨日ミサキから貰った煙草が出てきた。テーブルの上に置いておいたものを間違えて持ってきてしまっていた。少し笑ってからその箱を開く。火を点けずに一本啜えようと、鼻先で微かに甘い香りがした。次の信号で火を点けよう。マツチ箱を左手で弄びながら早朝の風を顔中に浴びる。三つ目の信号で停止して、ようやく煙草に火を点けた。花の香りが車窓から流れ出す。一呼吸ごとにミサキの匂いがして、妙な気持ちになった。そこから五時間ほど走った。爽やかな朝の空気のお陰かあまり疲れは無い。高速には乗らず一般道をのろのろと行く。太陽の煌めく港町を過ぎると、ナビ通りの街の名前が書かれた看板が出てきた。ここだ、と思うと妙に郷愁に駆られるような気持ちになって、運転席の窓から街並みを眺めた。一度も訪れたことが無いのに懐かしい風の匂いがする。山間特有の水っぽい冷えた空気が髪をかき混ぜた。

町の左側に壁のように山が、右側に入口のように海がある小さな町。町並みは穏やかで、人の気配はあまりしない。山を目指して町を大きく迂回するように進むと、緑の深さと相まって空気

が青く濡れていく。身体を覆う膜が不思議と薄まっていくような気がして、ハンドルを握る手に力が籠った。

町に入ってから一時間ほど走った。山には細い車道が血管のように一本走らせてあった為、途中で車のまま山を登った。螺旋のように大きなカーブを何度も曲がって、頂上付近で路肩に駐車する。路上に降りて伸びをした。心地の良い空気が頬を冷やす。八尾は手の骨を鳴らしながら後部座席からシャベルと軍手を取り出した。日が高くなってきた山は燦燦と晴れた光に染まっている。晴れやかな心のまま、軍手をしてシャベルを担ぐと脇道から山中へと入った。遊歩道すらもろくに無い野ざらしの山中。その静けさはすべての生き物が山と一体化しているんじゃないかと思うほどだった。

しばらく歩いていけると土の柔らかさそうな腐葉土の多い地面を見つけた。湿った落ち葉が折り重なる地面を見下ろす。ここがいい。何度か足で踏んで、濡れた腐葉土の上から銀色のシャベルを土に突き立てた。ザクッと軽快な音を立ててシャベルの先端が地面に沈み込む。柄を掴む腕に痺れるような心地良さが走った。銀色のシャベルに枯れ木交じりの冬の木々が反射する。木々の隙間から漏れた金の陽の光が八尾の頬を照らして、その影を木の幹にばらばらに映し出した。

掘り出した土を側に積み上げる。柔らかく崩れていくように簡単に穴は深くなっていく。これは自らを埋める穴だ。そう思いながら無我夢中で掘っている間中、穴を掘ること何かが晴れていくような感覚が頭の片隅にあった。古谷は、自身にとって何者なんだろうか。額から汗が垂れ落ちる。熱くなって着ていたジャケットを脱いで、穴の側に放り投げた。聴いたこともない鳥の

声がする。穴はどんどんと深くなった。

半分ほど掘れた辺りで穴の中にゆっくりと足を入れた。穴の縁に腰掛けて、自分の身体を落とすように底へと飛び降りる。胸から上がまだ入りきらぬほどの浅い穴だったが、両足を折り畳んで身体全体を中に入れることはできた。穴の中でしゃがむと鼻先に土の匂いが漂う。土の中は幾分か温度が低い。膝を抱えて胎児のように身体を丸めると、冷たい卵の中にいるような不思議な安心感で眠たくなった。このまま眠ろうか、微睡みかける頭で考える。古谷が自身にとって何者なのかわかれば、この膜は破れる。土の壁に身体を預けて夢中で古谷の事を考えていると、ふと、無機質な通知音が耳に入った。ズボンのポケットに入れっぱなしだったスマホの画面が光っている。右手の軍手を外し、スマホを取り出して画面を点けた。

『貸してくれた詩集読んだよ。「夏」って詩良かった。かっこよくて何か八尾ちゃんっぽいな』  
ミサキからのメッセージだった。「夏」。古谷の詩が挟まっていた頁の詩だった。

『私は残る、亡骸として—— 血を吐くようなせつなさかなしさ。』

ミサキからのメッセージを見ながら、「夏」の一文を讀んで目を閉じる。頭が冷えていくような感覚がして、穴の上に寂寞と広がっている冬空が目を覚ましたような気がした。それどころか、虫の眠りこける土の冷たさや、踏み締める腐葉土の脆さその全てが眠りから目覚める音を立てたのではないかと感じた。八尾は閉じていた瞼を開いた。「夏」が八尾の身体を毒のように廻る。亡骸になろうと藻掻いていたのは間違ひなく八尾自身だ。そう自覚すると今まで感じていた重苦しい膜の正体がわかった。それと同時に、どうすればいいのか八尾は完全に理解した。

八尾は、詩人として、古谷の人生を見届けようとしていた。誰一人として追いつけない速度で生きていく古谷の傍で、とにかく古谷が生きて死ぬまでを見届けたいと、心から望んでいた。古谷の傍に居ながら慢性的に感じていた薄い膜の原因はこれだったと気付くと、途端に拍子抜けした。古谷への執着は、異質に変容しながら純粹な愛に似た何かになっていた。窮屈な膜は八尾の抱く古谷への愛だった。ヤナギにも、仕事にも目をくれない古谷の詩への盲目さをただ守りたいだけだった。もはや神秘じみた八尾の中の古谷を思い描く。理想的な古谷の姿を追い求め続けていたのは八尾自身だ。これはただの呪いだ。そう気づくと案外自分はずだらな人間だったと馬鹿らしくなった。

左手の軍手も放り投げ、ミサキのメッセージを閉じて、古谷に電話をかける。土が画面のひびに引っかけた画面が汚れた。コールすると真昼間の電話なのに三コール半ほどですぐに出た。古谷さん、詩人にならないんですか。名乗りもせず開口一番に言った。「え？」と電話の向こうで聞き慣れた声が素っ頓狂な声を上げる。

「古谷さん」

「八尾くん？」

はい、と返事をする。僅かに動揺していた古谷の音が落ち着いた。そしてすぐに普段と何一つ変わらないあっけらかんとした声で「八尾くん、俺に詩人になってほしいの」と尋ねた。はい。駄目ですか。と言うと古谷が笑った。汗塗れ、土塗れで知らない土地の山中で聞く古谷の笑い声だった。その声は澄んで、今まで聴いてきた古谷の笑い声の中で一番美しく聴こえた。古谷さん、

俺いま全然知らない山の中に居ます。蛇とか出そうな感じの、と訳もわからないまま言う。

「山に居るんだ」

古谷はペンを走らせる音を立てながら笑った。何してるのそこで、と尋ねられた為「穴を掘りに来ました」と答えると、何それ、とだけ返ってきた。その後は奇妙な沈黙が互いの間に訪れた。無言のまま頭上で鳴る木々の音を聴いていると、眩暈のするような不安定な感覚がどこかへ霧散していく気がした。穴に風が吹き込む。

「古谷さんは今、何してるんですか」

規則正しいペンの音が止まる。「今ね、詩が完成したよ。写真撮って送るから、読んで今日の夜感想聞かせてよ」古谷から写真が届く。スマートフォンを耳から離して画面を見た。真っ白な紙に滑らかな字で「夜を掘る者」と題された詩が映っている。最初に読んだ古谷の詩だ。それに気が付くと血が熱を含んで脈打った。

夜を掘る者

夜を掘る

そこに何を埋めるわけでもないが

掘り終えた頃には

埋めるべきものが見つからるだろう

人並みの感傷も焦燥も憂鬱も

手垢塗れでまるで別の人のものみたいに思えて

しかしながら、ここで気を病むのもなんだか凡庸な気がして

嫌になる気持ちを抑えて息を殺してくぼんだ土地にまたスコップの先端を突き刺す

夢中になれ、必死になれ、という自己暗示を繰り返し

無理やり頭の中を空っぽにしようとするほど

余計なことばかりを考えてしまつて

同じように陥没した土地は

掘り進めるほど細かな砂利が降り積もつて

終わりが見えない

そもそも終わりなんぞはどこにあるというのだろうか？／余計なことは考えるな／無意味だ／それでも掘り進めなければ／掘り進めなければ／俺は／死んでしまうのか？／確定はできないが可能性はある／それは／つまり／お前は／何がしたいんだ？／分からない／が／こうすること／治る気も／あるのも／また／事実／掘る／脳内／自分／懐疑的／会議／積もる積もる積もる積もる降り積もる積もる積もる積もり続ける星屑のような思考の小石／そんなもの／輝きをなくした塵に同じ

思考のまるごと妄想のまるごと

戯言をまるごと幻聴をまるごと



他人事のまるごとをまるごと

入れてもまだ余裕の残る

穴は穴そのものがまるで俺のための墓穴のようにも思えて

そうして一瞬の躊躇いの末に飛び降りて横たわる

なるほどこれは心地の悪いほどに心地の良い

俺の掘った俺のための夜の墓穴

やがて鶏鳴と共に無表情の夜明けが訪れ

土と汗と星屑と塵と戯言と他人事で汚れた

俺の顔に被さる陽の光が埋葬する月が心臓を貫く

身体中の血が凍る感覚が死の一字を濁きかけの脳に弱々しくも伝達すれば

娑婆の光は消え去って常闇が俺を連れ去る

耳元でバクテリアたちの蠢きが

話し声みたくから騒ぎ肉を削ぎ

眼球を抉られ毛を抜かれ血を吸われ

分解され尽くして骨だけになるから

穴の中にはどうやらすっかり伽藍堂

墓石みたいなスコップが無数に突き刺さったまま

埋葬された夜がまた蘇り土中から手を伸ばす

その詩は美しい筆致で八尾自身を象っていた。スピーカーから古谷の声が流れる。

「八尾くん、俺ね、来年の夏に詩集出すよ。自費出版だけど、俺の処女詩集がちゃんとした本になる」

あとね、ヤナギと結婚したいと思ってる。落ち着いた口調で述べた古谷が、恐らく微笑んでいるのが声で分かった。木々のざわめきが一層大きくなった。八尾は古谷の穏やかな声にずっと遅れて「おめでとうございます」と言った。聞いたこともないようなぐにやぐにやした声が出て、全然言えていなかった。スマホを掴む手が汗と土でぬめる。手の甲で額の汗を拭くと眉毛の辺りに湿った土が貼り付いて、すぐにぼろぼろ落ちていった。

「八尾くん、明後日お寿司だよ」

本になる詩、読ませてあげるよ。古谷の声が聞こえる。はい、楽しみにしてます、古谷さん、本当におめでとうございます。そう言うとき古谷が笑った。「今日はカレーにしようよ。じゃあ待つてるからね」と上機嫌な古谷が告げて、通話が切れた。スマホをポケットに仕舞い、穴の側に放り投げていた上着のポケットから煙草の箱を取り出す。一本だけ残しておいた煙草を啜えてマッチで火を点けた。渴いた風が木の幹を通り過ぎて、花の香りを山中へと運んでいく。身体が軽い。煙と共に身体の重苦しさが吐き出されていく気がする。

古谷はいかなるときも八尾自身を見ていた。それに気が付くと古谷への怒りを懺悔しなくなった。陽の差すリビングに座り込んで、借りてきた本を貪り読む姿はもう見られないかもしれないが、それも古谷の選んだ変化だと思えばもう怒りは感じなかった。膜が引き裂かれる。花の甘い

香りに蛇は目を覚ます。煙草を啜えながら、八尾は泥だらけで穴を這い出た。

葬 ヤマメ（とむら やまめ） 沖縄国際大学総合文化学部日本文化学科三年

追記 作中に登場する詩の一節は、沖縄県在住の詩人・元澤一樹さんより許可を得て、元澤一樹著『マリンスノーの降り積もる部屋で』（株式会社コールサック社、二〇二〇年二月）にて収録されている「夜を掘る者」（頁三十八〜四十二）、「ハイブリッド・ミュータント」（頁二十六〜二十八）、「月夜の河原」（頁四十二〜四十三）、「ネオン・ライト」（頁七十二〜七十四）、を借用しています。



## 小説部門佳作

# この血漿を巡る物語と共に

プラネット

青い空に雨が降る。狐の嫁入りとは名ばかりのスクールだ。

二十歳を超えて一年が過ぎたころ、流石に島育ち島暮らしでこの先を生き終わって骨を埋めようとしている若者が自動車免許を持っていないのはいかがなものかと思つて始めた教習所通い。車社会の我が島で成人した人間が教習所に通うのはどうやら珍しいらしく、周囲にいるのは高校生、高校生、高校生、晴れ時々大学生であつた。

いや、私だつてまだ学生だし、まだモラトリアムなんだし、と不格好に顔を踏んだところで友人ができるわけもなく、ワイドショーが垂れ流される小さな吊るされテレビの音を聞きながら、予約した時間になるまで床の汚れを観察する日々が続いていく。

教習所の大人たちは誰もかも大人で、いや勿論二十歳を越えたら誰でも法律上は成人なのだが、見た目以上に中身が幼い私に似て少々ハイテンションなベテラン職員や、空回っている新人

職員が目映る中、どうにも個人的に納得がいかなかったのは実技訓練の予約を確定させるのに必要なカードリーダーの向こう側に、顔のきついおばちゃんが鎮座しているということだった。毎回、どうして睨んでくるのだろう。隣の若いきゃぴきゃぴな女性には朗らかに笑っていたのを私は見ていた。

ということはあるだろうか、私もきゃぴきゃぴになればいいのだろうか。人間の表情は対面する相手のものを鏡に映したように真似るものなのだと聞いた覚えがある。とすれば、早い話私が陰鬱の極みだったらないこの顔を緩ませるのが適切なのだろうが。まあ、実技を受けるためだけに下階へ向かう私にはそんな器用な世渡りと心配りができるわけもなく、淡々と下から昇ってくる教習生と決して避けようとしめない教官たちとすれ違って、それから時計を見た。

十五分前。

あとから分かることなのだが、この教習所は授業が一コマ終わったからといって時間通りに車が戻ってくるわけではなかった。最も適切な行動開始時間の目安は天井の古いスピーカーから流れる「次の授業の準備をしてください」という五分前コールだ。つまり私はこの後、誰もいないベンチに座ってそわそわと一人落ち着かない腰に四苦八苦して散々悩みつくしたあとで上の階に踵を返すことになるわけで、慣れるまでこれが何度も続いた。車の横で受講生を待つのも気が引けるが、上の階で込み合う席を一つ使うのもあまり気が進まない。待機場所という割には誰も座っていない喫煙所。結局、手入れもされていない錆びたベンチに腰掛けるしかなかった。優柔不断がかなりの勢いで仇となっていた。

実技も重要だが学科も重要だということで、実技を受ける前に学科をコンプリート（原簿を見る限りはまるでスタンプを溜めるラリーである）していた私だが、生来、自慢にできないぐらい機械の扱いに不得手である。本来なら高速走行する鉄の塊のハンドルの手にするなどごめんなのだが、生活という名の背に腹は代えられない。にもかかわらず、教習の教官たちは初見の私に「エンジンかけてドライブに入れてハンドル全部回して」と、専門用語を流れるようにしているのである。私の年齢を確認するなり、昔運転していたのかと疑ってくる人もいた。していないに決まっているだろう。見た目には真面目にしているはずだが、前世の記憶を漁っても法を犯すようなやんちゃをした覚えがない。理由を聞けばどうやら、人の目に映る範囲では良い子ちゃんの私にしては運転が安定しているせいだった。

教官の軽快な声に運転中の思考を大いに乱されつつも、おいおい殺意ましましの弾丸ですか。マシンガントークは友人間のコミュニケーションだけで結構だ。とは空から槍が降ってもいえたものではないので、大人しく大人しく、なるべく返事は「はあ」「はい」「ありがとございます」の三拍子にして、毎回一つ一つの操作を確認しながら、いつの間にか青になっていた交差点の苦手な左カーブに相對し、恐る恐る普通乗用車を発進させたのだった。

さて。ここまでは半年前の話。大学四年生になるかならないか、いや単位はあるのできつとされるだろうと意気込んだぐらいの時期を境に、私は教習を中断することになる。

正確には中断せざるを得ない状況になった。生活にマスクが必須となり、家から出ることが自

肅対象となった世界規模のパンデミックが原因だった。三年生の後半に心の調子を崩して、またお財布の紐がちがちなちがちなことになってしまったこともあって通えていなかった教習を三月から取り返して仮免許までどうにか取得した、丁度その矢先だった。

この後長く長く続くことになる自肅生活はしかし、教習所が閉まり、大学が閉まり、家から出ずとも講義が受けられるという夢のような状況を産み出すことになった。兼ねてから人付き合い苦手症候群の私はまたとない恩恵を受けたのだが、世界情勢と仮免許の期限を考えればとても手放して喜べることではない。この時点で四月。期限は六月だ。だが自肅といわれた以上、私が外に出ることはできなかった。家には体の弱い祖母が同居していて、それに私自身も呼吸器が悪いのである。治りきることはなく、痰絡みの呼吸器と一生付き合っていく人生なのだとい医者からいわれている。

昔罹った肺炎の辛さを覚えていた身としては、今回のウイルスの存在自体が鬼門のようなものだった。そもそもカナツチ故に海ですら泳げないのに陸で溺れて死ぬリスクを背負うことになるなど考えもしなかった事態である。何も悪いことをして生きてきたわけでもないのに、そのような終わりは苦しすぎやしないだろうか。誰にも迷惑はかけたくないし、かけられるのもごめんである。部屋に引きこもり傍観を続け、遂にテレビにすら愛想をつかして、最終的には動画投稿サイトを開いてのんびりと無人島ライフを送るラジオ染みた実況動画を生活音に組み込んだ。体力は落ち、体重は落ち、日常生活でひび割れた心だけが回復していく。奇妙な時間だった。



外出自肅を続けて、ことが動いたのは五月である。私の手には、黄色のアリスがあった。

とんとん、と部屋の扉が叩かれて、それから開く。入って来たのは同居している住人だ。彼女の手握られた二斤袋の中には、黄色くて四角い袋が入っている。四方向をプレスされ、空気の入り込む余地がないそれを八袋ほど束にして、これをおすそ分けだと渡された。どうやら箱の柄が可愛らしくて気に入って買ったもので、中身の幾分かをこちら側に差し入れてくれたという流れだった。

世間を騒がし猛威を奮うとげとげボールの脅威から逃れる以前から、生活様式として自宅待機が主流になっていた我が家では、今日も今日とて家庭内分裂が勃発している。長き月日に渡って、あちら側とこちら側には視えざる壁が形成されているのだ。干渉せず、助け合わず、互いに放っておく。そのような関係。私はどちらに属すのもごめんだが、結局寝る場所とはある一派側。スペースが他にないのだ。仕方がない。従って、その黄色の四角い袋は私が寢床としている一派側の全員に共有される扱いになる。受け取ったそれらは文字通り分配されてしかるべきものだ。がしかし、この時は普段とは違った。普段のおすそ分けのように、分け合える食べ物やお菓子を手渡されたわけではなかった。クッキーやカップケーキや、お盆のクワツチーを取り分けた紙皿でもない。二斤袋の中には八袋の黄色いアリス。知る人は通じるだろう、ティーバッグだ。これをどうするかというと、沸かしたお湯を用意して淹れる。それだけである。

しかし残念なことに、こちら側で紅茶をがぶがぶと飲む曲者はいない。いるのはさんびん茶というジャスマンティーの紛い物をがぶがぶと飲み続ける猛者だけである。仕方がないので、私は

一人台所へ赴く。住民より数があるマグカップの一つを食器棚から下ろし、湯を沸かすことにした。

白磁の陶器にバッグを入れ、沸いた湯を注ぎ入れる。何故かぎとぎとしている銀色の湯沸かし器の口から溢した透明なカルキ抜き水道水は、その雑味を紅茶に溶かして曖昧にする。ここだけの話、我が家の水道水はすこぶる不味い。雨上がりに鼻を衝くことしばしば、あの形容しがたい匂いが染みついている。だが、紅茶を溶かしたそれはまあまあ飲める程度のポテンシャルを秘めていた。やるじゃあないかティーバッグ。尤も、私には紅茶の専門的知識がこれっぽちもないので、銘柄が記載されていないこの黄色のアリスの絵が載った紅茶の葉が何と呼ばれるお茶なのかよく分からない。まあ、美味しいからいいでしょう。普段ぶつくさいっている分、ちよろいのが私である。

しばらくの間、私はまんまと紅茶を飲むことに嵌った。ストレートもミルクも砂糖も、何でも組み合わせて飲み込んだ。日に三度淹れることもあった。ただ、それが私の生活に影響するわけでもなし、もっといえば隣の彼らとの交流につながる橋材にも成りえない。あちら側が残りのバッグを飲んだのかどうかも、そもそも黄色の包装袋がまだ破かれていない可能性さえあることを、私は何となく知っている。味の感想を共有することもせず、同じ台所を使っているも無言のまま、こちらは紅茶のために湯を沸かし、あちらはコーヒーのために湯を沸かす。

たまに一言二言交わす言葉と、物々交換から成り立つ交易。長年かけて築き上げられた歪な自己満の関係は、そう簡単には変わらないだろう。自粛生活を送る中で大切にしなければなら

かなったのは、なによりも身の安全の確保である。というのも私の家の住人はちよくちよく揉めるので、その後のメンタルケアをひたすらにしなければならぬのがとても面倒だった。怒った方も怒られた方も等しくテンション爆下げ状態に追い込まれるため、慰めも気遣いもあり意味を成さない。故に受け流す方法として、同意と共感を感じを無感情に繰り返す日々。今まで住んできたどの家よりも長く腰を落ち着けている癖に、近所付き合ひも希薄なこのコンクリート屋敷の中では某パンデミックに慌てる住民の心を落ち着けるのに、私の心をも砕く必要があった。大学で学んだあれこれが役に立つかと思えばそうでもない。基本、身内にはストレスマネジメントがあまり通用しないものなのである。彼らがいう極限の状況下に置かれたその状態で、身内の話ほど耳に入らないものはないからだ。

あははは。つべこべいわず人の話を聞いてくれよ。と。そういういざござやごたごたと縁なきように隔離されていた私達の巣は、蜜柑の木に穴を掘るカミキリムシの存在を知りながらも何も出さず、鎮静化を待つだけに留まっている。

大黒柱に巣食っていたという白いアリもどきの代わりに黒いアリが部屋に上がるようになって、はじめじめした鬱屈な季節が訪れる。長い冬眠からの目覚めといえは朝日燦々と降り注ぐ清々しい春の芽吹きであるかのような印象を植え付けることができそうだが、残念ながら部屋に虫が入るといふことはつまり梅雨の到来を意味する。五月末、非常事態宣言が解除、つまり自粛期間が終わったところの話だった。長年悩まされていた軽い痰絡みと、鼻炎の症状が多少解消され

たころには、空はすっかり夏の色に変わっていた。

自肅が解除されたということは、私は教習所に行かねばならない。

すっかり昼夜逆転した生活を送っていた私は、なるだけ早めに第二段階の学科と教習を受けなければと発起したのだが、運が悪いことに自宅から教習所までの距離が遠かった。片道四十五分、大学の近くだからと選んだ教習所まで、公共交通機関の揺れに腹を痛めながら通うことになった。乗用車の揺れも胃腸に悪いが、バスの揺れもやはり胃腸に悪い。自肅が解除されたとはいえ車内は密である。教習所につくとアルコールを手に塗りたいくらい、それから路上教習に参加する。ロビーの床には色付きのビニールテープが等間隔に貼られていて、カウンターには職員を守るためのビニールカーテンが追加されていた。多分、紙の原簿を受け取ったり手渡したりする時点であまり意味はないと思うのだが、誰も彼もが真面目にやっていることなだから重箱の隅をつつくもんじゃないとも思った。職員と受講者の会話があるわけでもなし、不安が杞憂だと気づくには時間がかかった。

既に六月、公安のお恵みによって教習期限が伸びているとはいえ、依然私の仮免許期限は六月の末だった。「さっさと免許をとってしまえ」とか、「成人して免許取るって遅くないか」とか、自肅前と変わらない調子で教官はいう。いやいや分かっているんだって。お金もないのに大学に受かってしまつて生活はカツカツなのに、いざ奮起して始めたアルバイトは肉体労働もないのに人間関係が合わなくて体調をすこぶる崩すきっかけとなった。働く活力も生きる実感も失せ、

漂白され気味の心に鞭打って教科目の講義を受ける日々を繰り返しながら曜日感覚と健康な生活リズムを手放して。そんな中、自肅期間に入る直前に古いコンクリ家の天井が崩れて怪我人が出たりもしたんだ。期間ぎりぎりなのは大目に見て欲しいんだけどなあと、別に開示すべき情報ではない家庭的な事情を聞きだそうとする輩に当たり障りない反応を返すのは酷く面倒だった。それをいなすために正直に話をしようとする、彼らは掌を返すように「話さなくていいんだよ」といってはぐらかす。いや、聞かれたから開示しても構わない程度に身内の入院事情を話しているだけぞおっちゃん。貴方が聞きたいといったから話すだけなんだ。勘違いしないで欲しい。運転するためにハンドルを握っている緊張感MAXの受講生に対して彼らは延々とお喋りを強要してくるのだから、辛いものがあつた。ひよっとしたらマルチワークの訓練なのかもしれないが。

ともかく、私は人より物覚えが悪いようでも繰り返す回数が人の倍は必要だった。ただでさえ途切れやすい集中を軽快だと思っているだろうトークで引きちぎられる実技の時間は苦行である。勿論、普通の教官もいた。ブレーキを過度に踏まれた覚えがあるけれど、巻き込み確認をする真横であらぬ方を向きながら「ぜんっぜん確認してないね」と、ちよっとだけ意味不明な会話を投げた教官よりは百倍ほどましであった。どちらにせよ、精神的にも身体的にも体力のない私には二日以上連続で車の練習ができないという現実も、恐らく彼らは知らない。

人と応答するにあたって発生する疲労と、長時間気を張っていることによるストレスとを経験値代わりに抱えて、家に帰ってあとは手を洗ってうがいをし、風呂を済ませたら部屋に閉じこ

もった。

同居人が軒並み寝落ちする夜は、ようやく私の時間である。快活に次週の宣伝をするテレビを消せば何のことはない。胡坐をかくだけのプライベート空間は日が跨がれる前後の数時間だけ、作業場へと変貌するのだ。何の作業場かといえば、今あなたが目にしている「これら」を書くための作業場である。

私は春休みからずっと、ひたすらに物語を書きなぐっていた。ローマ字の羅列を日本語表記に指先で自動変換してはカタカタと今日も続きを綴っている。元々は趣味が高じたもので、特に誰かに読んでほしいというような欲求はなかった。ターゲット層を決めて、告知宣伝を絶やさないようにして、一定の周期を守って新話を投稿、更新する。理由は一つ。生きるためである。

増えないPVや感想。無収入故に広告収入に縋りたいだとか、そのような話ではなく。ただただ純粹に、このブラインドタッチが打ち込む文字の羅列が、私が生きていくには必要なのだと、思い知っているからだ。

私が現実逃避を友人とするようになったのは、振り返れば結構昔の話だ。友達がおらず親が働いていて家にいなかったあのころ、遊びにいく体力も土地勘もなかった私が、与えられた玩具の車を擬人化して物語を創る一人遊びを始めたのが保育園に入る前。おままごとのようなものだったので一人畳に向かってごちる私を周囲は窘め、玩具を取り上げて辞めさせようとしてきたりも

したのだが、他に遊ぶものもない。友達は何うとしても悉く逃げていくし、私自身が顔と名前を覚えられないので何度も遊べなかった。一度きりの友人たちは誰も彼も私より年上で、よく分らない話ばかりしていた。一人で虫を捕るのも飽きていたので、私はのめり込むように目の前の模型に命を吹き込んだ。情動を、展開を、結末を。何度も何度も、飽きる程に用意した。一人遊びは定着し、誰も止めなくなった。それが決定打だったのかは知らないが、どうにも因果なもので成人を迎えた今に至っても一番の友人は脳内の空想世界である。

何故こんな語りから過去回想編が始まるのかというと、こういうことを頭の中に置いていても語る場所がなかったからに他ならない。幼稚園に入っても小学校に入っても状況は変わらず、本当の意味での友達を知らないまま大学生になった私にとって、創作活動は生命活動と切っても切り離せない重要なパーツなのだ。直感的に、これがないと生きていけないとすら思っている。

ここ数年かけて健康を取り戻した頭はようやく現実というものを把握できるようになってきたようで、今ではニュースの内容から社会情勢を想像したり、バラエティ番組に出てくる人々の顔や名前をどうにかこうにか覚えられるように、つまるところ大人の階段を上ったことによる成長の結果として周囲の環境に興味を抱けるようになったからこそ、そうなったのだらうけれど。慌ただしく生きている中でもどっかの国がミサイルを飛ばしたり、海を隔てた地方で紛争が絶えなかったり、黄砂が飛んできたり、今日も道路脇に吐き出される排気を飲み込んで盛大に噎せたりするのだ。

いくら知識が増えようが理解を深めようが現実は大層なことがない限り変わることがない。幼

いころから視力が悪く、ゲームが好きで、本が好きで、妙なものに興味をもつ癖に呼吸器を病ま  
して鼻炎もちで、動植物は好きだが飼うにはとても向いていなくて、人付き合いが苦手で、  
人混みが苦手で、おしゃれに頓着せず、趣味嗜好以外のことに興味をあまり向けられないこの性  
質を無自覚に成長したあげく、大人といわれる年齢まで生き延びてようやく自覚するに至ったの  
である。

また質の悪いことに、自覚して変わったかといえば、変わらない。不変のままだ。高校卒業の時、  
自分の一字を「変」だとした覚えがあるけれど、あれは「不変」の「変」だったのかもしれない。  
変わろうともがいても泥に沈むだけの線路は、暗中模索という四字熟語が似合うほどに濁った汚  
水の中に鎮座している。息ができない場所だと分かっている身としても、生きるにはそこに潜るしかない。  
理由を知らなかった、知ろうとしなかった自分を覚えている身としては、どうにもここ数年の  
間に大人への階段を駆け上がりすぎてしまったようで生き辛くなっている。理由を理解している  
が故に、私自身は口出しすべきではないと一歩引いてしまうこの現実世界に一石を投じたいとは  
とても思わないし、だけれど不安と不満は増すばかりで、それ故に行動に移せない自分を憎ん  
でいる。こればかりは小学生の時に感じた生きる意味のなさを、大人になってからもずっとずつ  
と引きずっていくのだろうなと若干の諦めをもって向き合うことに最近決めたばかりだ。

産まれていない方がよかったとか、こんな風に育ちたくなかったとか、大抵サイコロを振れ  
ばファンブルのTRPGを生きているかのように、狂気と恐怖を豊かな想像力あいまったセル  
フサービスで繰り返し体感している身としては、多分一つしかないこの心臓に付き合い続ける



限り、つまり死ぬまで終わらない禅問答のようなものなのだろうと悟ってしまったのだ。そもそも人がいう「物狂う」といった状態を私自身が目にしたことがないので、自分がおかしいのかそうでないのかすら、振り返るまで気づけなかった。今でも指標はない。だが、確実におかしいことだけは分かっている。分かったならば対策が取れるのだ。そうして試行錯誤しながらも、どうにか外でやらかさなないようにと息を潜めることを覚えたのだけれど、それも青年期特有の一時的な問題、つまり休息で収まる程度のものなのかはさっぱり見当がつかない。事実、「あたりまえ」の感覚が世間でいわれる「普通」とはずれている私だ。違和感なんてものはそれこそ、物心ついたそのころからあったのだから。

それでも。私が聞き齧るように学んだ心理学の知識では、自己のメンテナンスをしつかりするようにと書かれていたので、死なない程度に、狂わない程度には自己管理をしている。真綿で首を絞めるよう、いや縊るみたいに。

縫るように物語を綴り、何も考えずにそれを他人に見せ、内容のない「すごいね」と「面白い」という感想しか貰えないと諦めながら満足したふりをするのを繰り返して十数年。それが無常で変化もない、進化もないことなのだと理解したからなのかもしれないが。さて、中学生になって絵から文字に路線を変え、実際に書き続けるを実践してみようとなるとまたこれが難しいと思うのが高校の終わり。親族に勧められて受かった大学に籍を置きながら一年の間、私は長編を書くことをしなかった。代わりに、高校から始めた「一話完結を積み重ねて一本の作品とする」

という目標を達成するために黙々と二千から一万字ほどの起承転結を繰り返す日々が続いた。小説を上手く書くには膨大な数の完結作品が必要になるらしいと小耳に挟んだからである。

積もりに積もって十数万文字になったその作品はしかし、中盤を折り返したところで執筆が止まってしまった。コール&レスポンス、人に意見を求めたところで帰って来る批評の内容も芳しくない、テーマすら伝わらない物語。なにより読んでくれる読者がほばいないというのが悲しいかな現実だと気づいたからだった。

まあ、宣伝も何もせず自作をひたすらに書き続ける変人と友達関係になってくれる変わり者は「普通」の集まりである大学はおろか「変人」が集まる母校高校同級生にもほぼおらず、また彼らは現在殆ど就職してしまっているので人見知り拗らせの私には「これを是非読んでほしい！」と胸を張ってアピールすることもできなかった。

人付き合いの悪い黙り気味のマスクの人（排気ガスで噓せるので以前から私はマスクメンである）というキャラクターを大学で定着させてしまったがために交流が広がらなかった大学デビュー失敗の悲しい現実を受け止めつつ、入部から二カ月無言で過ごしたまま定着したサークル活動に入り浸る日々。部屋にいるのは男性ばかりで、かといって女性と話すのも苦手なので、私は羽を伸ばす場所もなく日々を過ごしている内に調子に乗ってアルバイトを始めたのだが、どこかで選択をとちったらしく後日いくらか破損した。そして、大学二年の中盤に盛大にぶっ壊れた。物事を理解する脳の処理能力に不調が出始めたのは高校からだが、人の話を全く理解できなくなったのは大学に入ってからだった。病院にかかるべきだとも思ったが、心理学でいわれる「日

常生活が困難になる程の症状」は出なかった。講義の内容に共感することが多かった私はこのことを「心理学を学ぶ生徒のあるあるだ」と、違和感を押し殺して片付けた。

何。高まった感情は氷が解けるように流れていくものである。寝る直前に心臓が締めり死にたいと願ってしまうことも、昔の失敗のあれこれを明瞭に想起してこれからが想像できなくて苦しむことも、誰の役にも立てないなんて産まれてごめんなんて言葉すら吐き出せずに嗚咽すら漏らせないまま夜を明かす日々も。気の所為である。気の迷いで、青年期の所為である。

これ以上家計に負担をかけるわけにもいかない。ただでさえ我が家の人間は毎年誰かしら入院するのである。そういう意味では、今回の自粛期間は渡りに船、心と身体を休めるまたとないタイミングでの助け舟だった。泥船が沈没する前に、狸は対岸に辿り着くことができたのである。丁度、消滅願望と不安症状が日常生活に支障をきたし始めていたので本当に助かった。日常生活に支障をきたしていないなら、それは病気ではないのである。そう、習ったのだ。

巷を騒がしている上に多大な犠牲者を出しているところとげとげボールは私の心をも簡単に拘り上げた。本当に、何の偽りも無くそうだったことが、どうにも悲しい。

というわけで、大学生生活を真面目に過ごしたかにもあり、単位の数にも余裕があった私は就活をのぞいて前期の選択科目がたったの三つという状況に放り込まれた。自粛期間中なので講義はリモート配信かメールでの受講。普段会いにいくにも会話するにも体力を消耗していた私にとって、一日中家にいても咎められず、好きな時間に勉強ができるというこの状況はとても好ましい。

ただ、我が家にはおおよそプライベートスペースと呼べる空間がないので、私の陣地は人ひとりが胡坐をかくぐらいの面積だけだ。

これを打ち込む間にも背後では見たくもないテレビがつき、聞きたくもない音が流れている。こちらもヘッドフォンなどをしようと思うこともあるが、ひと部屋に三人、全員がイヤフォンという奇異な構図にはどうしても抵抗があってできなかった。おかしいぞ。どこを向いてもどこにいてもストレス負荷がかかる。これでは大学生活と同じで、やはり生きていくだけでストレスフルだ。そうして辿り着いたストレス発散法、もとい時間があるから自分の身になることをしよう。と三月春休みから始めたのが、長編小説執筆の本格化だった。

おいおい、長編を書くのを辞めたのではなかったか、とツツコミが入りそうだが、私は大学一年生の間長編を書かなかったというだけの話であって、それは長編を考えなかったということとイコールではない。子どものころからそうだが、私は空想の世界を友達としている生き物だ。朝起きては夢の中身を吟味してネタを探し、時事ネタから興味を出し、草花や空の雲を見て「巻雲美味しそう」などと呟くテンションで酸素の薄い講義を受け、意識を手放すものかと落書きを続け、必死の抵抗も空しく寝落ちている変な人間だ。そんな変人が長期間手書きの小説を書かなかったからといって、では文章作成ソフトやメモ帳で小説を書かないのか。構想を練らないのかといったら、そんなわけがないのである。

高校が工業系で当時使えもしなかったパソコンのタイピングを身体に叩き込まれた身としては、手書きで週に八千文字書いていた中学生の時の自分と、デスクトップに向かい合って一日

二千から四千文字を書き上げる現在とで大した差がなかった。

因みに長編を書かなかったのは単純に書けなかったからであり、書くものがなかったからである。ところが、大学二年生、ぶっ壊れた頭で私は閃いた——長編を書こう、と。

今から思えば血迷った決断だった。講義も卒論も不透明で、提出物のレポート課題に頭を悩ませていたころの話である。ある意味で自殺行為だった。それが恐ろしいことに今の今まで続いているのだが、つまるところ鍵をかけていたSNSのアカウントを公開して自作を宣伝する場を用意し、とりあえずそこに作品をのせてみるという行為の延長をやってみようというものだった。

某小説大賞に応募するために十二万字の大作を一つ作りあげ、次の年に落選したと分かるように投稿を開始した。これが、現在も投稿を続けている長編作品と私とのなれそめである。突如閃光の如く創作界限に現れた謎の投稿者にネットが湧く……はずもない。現実は厳しいもので、閲覧数は伸び悩みブックマークは殆どつかない。現在もそのような細々とした物書きライフを送っているのだが、この春休みから書き始めた新章を投稿するのに自粛期間を使って週二更新にしてみることにした。

少しずつではあるが、SNSでの宣伝効果もあって読者は増えている。とはいっても、現実で作品を読んでくれる知り合いより十数人程度多いぐらいで、その彼らの殆どは感想を置くこともなく、ただただ無言で作品の新話投稿を待っている。しばらくしてその中のほんの数人が、作品に対する感想や期待を寄せてくれるようになった。これには私も驚いて、レビューがつかないかなPV伸びないかなとスマートフォンが手放せなくなっただかと思えば自覚したところには

ネット中毒者になっていた。草しか生えない現実である。

こうして四カ月ほどの期間、自粛期間を最大限に利用して安定した投稿を続けることに成功した私だったが、七月更新分あたりで「懸賞の作品を書かなければ」と思ったのだ。Web上にも多くの小説大賞があるが、誰でも気軽に参加できるそれらは当たればいい程度の宝くじである。作品に自信はあるものの、現在読まれる流行りを逆行している私の作品は多くの人に評価されているわけではなく、そうなるかと長く長く書いても仕方がないのかと思うようになったほどだ。いや、完結させる宣言をした以上は書くのだけど(完結ブーストというものを狙うのである)。なので、結果的にはWebに上げるにせよ、懸賞への投稿を辞めるべきではないと私は考えたのだ。ただ、流行をさらうには私の頭が固すぎた。そう気づいたのは四年に上がって選択した創作系の講義を受けるようになったあとのこと。丁度自粛期間でお休みが伸び、私の心に余裕ができてからだった。

いやはや、心の余裕がないと作品の質も落ちるのだと実感した私は、懲りずに積極的に書くことを繰り返した。調子に乗ったその結果、案の定昼夜逆転の生活を送って身体を壊しそうになったが、丁度いいところで寝るコツを掴んだあとからはそのようなこともなくなり、安定して一日に四千字程度の小説を書き続けることができるようになった。筆が遅いことで有名だった私の作品は明確な締め切りを得ることで安定したペースを保てるようになったのである。

そこで問題になるのが作品の完成度だ。添削は毎度毎度繰り返すが、Web小説の世界は厳しい。読者を一話の時点で引きこめなかった作品は完結するまで、多くの人の目に触れること

なく情報の海に埋もれることになるだろう。つまり作品の一章を改稿する必要があったのだが、そのためにも今更新している部分をまとめなければならぬ。ここでモチベーションを切らしてしまえば、安定した読者がいる現在から数か月後に後退するも同然だ。そんな風に自分を自分で追い詰めながらマッチポンプをしていた私は、貰った感想を整理したときに、さらに打ちのめされることになる。鋭くのを得た指摘と、遠回しに「別の方向性を模索してみても」というアドバイス。一番最近には一章部分すら読み切って貰えずにへビーなコメントを頂いた。多少心が重くなった私は、そうだ、別の作品を作ろうと思いつく。そうして、行きつくあてもない暗闇の中を現在進行形で、決して一人になれない部屋で必死になって生きる言葉を探している。新しい問題をネットから拾い上げ、自分の現状と知識と統合して世界を組み立てて。途方もない、誰の得にもならないような話を綴っている。認められない現実を受け入れたくないと、誰にも縋れない事実を否定しようと。

とはいえ、一度は懸賞という一つの目標に向かって十万字越えの大作を書き上げられた事実には、まとめ上げることができた現実には驚いた。飽き症で何事にも集中できなくなっていた自分が半年の構想と半年の執筆期間を経て二十歳記念のように書き上げたその作品は、その時の流行に合わせて鼠を主人公としたものだった。自分にも他人にも厳しく、誰にも救いを求めない鼠は、作中でヒロインをどう助けるのか。裏方故に周囲に理解されない様子を書こうと思ったら、面白くことが起こった。彼はとても朗らかな笑顔を浮かべて息をするように嘘をついたのだ。作品の

中でキャラクターが勝手に動き回るとはまああるが、この時ばかりは驚いて。そうか、これが私で、私が見ている世界の投影なんだな、と腑に落ちると同時に最後まで書きたい。とも思った。思ってしまったのが運の尽きだ。

三年生の八月にWebサイトで公開し始めたこの作品は、来月更新分を合わせると全体で四十万字を越える。三章がまだしまっていないのだが、近いうちに四章の構成を練り始め、そして書くだろう。書かねば形に残らず、記憶力が摩耗する音を毎日耳元で聞いている今だからこそ、私は書いている。

物語を書いていて思うのは、昔のように自身を巻き込む形で物語を作るのではなく、外から眺める視点で物語を組み立てるのは楽しいということである。プラモデルやジグソーパズルの楽しさが完成する過程にあるというのなら、まさしく同じだと思う。確かに脱稿したときの快感が全くないとはいわないが、見たことがないものを想像して描写し、設定や法則どおりに物事を展開させたりしていくその過程にこそ中毒性があると感じる。大学で学んだ専門分野も、理解できるようになった世界情勢の情報も、雑学も、SNSをサーフィンするのも、漫画や小説を読み漁るのも、絵を描くのも、芸術を楽しむのも、小物を作って満足するのも。行きつくところは創作だった。事実、私の創作の中に溢れる日常や争いの描写には、明らかに私が見てきたもの、感じてきたものを投影することが増えている。それだけ成長したということだろうし、昔はできなかった「客観視」が少しはできるようになった、ということなのだろう。

少しは、ということとは、多分まだまだ伸びしろが伸びきったまま。私の生きる線路にはそれが



引かれていて、どれだけ横に逃げようと背中にごびりつくようについて来る幽霊のような影のよ  
うな、そのようなもので——まだ書けるなら書け。一種の脅迫にも似た期待と自信と、普通に生  
きることへの諦めである。

私が思っている以上に、意外にも時間はあまり残っていないのだ。仕事を探す時間も、勉強す  
る時間も惜しいぐらいに、私は今、小説を書きなぐっていると思う。足りない情報を調べては継  
ぎ足して、新たな知識を練り上げ、書くのを辞めたら死んでしまうのかと思うほど、書いている。  
恐らく今頭の中にある内容が吐き出されるころには数年が過ぎているだろう。そしてまた、次の  
作品を書くのだ。

繰り返し、繰り返し、頭の中の世界を吐き出し、終わらせ。

それが良いことなのか、私には判断がつかない。自身の文章力が上がっているのか、下がっ  
ているのか、執筆体力がついているのか、いないのか。自作が他の人にとって面白いのかすら、  
分からないままだ。つまるところ顔の見えない読者に感謝しつつも結局は自分のために、私は物  
語を書き続けている。

私が書くことを辞めるとすればそれは全てを吐き出したときだろうと思う。或いはこの脳の構  
造をいつか修正する技術が生まれたとして、それによってお金を稼げる健全を目指せるという  
社会がやってきたとして、それに賛同したときだろうと思う。私が私を私の意思で捨てるなど、  
考えるだけでぞっとするが、世にいる普通に少しでも寄れるというのであれば、興味は沸くに違  
いない。私だってこのような私をどうにかせんといかんと思わなかった日はないぐらいに自分を

どうしたものか手に持て余して生きているから、そのハンドルやリードをつける手段が目前に現れたらどう転ぶか分かったものではない。私だって人間で人なりの欲がある。例えば目に見える位置に不器用な私でも使える凶器さえあれば、ふと思いついて手を突き刺すかもしれない。けれどもきつと、たかがその程度のことでは私の指は止まらない。片腕になっても書き続けるだろうし、腕がなくなっても、声が死んでも、どうにかこうにか書くだろう。死ぬほど悩んだ末に、書かないという選択肢を諦めると分かっている。

全てを吐き出すなど土台無茶な話なのだ。書けども書けども、新たな物語を語り出す指先と脳は死ぬまで止まらない。人として生きるに必要な無駄な思考回路と思いつきながらも身を削る自問自答。これらが創作に昇華されていけば、嬉しいのだけれど。乏しいCPUではどれだけ活かしているのか分かったものではない。

二十万字。三月からこの六月にかけて私が書いた本文の量だ。私が卒論を書くという現実から逃避して三カ月かけて書いた総文字数。他にも作品を書いているので実際はこれより少し多いだろうが、それでも二十万字だ。我ながらどうしてこの速さで書いているのか分からないが、それもそうで、一週間に四千字だったものが何時からか八千字になり、一万字を越え、調子が良ければ一万字を一日で書いていた。内容が悪くなっているようには見えないし、勢いがついたようにも見える。続けることで何か見えることもあるだろうか。きつと、それが見えるまではこの作品は終わらないと思われる。

そうして数年経ったある日に読み返して「ああ誰にも読まれたくない」と目を覆う羽目になる

のだ。毎日黒い歴史を量産している自覚があるが、辞められない。私にとって創作はそういうもので、既に手がつけられない程の中毒に陥っているのだ。スマホ、ゲーム、ネットに続いて創作中毒。ここにアルコールやタバコが入っていないだけ、健康を手放していないだけまだましなのかもしれない。それらを抜きにして、適度な運動は必要だけでも。

このようなことを長々と語れるのもきっと、私が生きていることを周囲が許してくれている現状があるからだろう。仲は良くななくても私を止めない両親には感謝しているし、現実を見ていないと嫌味を吐く身内も今は離れて暮らしている。今年のように長期間、私が私らしく作品を作れる機会は後にも先にも恐らくない。次にくるのはきっと定年退職後。或いは、今取り組む就活で入った職場を辞めたあと。の話である。それにしたって、社会に酷く溶け込めない色をした私が、あと半年の期間で何か職に就けるとも思わないし、思えない。企業だって、覚えが悪くて意識が散りやすいという何ともネックな特徴をもった私を採ってくれるわけがない。使えない人間は必要とされていない。世の中はそれほど甘くはないのだから。

私は大学二年の時に選択をした。一度手放した創作意欲という植木にありったけの肥料と水を撒いた。それを悔いることはないし、反省もしない。けれども、これでいいのか、生きていていいのか、食費や生活費をかさませるほど、周囲に何かを返すことができているのか。不安になることは増えている。年を重ねて大人になって、モラトリアムを抜け出せない沼地に沈んでいる私を楽観的に眺める彼らは、最後私に何を思うのだろう。

分かるのは、働かなくても頭を動かせば生きていけるし、人はどうにかして他人を生かそうと

する生き物だというだけのことである。壊れるまで放置して、壊れそうになってから心配して、壊れてから悲しみ、なくなったあとで散々後悔する。後悔しないために生かすのだとすれば、私が後悔するのは何に對してだろう。

幼いころにできなかった友達を無理矢理にでも作って遊ぶのが正解だったのか、誰かに恨まれてもいいからどこかのグループに所属しておくべきだったのか、もっと周りに溶け込むように、或いは誰ともつるまないように突出して生きていくべきだったのか。どれにも多少の反省はあれ、今の自分を否定しようとは思っていない。だからこそ、これは最後の抵抗なのだ。私が私として生きるための、最後の抵抗。生きる上での友達は、私が生きていく人生に必要不可欠な取り返しのつかない中核になってしまった。こんなもの、友達でも何でもないただの運命共同体である。

たった一つだけ捻子の外れた飛行機が墜ちる例があるように、私は創作を手放すことができな  
い。誰に必要とされなくても、自らに必要がないと思うようになって。亡霊のようにきつと心の底に根を張って地縛するのだろうか。

日記を書くように書きなぐってしまったものの、一息に吐き出せる文字数はこの辺りでお終いにしよう。今回これを書くのに参考にしたのはどんな作家でもなく、とある女性芸人さんのコラムである。淡々と日常のよしなしごとを語るその文に、私はきつと、懂れているのだろう。

誰に影響を与えることもなく、されど人の記憶に私がいという事実を傷のように残せたなら嬉しいものだ。産まれた意味もないと思ひ知った、無機質に熱を抱くようなこの人生を生きている

かにもあるというものである。

嫌な思い出を想起して泣く夜も、現実に対応しきれない自分に呆れても、時代に置いていかれないように縋り付きながら生きていくとしても。結果としてなぞった痕が膿んだとしても、私に残された命を薪に、書くだけだ。

全くもって地獄のような生き方だと自分でも思う。思うだけできっと、楽に死ぬるわけじゃないのに。

この眩きすらも、この叫びすらも糧にしようじゃあないかと。あまり優秀でないこの頭は、無責任にも人として最低限の生活をむさぼりつつ、酷く強欲にも希うのである。

一息、つく。

受講している講義の提出物として送信した活字の海から顔を出せばそこは現実で、何の間違いか私は学科試験への片道切符を手に入れていた。仮免許を引き取られて一時的に運転する資格を失った私は、早朝四時に起床して支度をし、それから公安へと向かった。最期に教習所を訪れてから一週間後のことだった。

少し前まで感染拡大に称して沢山の学生がごった返していたとは思えない静かなロビーには私と合わせて三人しかいなかった。その内一人は運転手である。送迎バスに揺られて辿り着いた

豊見城の新しい白壁に圧倒されながら、きびきび動き、きびきび行動する。その場で待機場所をぼんやりと提示され、方向音痴をどうにか誤魔化しながら待合室に辿り着くと、島中から集まった受験者が椅子に座っていた。ソーシャルディスタンス、彼らの着席位置は一つ飛ばしだった。心地よい社会的距離に満足しながら試験を受け、結果が出るまで十数分を立って待つ。胃液が過剰生成された割にはあっけないもので、電光掲示板に映し出された呼出し番号が手元の赤文字と一致した。三日間、生きるために必要な創作活動を我慢して勉強に集中したかいがあったというものだ。これで、晴れて私は若葉マークの新米ドライバーである。

一年近く通った教習所に別れを告げて家路について——それから感想を。「それで、それがどうかしたのか」という、努力に反比例した酷く乾いた本音が、喉から溢れそうになって思わず抑え込んだ。意図的に玄関先で飲み込んだ。これは家の中で吐き出すべき感情ではない。だから、帰宅時にいわれた「おめでとう」が、中身の無い空っぽのものに聞こえるはずがないのだ。彼らが私を応援してくれたことも、受かって帰って来た私に喜んでくれることも分かっている。理解している。けれど私は、その言葉を信じるにはもう、どうしようもないぐらいには。彼らが私などどうでもいいと思っていることぐらい分かっているのだ。ともあれ、あと数日で仮免許期限が切れるところだった。そうなれば、周囲にまた要らぬ手間をかけていたのだ。それがなかっただけでもよしとしよう。

一人になれない部屋に戻り、寝ては起き、寝ては起き。無気力にも身を入れない自堕落な生活を続けて数日後。私の手元には終わらない論文と課題と、それからやる気のなさだけが残っ

た。

気怠さが現実を支配し、小説も書けなくなってしまう。ここ数カ月書き続けてきたそれが勢いを失ってしまつて、何だか空っぽになつた気がする。ニュースで流れる不祥事も、変わらない感染者数も、たまに聞くクラシックも、動物のドキュメント番組も、衝撃映像に付属する叫び声も、よく聞いていた実況者の声も、何もかもが耳障りで受け付けられなくなつてしまつた。小説を読んでも、ゲームをしても、人の話に合わせて相槌することすら苦痛に感じた。就活の面接は落ちるし、なんなら書類選考すら通らないし、そもそも仕事の憶えが悪くて応用的対応ができず、人の言葉を聞き洩らす傾向にあり何度も繰り返さねば身につかないという指導員泣かせの素質持ちであることを正直に開示しているのが私であると思ひ至つたその瞬間、スマホを放り投げた。これといつて特技がない癖に興味のある分野は創作だけで、それが一体仕事の何に役立つというのだろうか。極論そのような変人は採用されないのである。どうして嘘をつくことすらできないんだ。週に一回、ゼミの時間に大学で人と顔を合わせることだけでも苦痛になつた。それなのに、現実には留まることを許さない。私にここに留まることを許さない。

タイピング速度と執筆速度を落とすわけにもいかない、悪あがきに書き始めた新作を進めながら、遂に七月に突入した。書けない日々が続くのは案外辛いもので、眉間にしわを寄せながら液晶の白地に黒を並べては消し、並べては消すを繰り返すだけの日々。

光が目にも毒であることなど重々承知で、ぶつ切りになるなけなしの集中力を半日以上投稿予定の小説に費やすも身が入らない。やる気なんてものは出るわけもなく、どうしてこんなものに命

の賽を振ってしまつたのかと痛む頭を抑えて書くことが増えた。生みの苦しみとすら例えられない、生み出したところで意味なんてないかもしれない物語を綴り続ける。少なくとも、今のままではいけないことだけは、本能的に理解していた。私にとって創作をしないということは、陸に打ち上げられた鯨のように苦しいことだ。息はできても、確実に死に至る。息の根が、今度こそ止まってしまう。

思えば、時間の余裕ができて一番に欲しくなつたのは一人部屋だつた。誰の視線も気にせず、静かにリモート講義にも取り組める、面接のために確保できる白い壁がある部屋。なにより静かな空間で書く自由が欲しい。耳障りなものを全てシャットアウトして、一人閉じこもる缶詰になりたい。飛行機の音も自動車の音も道行く人の声も電子機器の動作音も、何もかも感じない無音が恋しい——そんな風に願つたところで、一部屋に詰め込まれるように居住する収入底辺の一世帯が、たかだか一人の無職成人のために部屋を用意できるわけでもない。「書く」という、一銭にもならないことのために、誰かを犠牲にするわけにはいかないのである。

ぬるいと、他人はいうだろうか。

就活も上手くいかず、論文のために送つたメールの返信も来ず、学校からの定期連絡だけが届く。そのどれもが就活に関するお知らせである。企業説明会へのお知らせは昨今の情勢とそれに伴う学生の不安を考えていないものだった。何故収まって来たからといって集合するイベントをやるのだろうか。小心者の私は黄色信号を渡る勇気が出ないまま、自主的自粛生活の継続を試みる。よく、精神が弱っちいことを豆腐に例えるが、私は少し違うだろう。爪でなぞられる心地で



毎日を生きているカバーガラス。プレパラートの上で指の腹に押しつぶされるだけで碎けるあれだ。そんな風に脆いことを、思い知るのが怖いだけだった。書けない頭を絞るようにすると、思うように寝ることが難しくなった。三大欲求の中で人間が最も気を使うべき休息の手段を、疎かにした末路だった。

週に一万文字を叩きだしていたあの状況すら、もしかすると奇跡だったのかもしれないと思い始めた七月中盤。一週間に数千文字の執筆速度で新作を進めつつ、カレンダーを見るときもうすぐ八月だった。上の方では川の氾濫が起きて生きる死ぬの話をしている。肝心の首都では案の定第二波が現在進行形で広まっている。比べて南の島である我が故郷には、マスクをつける人、つけない人、仕事の人、観光の人。様々な人が出入りしてはどこかへ流れていく。観光収入が中心になっている県だからこそ、見えない相手との闘いは向こう半年以上続くことになるのだろう。そうやって最低限の外出を心掛け、どうにか親知らずの抜歯に成功した私は痛み止めと抗菌力プセルを喉に流し込み、二針縫った傷痕に頬を抑えながらスマホに指を滑らせた。そのころには書けない頭が書ける頭になっている、はずもなく。文字通りのスランプが続いていた。通知を知らせる音が小刻みにスマホから鳴り、その度に手が伸びる。画面上部に表示されたメールアドレスを潰しながら、動機付けされた指先が勝手に青い鳥を押しした。毎日、毎回のことである。当然数分前にも同じ動作を経てタイムラインを目にしているのでこれといった更新はない。

私はこれまで、人がどうしてSNSにのめり込むのかが不思議でならなかったのだけど、成程、

身体に刻み込まれた行動パターンは中々抜け出せるものではないようで、アプリを閉じては消し、閉じては消し、スマホの画面を無為に点けては消すことを繰り返す。無意識に無意味に繰り返す。完全に依存症状だった。

ただ、その無意味な動作を続けていると情報は更新されるもので、また一つ新たなメールが届く。どうせまた学校からのものだろうと宛先を確認する。学籍番号で登録された学校のアドレスではなく、個人で作ったアドレスに宛てられたものだった。小説を公開しているサイトからのお知らせ。コメントが、届いたとのこと。

更新再開を楽しみにしています。

一言。それが目に入っただけだった。他愛のない言葉だ。

現状が何か改善したわけでも、地獄のような心が救われるわけでも、卒論が片付くわけでも、文豪のような作品のネタが降って来たわけでもない。けれど、どうしても嬉しかった。壊れかけの人形に高級な油が差されたような、手入れされていなかった庭一面に花が咲き誇ったかのような錯覚を覚える。

酷く不愛想で下手っぴな人間の努力が、ほんの少しだけ、報われた気がした。なによりも、真っ直ぐに読んでくれる人がいる事実が、ありがたいと感じられた。この投稿作品に、このような感想を貰っていいのだろうか。かける必要のない命をかけて語られる、書籍化の目処など立たない

未熟者が綴る、読者も少なく話題性に乏しいこの作品を求めている人がいる。作品の続きを待っている読者がいる。それは——こんな私にはあまるほどの幸せなんじゃあないか。

創作者は褒められ慣れていない。十人から心ない感想を貰おうと、優しい一人の感想を目にすればプラマイプラスである。だから、そうなったときに私がとる行動は決まっていた。

書くのである。一人でも読者がいるのだから——書くこと決めた。丁度、大学の講義へ提出する予定の小説が一本残っている。あまりにも自暴自棄だったところに提出した構成案の中で「勢いがある」と評された新しいスタイルで、書いたことがない方法で、書いてみよう、書き上げてみようという気になった。何もこの懸賞のみがゴールというわけではないのだ。私が書くのは生きるため。ならば逆説的に生きている限り書くことになるだろう。それなら、今回の提出もそれに伴う評価も通過点の一つに過ぎない。落ちようが受かろうが関係ない。小説を綴ること自体が、私にとって呼吸をするのと等価なのだから。

もやもやとする他愛のない話をしよう。理想よりも奇妙な現実を語ってみよう。私が書いたことのない小説を語ろう。そう思えるぐらいには、私は読者の存在に救われた。正直ちよろすぎる人間だとは思いますが、少し褒められただけで私という人間は大層幸福になれる。何度も消えてしまいたくなったこの奇妙な人生すら。今の私なら、受け入れられると思うぐらいには。

筆代わりの十指をホームポジションに添えた。さて、どんな話を綴ることにしようか。この話をどう形にしていこうか。

楽しい、楽しい気がしてきたぞ。私はやはり、この感覚に酔うために創作を続けているのかも

しれない。言葉が、想像が、打鍵音が、私に生きる力をくれる——が、勢いのままに書き出そうとして逡巡する。書き出すには勇気が必要なのだ。

一呼吸入れた。肩甲骨を解す。

構想と共に配慮する。

書いて良いことと、悪いことを振り分ける。

それでいて伝えられることがあるのかと、振り返ることはしない。

酷く歪な私の本音に、今度こそ嘘をつかないために。

行頭を一文字、空けた。

思い返せば島の住人が祈りを捧げる祝日は、私の仮免許期限そのものだった。その偶然が何か意味をもつのかも分からないし相関は有り得ない。教習所の中で見かけた月桃の花や我が物顔でアスファルトを闊歩していた鳩は、今ごろ元気でやっているだろうか。

キーボードを叩きつつこのことを書き記していると、同居するこちら側の住人が買い出しから帰って来た。振り向くと、箱を差し出される。紅茶の箱、ティーバッグの詰め合わせ。バラエティーパックというやつだった。何故かと問うと「最近よく飲むでしょう」と返された。確かに飲んでいますが、あくまで消費するためだ。それを私が気に入ったと思って、同部屋の住人はわざわざ購入したのだという。全く知らないメーカーの、全く知らない紅茶のセットを。

成程。一部撤回しよう。私達はお互いに影響されあう生き物だったのだと。彼らの心身には私がかかわっているし、一切の無関心同士だったわけではないのだと。ザトムシの糸のような強度と細さで、目には見えない縁があった、というだけの話だったのだ。

顔の見えない相手とかかわって、霞のような絹を織る。創作者と読者の関係も、恐らくそのようなものなんだろう。触れれば破けるかもしれないそれをいかに丁寧に扱うかが、私の人生を左右する分岐点となるのかも。

とはいえ。

結局あちらの住民が飲まなかったらしい黄色の小袋が手元に回って来たのが数日後の話だ。おいおい隣の住民よ、飲まないなら何故買ったんだよ。え。違うのか、一袋くらいは飲んだのか。……いや、でもやっぱり腑に落ちない。それでいてニコニコとこちらに手渡して来るのだからどうにも複雑だ。手渡された新たな黄色い六人のアリスに「私もそろそろ飽きてきたから消費はきつと遅くなるだろう」と心の中で謝りつつ、目立つ黄色をバラエティーパックの箱の中に突っ込んだ。この調子だと大学を卒業するまでに好みの茶葉や淹れ方を答えられるようになっていようかもしれない。

今年は紅茶の年なんだろうな。深く考えず、諦めることにした。

午前十一時三十二分起床。

自粛期間の延長に伴い、夏季休暇の予定は真っ白だ。

私は変哲もないマグカップに鮮やかな赤を滲ませる。

綴る文字のスクールと、白濁した紅茶にザラメの飴色。

祈りのあとに残るのは、私達が生きる不格好な現実。

FキーとJキーに人差し指をのせる。

今日も今日とて相も変わらず。

不器用に、息を吸いこんで。

プラネット（ぷらねっと） 沖縄国際大学総合文化学部 人間福祉学科四年



# 詩 部 門



詩部門受賞作

こんにやく

綾村 湯葉

綺麗に切りそろえてあったはずの爪と前髪が伸びてきて

ああ、わたしは生きていたんだなあと思う

ホールケーキが一つ無くなったらみんな気づくけど

クッキーの山から一つ無くなっても誰も気づかない

頭のおかしな人と言われても受け入れるが

かわいそうな人と言われたら傷つく

少しでも楽な死に方を日々模索して

ツイッターで機械的に心配される

「あなたの思いをそのまま聞かせて」

救われたいか思っていない

ただ死にたいだけ

生まれた時から勝ち組のあなたたちには分からないでしょうね  
オレンジに染まった夕焼けを見たところで

眩しいなあ、と思うだけ

自然の美しさとかに気づけなくなった

十八の誕生日に死ぬんだ

高校の卒業式の日死ぬんだ

二十歳の誕生日に死ぬんだ

そう思って生きてきてそろそろ二十一

見えないところに傷を増やすことだけは欠かさない

大学卒業と同時に死ぬんでよろしくお願ひします

その暁には葬式祭りを開催するので

参列される皆様は着飾って騒ぎ散らかしてくださいませ

口内をひどく腫んで腫れた

こんなにやくのような食感で鉄の味

共喰いならぬ自己喰いは、全く興奮しなかった

好き嫌いを言えない

私みたいな人間が、他人を評価するなんて許されない  
不味い、遅い、高い、三拍子揃った居酒屋のキャッチに  
心からの「お疲れ様です」を

私よりは真っ当な人間だ

エアコンの温度設定を決められない

暑いのか寒いのかもよくわからなくて

三十分ごとに温度をいじっても快適が見つからない

諦めてエアコンを消してしまおうと

なんか暑いような気がしてホツとした

生きるのが辛くても大丈夫

隣で支えてあげるから

今感じているその思いは

きつと未来のあなたの糧になるよ

あとで楽をするために今頑張ろう

絶対あなたのためになるよ

私の未来を知っている人のみが言ってくれ

明日死ぬとしたら、私の人生は辛いだけじゃないか

死ぬ日を事前に教えてくれるとしたら

そうだなあ

世界一周の旅でもしてみようか

薄暗い湿った部屋で縮こまって文を吐き出す

ゴミを量産するマシンが私です

動かないから食べる量が少なくなつて

食べないから動けなくなつて

寝つきが悪くて疲れが取れなくて

明確な症状はなくても常に体調が悪い

このままなら大学卒業を待たずに死ねるのではないか

なんて、少し楽しみになつてきた

あとで希望する葬式のプランを送っておくので

私が死んだ際にはよろしくお願いいたします

綾村 湯葉（あやむら ゆば） 沖縄国際大学総合文化学部日本文化学科三年

## 詩部門佳作

# 人間裁判

綱取 汐音

有罪。有罪。有罪。そうかい。

処世術を身につけて、笑顔が上手くなりました。

それでも僕は、この裁判に勝てたためしがありません。

罪状。

ひとのきもちがわかりません。

通信簿は「みんなと仲良くしましょう」先生は「もつと協調性を」ネットの性格診断は「人の心は貴方に難しいようです」と証言しています。被告人の供述ですか、そうですね。クラス会が面倒だから一人だけ不参加とか、人と関わりたくないから連絡先は教えなとか、知人が「死にたい」とボヤいても「ふうん」としか言わないのは、そんなにおかしなことでしょうか。なるほど、有罪。有罪。有罪。有罪。そうかい。

弁護ですか、はいはい。こんなエピソードありますよ。友人（仮）と、ある日は約束したんです。大きくなったら一緒に老人ホームに入ろうぜ。いいよ、って。これ、ある意味では結婚より重い約束ですよ。ノリは軽いですけどね。とにかく、そんな約束ができるくらい、深く分かった友人（仮）がいたってことです。みんなじゃなくても、特定の誰かとそれくらい親密ならいいじゃないですか。え、その（仮）は何だった？ 今は音信不通で、まだ友人かどうか確認取れなかったもんで。不確かな友情で固く結ばれたつもりでも、確かな電波では結ばれてなかったってやつです。有罪。有罪。

被告人、どうですか。被告人？

友人ではなかった、ということじゃないですか。にっこり。

有罪。有罪。有罪。そうかい。

これも、いつものこと。くっだらな。ばっかみたい。

でも世の中の人々は、この下らないことが大事なようです。

そんなわけで。こんなわけで。

今日も昨日もいつまでも、ひとのきもちがわかりません。

ロープで首を括られて、それでも僕は笑っています。

笑っていれば、なんとかなる。

それじゃ、さよなら。

綱取 汐音（つなとり しおん）  
琉球大学法文学部人間科学科四年





詩部門佳作

# 死亡遊戯フタマル

葬 ヤマメ

地球を膝に抱えて笑う女性の広告が勝手に再生される頃  
私たちの世界から私たちが消えてゆく

創作者はみな異世界へと旅立ち

愛を語る本は禁書目録になる

血を流す少女が踊るミュージックビデオが世界的大ヒットに

なる頃には死んでると思つたのに私は今朝も生きていた

爪の隙間には僅かばかりの身体の垢

首を曲げ画面を覗き込む私が踏み付けた煙草の箱には「吸いすぎると死ぬ」の注意書き

誰も読まないネットポエムのように

夜更かしのしすぎで動悸のする心臓で外に出て

本屋で渡された知らないバンドのアンケートに「天皇」って名前で答えて

希望するアルバムタイトルに『未来ポルノー』って書いた

それでも私は私になれない

服を着替え髪を染め爪を塗っても

私は時代のブートレグ 永遠に本物にはなれない

「爆弾落ちたら学校休めるのに」とツイートした前の席の人は

もう就職先が決まっている

見飽きたGIF動画の再生

警官二人に腕を抱えられて歩いて行った男は

この時代のことをどう思っているのだろうか

鶏の被り物をした青年がゴルフクラブを振り回す映像はもう幾億回も再生されて

ニュース映像を転載してコメントしただけの動画で五百万稼いだ奴もこの世界には居る

青年は、被り物のなか汗だくで叫んでいた

「終わりで俺たちに未来は無い」と

その通りだと同調するやつの次の動画は「【記念動画】再生数一億ありがとう！」

クソったれ

猫背気味に歩き回る街の街頭モニタに『いま若者の八割が自殺を選んでいます』と表示されるとき

若者の誰もが地面を見ている

そして夜中にこっそり、スマートフォンにだけ心の内を見せる  
スクランブル交差点でダサイ歌を歌う女性の心も  
あの赤色の窓には写るんだろう

「幸せて何だ 分かる人はリツイート」

「幸福を買う為にリボルビング払い」

「いま何してる？」

「死しかない」

電話相談室には誰もいない

似たような名前の歌手が売れ、全く違う内容の公約が実行される

天邪鬼ばかりこの世の中

十六色に光る画面は毎日激アツリーチをすり抜けて

何事も無かったかのようにまた淡々と玉を落とす

クレジットカード裏に立てた爪は溢れ咲く花のようにささくれ立って赤色

そして二度と鳴らない

(花々の音)

隣の隣の間も狂う時代に

私たちは誰を愛せばいいんだろう

万引き防止のガラスケースに入った包丁が鈍く光る

「バックヤードの小さな窓に光るのは

たつぷりと水を湛えている貯水タンクのみ」

という眩きを下書きに残したまま休憩中にバイトをばっくれて

ドン・キホーテで六千円の出刃包丁を購入

一躍人気者目前前夜

足早に歩く速度が上がっていく

私もはやくインターネットを走る電撃になって

この狭い内なる住処から

出ていきたいのだ！

葬 ヤマメ（とむら やまめ） 沖縄国際大学総合文化学部日本文化学科三年

詩部門佳作

一畳の平和に甘んじる  
プラネット

私の自墮落な忘却性と少しのトンチンカンが重なれば十にも百にも  
俺の自暴自棄な発火性と合わせて煮詰めてやれば千にも万にも

数字で管理された幸福と、愉悦と

心のこもった哀愁と、傍観と

皆、只の人間同士でこぜりあい

誰もその指先を疑わない

威力を思い知って尚、それは薄れた記憶の上に胡坐を組む

貴方の為を思っこの心を推す

貴方の為を思っこの矢を回す

貴方の為を思つてこの雲に書き込む

貴方の為を思つてこの変わり映えない日常に色を足す

されど信用は一日にしてならず

嘔吐きは嘔吐きのまま

正義は正義のまま

お前は何色かと問うて、鉄を弾く

お前は何者かと問うて、鉄を弾く

お前は私を信じないのかと泣いて、鉄を弾く

お前は俺を信じなかったのだと嘆いて、鉄を弾く

お前は私を知らないからと背けて、硝子を弾く

お前は俺では助けられないからと諦めて、硝子を弾く

お前は私に関係ないからと流して、硝子を弾く

お前は俺に関係ないからと楽観して、硝子を弾く

私が（俺が）

持つ意見が（放つ全ての言葉が）

正しいなんてそんな（間違っているだなんてそんな）

有り得ないだろう（そんなことはないとも）

（そらみる今日も何も変わらぬ）そんな風にこの世は不条理で

（誰も何も気にしやいなさ）不格好でだらしく

（間違はずがない）けれど間違っているつもりはさらさらない

だってそうだろう（だってそうだろう）

産まれた時から私は私だ（生きてきた全部を包括した俺が俺だ）

否定されちゃあ困るし（下手に肯定されても困るが）

（どこかしら何かしらに所属するのが人の性だろう）人間は一人では生きていけない

（道を外れた者は淘汰されるだけだろう）そんなこと誰に言われたわけでもないのに

（だから俺は無心に言葉を口にす）だから私は妄言と錯覚を是として飲み込む

鉄を弾き、硝子を弾き

信じてと決めた者を信じ続ける勇気を

信じてと決めた者を裏切る勇気を

正しいと決めたことを受け入れる力を

正しいと決められたことに疑問を呈する力を

知らないことを恥じて知らないままにするより、知る方がいい  
知らないことに乗じて無知を貪ることを許してはいけない  
誰かのゆりかごであることを是とするか、否か  
誰かの拠りどころとして在ることを是とするか、否か

我々は一体いつまで、傾聴と傾倒の甘露に溺れていようか  
この一畳のテリトリーを守る為に、何を犠牲に生きていくのか

未だ、思い知らないと、ほざこうか

指の腹を弾いた、鉄と硝子板の上  
今宵も多彩な文字達が、無遠慮に蜘蛛の巣を這う

プラネット（ぶらねっと） 沖縄国際大学総合文化学部人間福祉学科四年



詩部門佳作

# 目蓋

今山 燈治

暗くなければ見えないもの  
見えないように隠すべきもの  
隠しながら伝えるべきもの

見つけてほしいと願いながら  
気配は煌煌と残している

触れると剥がれ落ちるもの  
陽に当たると腫れるもの  
完全な不完全

融けたガラスのような

あかく染まった街のような

守られながら傷ついているもの

残りたいと願いながら消えたいと叫んでいるもの

かたちのない、ただそこにあるもの

今山 燈治（いまやま とうじ） 琉球大学農学部地域農業工学科一年



# 選 評

## 選評【小説部門】

### 〔びぶりお文学賞選評〕

西森 和広

いつものように、各作品へのコメントを記します。

「それから」は、「小説を書く」ことを中心に据えて、時空を超える旅と自分探しの旅とが一体化するという、この頃の映画などでよく目にするような手法で、個人的には好みませんが、最後に大人になった主人公の視点に移り変わるあたりの不思議な自然さ、さわやかさが心に残ります。文章の粗さが目立ち、無駄に空白を設けているような箇所があるなど、推敲の余裕がなかったかと思われる細かなミスが目立つのが残念です。

「ミルクティー」では、一人の少女の独白がその日常を綴ってゆきます。彼女が慕う別の少女が、やはり彼女の事を想っていたという両思いに互いに気がついていないという、幼いと言えば幼い話です。文章は全体に素直で読みやすいのがよいです。最後に語り手を入れ替えています、個人的に好まないというだけでなく、流れから見ても不自然です。心の内をさらけ出させる手段は何も独白だけではないと思いますので、別の手段を考えてほしいところです。

「この血漿を巡る物語と共に」も、やはり「小説を書く」ことがテーマになっています。どう

も大学で「小説を書く」講義でも受講しているのではないでしょうか。そういう意味では、確かに書かねばならないという切迫感伝わります。全体によく書けていると思いますが、言葉使いのはしばしに粗さ、未熟さが見られます。ウェブ小説はこのような感じなのでしょう。なお、「ウェブ」などのパソコン用語をアルファベットの略字で書いていますが、できるだけカナ文字などにしてほしいところです。

「或いは」は、とにかくインパクトがあります。読ませます。死刑になった人物の残した手記という設定は、古典的な枠組みではありますが、重いテーマであり、挑む価値のあるテーマと言えるでしょう。ただ細かな言い回しのミスなどが目立ちます。例えば、終わり近く、「あらゆる意見が散見している（応募原稿原文による）」は、「様々な意見が散見される」などの方が良いでしょう。最大の疑問は、あれほどの確信犯にしては、最後の改心が唐突に過ぎて、十分な説得力のないところです。結末を急ぎすぎたのでしょうか。それでもとにかく読ませます。

「腐っても君が好き」もかなりよく書けていますが、これが当世風というものでしょうか、アニメでも見ているような感じがしてしまいます。題材も当世風というか、はやりなのでしょう。最初、Bとは何のことだか分かりませんでした。皆さんはすぐ分かるのでしょうか。ひと昔前ならとてもこのような爽やかな話にはなりそうもないテーマです。

『存在理由』<sup>レゾンデートル</sup>は、タイムスリップもので、もしマトリョーシカものというジャンルがあるならば、そう呼びたくなる作品です。最後は胎児になるまで戻ってしまうところはある種感動的でもあります。ですが、歳を重ねた者の眼から見ると、少々都合が良すぎるかなとも思います。

当たり前ですが、人生はやり直しが利きません。もしもう一度だけやり直せるのなら、という設定ならまだしも、これだけ何度もやり直せるとなると、ゲーム並みで、残念ながら響いて来るものもそれだけ減るような気がします。ただ面白く書けていることも確かです。なお、終わり近くに妙に長い空白が取ってあるのが気になりました。

「泥中の眠り」は、いわゆる「男が男に惚れる」物語。性的な意味ではありません。具体的に、詩作の才能に惚れる物語です。友情というのとは少し違う、微妙な心の機微が語られます。全体に良く書かれ、量的な重みもあります。もう少し推敲の必要もある箇所もなくはないと思います。例えば、「大学生に貸し出す用の流動的なアパート」などという表現はもう少しこなれた言い方ができるはずです。個人的に気になったのは、三人称の語りスタイルを取っているのですが、時折、主人公の語りのようになるところがあります。自由間接話法というわけでもなさそうで、それが少々気になりました。しかし最大の問題は、引用された詩篇です。素晴らしい作品で、詩部門に投稿すればよいのにと思って読んだのですが、最後に別の人の手に成る作品と分かってかなりがっかりしました。以前にも類似の事例がありました。もちろん盗作ではなく、「共作」というべきもので、主題から見ても相応の作品でないと話にならないのは当然ですが、やはり残念なところですよ。

「甘美な毒樹の果実」は、結婚詐欺師にだまされる女の話として始まりますが、終りには、その詐欺師の魔力に囚われるかのように、警察の取調官が自ら命を絶つという話にすり替わってしまします。詐欺師自体に物語の焦点を持ってきたかたがたですが、そういう書きぶりになっ

ていないので、以上のような違和感が残ります。他に、気になったのは、詩のように一行、二行で段落を切る書き方が目立つことです。登場人物の内心を語らせる場面などではその効果もあるでしょうが、通常の語りの部分ではあまり意味があるとは思えないのですが。それともう一つ、「ボレロ」の作曲家はモーリス・ラヴェルですね。

最後にひと言。今年は、投稿本数こそ少なめでしたが、例年になく、質量ともに大変充実していました。他の年なら、佳作になっていたのではないかと思う作品もかなりあったと思います。皆さんよく頑張っているなあと、感心した次第です。他に言う事なし。以上です。

(にしもり かずひろ／国際地域創造学部教授)



今年度応募された小説八作品は、文章力と整った構成を評価できる作品がほとんどであった。しかし同時に、多くの作品に誤変換や不要なスペースが見受けられた。応募者には、投稿作品は人に読まれ、評価される地点まで磨き上げた完成品なのだということを強く意識してほしい。

受賞作となった「或いは」は、幼少時の体験から延命治療に疑問を抱くようになった薬剤師の女性を主人公としている。延命治療ではなく、安らかな死を与えることこそ人間の尊厳にとつて重要だと考える主人公は、異なる意見から顔を背けるようにして目的達成のために邁進していく。死を目前にして、絶対の自信を持っていた主人公の価値観がゆらぐ場面は最大の読みどころであろう。ただし、主人公の遺したノートが公表される過程についてはもう少し書き込みがほしかった。公表した者の考えはこの作品からは伺いしれないが、安楽死に加担しようとする第二・第三の人物が登場する未来をも予想させる。主人公の行動と死の向こうに何があるのか。硬質で透명한思考を徹底させてもらいたいと思う。

佳作となった「泥中の眠り」の作者は、正賞と匹敵する筆力を持つ。ただ、この作品にはかつて第十回びぶりお文学賞で詩部門の正賞を受賞した詩人・元澤一樹の詩が引用されている。詩の才能を秘めた一人の男と、その才能が開花するところを見たいと望むもう一人の男のやりとりは優れた筆致で書かれてはいるものの、作品全体に大きな印象を残す詩の魅力を他者から借り

てきているという点は否めず、正賞に一步及ばない結果となった。また、この作品のストーリーはどこか又吉直樹「火花」を連想させるところがある。自身の創作にインスピレーションを与えてくれる詩や小説をいったん自分の中に取り込み、独自の表現として創造し直すという段階を踏んでほしい。さらなる成長を心から期待している。

同じく佳作となった「この血漿を巡る物語と共に」は、さまざまな意味で過剰な点に魅力を感じた。会話文がほとんどなく、地の文のみで展開されるこの作品は、主人公「私」の脳内をたどるような印象を読み手にもたらす。「私」は、脳内の空想世界を友人とする人物であり、インターネットサイトに長編小説を連載している。情報の海のなかに、自らの脳内からあふれ出るままに字数が膨らんでいく長編をぶつぎりに連載する「私」は、レスポンスのない状態でただ発信を続ける状態にあり、そこに不安と不穏さが立ちこめている。しかし一言のコメントをきっかけに、孤独な作業は双方のものに移っていく可能性を垣間見せる。コロナ禍の現在の状況もうまく取り込まれていた。二〇二〇年でなければ書けない小説として、作者の中に刻まれた一編となっただろう。情報を切り詰めること、テーマを絞りこむテクニクも磨いてほしい。しかし、本作では言葉の氾濫の中で自らの生き方をつかみとろうともがくさまに好感が持てた。また、短編小説よりは長編小説に向いている書き手かもしれないという印象を受けた。ぜひ多彩なジャンルに挑戦してもらいたい。

残念ながら選外となった作品は、いずれもいま一步が及ばなかった。「それから」も、小説を書くことをめぐる葛藤と、自分の過去の回想という点では佳作となった「この血漿を巡る物語と

共に」に似た構成を持つ作品である。住んでいる町の風景描写は大変優れていたが、行きつ戻りつする前半と、過去に遡る後半から結末にかけてがちぐはぐな印象を与えてしまう点は惜しまれた。また、タイトルにも少し工夫がほしい。

「ミルクティー」では、軽快な文体で主人公のサキと人気者の友人くるみの関係が描かれる。自分から見た他者と他者から見た自分のイメージのずれがおもしろい。しかし、最後に種明かしのような短いみるみの語りが挿入されることで、逆に読み手の想像力を先回りして奪ってしまふような残念さがある。短編を執筆する際には、結末の閉じ方に迷う書き手も多いが、早急な種明かしや説明づけで終わらないような工夫がある方が好ましい。

「腐っても君が好き」は、腐女子と腐男子のリアルな恋を描くという意欲的な作品だった。テンポもよく、会話の用い方もうまく、情景が無理なく想像できる。しかし全体的にコミカルな印象が強く、深まりには欠けていた。楽しんで読める物語の中に、腐女子がその世界の楽しみに見いだしていることの魅力を活写したり、それが彼女の現実の恋や生活どうこう関わるのかをより具体的に書いたりする部分があるとなお良かったのではないだろうか。

「存在理由」レゾンデートルは、自分の人生をやり直したいと考える主人公たちが複数回やり直した人生を生きて、存在理由を追究する作品だった。構想はおもしろいが、幾度も前の人生に立ち戻るといふ点には違和感も感じた。前の記憶があれば、正しい道を選べるのだろうか。そして、もう人生を続けてはいけないというような苦しみを内包したまま、傷を抱えた人生を歩むという選択はないのだろうか。自分や大切な人が傷つくことを回避するための生き直しは一つの希望でもあるが、

一方で傷を許容できないというマイナスの側面も合わせもっている。

「甘美な毒樹の果実」では、結婚詐欺にあった女性の体験が描かれる。交際相手からの束縛や暴力だけではなく、詐欺師の城宮が推理力や観察力を駆使して狙いを定めた相手を自殺に陥れる点はおもしろい。だが、短編小説に多くのモチーフを詰め込み過ぎた印象は否めない。詐欺師の城宮の異常性に主眼を置いた方が豊かな作品になったのではないだろうか。

以上、本年度の投稿作を見てきた。審査に関わって三年目となるが、投稿される作品のレベルは毎年向上しているように感じる。学生生活の限られた時期に、どこの誰とも似ていないもの、自分の書きたいものを追求する挑戦の場として、今後もびぶりお文学賞が継続することを願っている。

(むらかみ ようこ／沖繩国際大学総合文化学部准教授)

## 第一四回琉球大学びぶりお文学賞の選考を終えて

高瀬 裕人

今年度より、「琉球大学びぶりお文学賞」の選考に加わることとなった。コロナ禍ということもあり、作品の応募があるかどうか心配もした。結果としては、小説部門には八作品の応募があった。いずれも質の高い作品ばかりであり、一人の読者として楽しみながら読むことができた。審査員の先生方との協議を経て、本年度の正賞に「或いは」を、佳作に「泥中の眠り」と「この血漿を巡る物語と共に」を選出した。

「或いは」は、語り手である「わたし」が、死刑囚となったある薬剤師の手記を読むという形で展開されていく物語である。その手記は、確固とした信念をもとに秘密裡に安楽死を実行するまでに至る経緯や、逮捕後に裁判が進んでいく中での想いなどが、淡々とした文体で語られたものである。しかし、その淡々とした手記の語り口から、読者が薬剤師の人物像や心情の移り変わりをゆたかに想像することができるものとなっている。全体を通して作品世界への入り込みやすさを感じるができるとともに、安楽死や終末期医療といった重いテーマについておのずと考えるように誘われていくという点でも、読みごたえのある作品であると言ってよいだろう。

「泥中の眠り」は、主人公の八尾と、詩創作において非凡である古谷との日常を描いた物語である。八尾は古谷の詩創作の才能に惚れ込み一緒に住むことになるが、古谷は八尾の想いとは裏腹にいつまでもその才能を活かそうとしない。それを傍で見続けていった八尾の心の揺れ動きが

しっかりと描き出されている。文体などもしっかりとしたもので、読ませる作品に仕上がっていると感じた。作中で示される古谷の詩も、本作の魅力をより高めていた。だからこそ、こうした新たな創作の形の可能性を考慮しつつ、作中の古谷の詩は許諾を得て借用したものではなく、この作家自身の創作であるほうが、なおよかったのではないかと思われた。この作家の力から、決して無理な要望ではないように思う。

「この血漿を巡る物語と共に」は、コロナ禍という状況設定の中で、「私」が文学創作に打ち込んでいく姿を描いたものである。大学生の日常を題材とし、それらをしっかりと描き出そうとしている点も評価できるだろう。奥手だと言って人との交わりを避けながらも、他者の言葉を気にしていたり、他者からの言葉に励まされたりして創作に打ち込んでいく「私」の姿に共感をいだく読者も少なくないのではないだろうか。ただ冗長さを感じてしまう部分もあるので、全体的に絞り込み深められていくと、さらに作品が光るものになっていくと思われる。

以下、今回は残念ながら選外となった作品にもコメントを記しておきたい。「それから」は、語り手の「僕」が創作活動を通して過去を振り返り、自分とは何かを問いながら「僕が僕になるまで」の過程を描いた作品である。文体など評価できる部分も多く、展開上の行き来をいまま少し整理するなどして、今後ますますその力を磨いていってほしいと思う。「ミルクティー」は、対照的な二人の幼馴染がお互いのことを想い合っているながら、決して成就しないことを描いた作品である。登場人物の名前が会話部分になると片仮名で表記されるのは気になるところである。また最後の部分の語り手の交代をあえて明示することなく、読者にゆだねる形にしてもよかった

のではないだろうか。「腐っても君が好き」は、いわゆる「腐女子」の友情や恋愛模様を描いた作品である。作品のテンポの良さを感じることはできる。作品の世界観を作り出すためであるとはわかっていても、かなり砕けた言い回しや表記が多用されている点は気になった。「存在理由<sup>レシンドール</sup>」は、主人公がタイムスリップし、生き直していく物語である。何度も繰り返される構成はすこし考えものだと感じた。作品の構成がより効果的なものになるように工夫していくことが求められるだろう。「甘美な毒樹の果実」は、一人の詐欺師の男と関連したいくつかのエピソードが展開されていく物語である。一つひとつのエピソードをもう少し掘り下げたり、他のエピソードとしっかりと関連付けられたりしたうえで展開されると、読者が読みごたえを感じられるようになるのではないかと思われる。

最後になるが、応募作品全体を通して、誤字・脱字、誤変換などが見受けられた。単純なものとはいえ、やはりせっかくの作品の評価が下がってしまう。また、記号等の多用が見られる作品もあった。一つや二つであれば効果的な使い方として許容されると思うが、多用されるとなるとどうだろうか。書き手が推敲する過程において、ほんとうに記号でなければならぬのかと、いま一度自分自身に問いかけてみてほしいところである。作家が言葉の力や可能性を信じていることができるか、作家の力量が問われる部分だと思われるためである。作品として完成度を高めたいくうえでも、こうした点を含め、推敲も十分に重ねたうえで応募されることを期待したいところである。

ここまで、読み込み不足の部分もあろうかと思うが、沖縄の若き作家のみなさんの想いがこも

った作品を読むというありがたい機会をいただいた一人の読者としての感想を述べてきた。コロナ禍という厳しい状況にもかかわらず、総じて質の高い作品の応募があったことから、沖縄の若き作家のみなさんの〈文学〉にかける想いの強さや、その力や可能性を感じることができた。厳しい状況の中にもかかわらず、こうした〈文学〉とのゆたかなふれあいの場である「琉球大学びぶりお文学賞」を絶やさないようにと尽力された琉球大学附属図書館の関係者のみなさんにあらかじめ感謝を申し上げておきたい。今後も、「琉球大学びぶりお文学賞」が、沖縄の若き作家のみなさんが文学創作を続けていくきっかけ、そしてその力を開花させるきっかけのひとつであり続けることを祈念している。

(たかせ ゆうじん／教育学部講師)



治らない傷

宮城 隆尋

落ち着かない心持ち、居心地の悪さ。何かを思うたび、行つたびに他者や社会とのずれ、摩擦を感じていたたまれない。そんな心境を表している作品が「こんにやく」（綾村湯葉）だ。（暑いのか寒いのかもよくわからなくて／三十分ごとに温度をいじっても快適が見つかからない／諦めてエアコンを消してしまうと／なんか暑いような気がしてホツとした）。

自分が何かを変える、設定すると考えると、どのように調節しても具合が悪いように思える。どういった状態が正解なのかが不明となり、自己の中に確固たる基準が存在しないことが白日の下にさらされたような心持ちになってくる。そうなるとその心境から脱するには、自己の関与を止めるしかなくなる。すると快適ではないにせよホツとする。針のむしろの日常を生きていけば、死を待つような心境にもなるだろう。確かにへ生まれた時から勝ち組のあなたたちには分からない）感覚なのかもしれない。

（口内をひどく腫んで腫れた／こんにやくのような食感で鉄の味／共喰いならぬ自己喰いは、全く興奮しなかった）という連がある。口の中にできた傷は容易にただれ、痛みはだらだらと長引く。いつまでも治らないようにも思える傷口の様子から題名を取ったのは象徴的だ。いくつつか

描かれる場面の中で、身体感覚を伴った一節でもある。そしてまったく格好良くない言葉を選ぶところが、作品の切実さを保証しているように思う。

その根底にある感覚は（薄暗い湿った部屋で縮こまって文を吐き出す／ゴミを量産するマシンが私です）という一節に通じている。自己を突き放し、無様にさらすことをためらわないのは自己、他者、世界と真摯に向き合おうとする姿勢を表す。昨年、佳作に入賞した作品をみても思ったが、この姿勢が感じられる以上、この作者が進む道に間違いはないと思える。

選外になったが、同じ作者の「海に沈むはひとかけらの夢」という作品にも（誰かの「好き」「嫌い」を大切に扱おうと／自分の感情は蔑ろにされてしまう）（わかるよ）って言わないで／私にはわかってほしい訳じゃない）など、大切なことが書いてあった。このような作者による、このような作品群にこそ光を当てるべきだとわたしは考える。入賞作品集で選外作は公開されない。わたしはこの作者の詩集を読みたいし、多くの人に読んでほしい。

同様に生きること、他者との関わりに向き合った作品に「人間裁判」（綱取汐音）がある。脳内で開廷する裁判は、誰もが一度は思い浮かべたことがあるのではないか。この作品で繰り広げられる裁判で、被告人である自己に突きつけられる罪状は（ひとのきもちがわかりません）。いくつもの事実が挙げられ、陪審員の声だろうか（有罪）とこだまする。

人の気持ちなど分かるものだろうか。他者の言葉や行動をヒントに勝手な想像を巡らせ、共感を装うことはできるだろう。しかし社会は「わかる」ことを強要してくることがある。弁護人は被告にも理解者がいることを示す事例を挙げるが、それにも（仮）というオチがついてしまう。

被告人は〈処世術〉を駆使して笑うが、死を強いられる。終わりは投げやりなようにも思えるが、理不尽な同調圧力に対して引かない〈被告人〉のさまは揺るぎない。読み返すと、軽く思えていた〈有罪。有罪。有罪。〉に続く〈そうかい〉という一節が、確固たる拒絶を表明していて力強い。

「死亡遊戯フタマル」(葬ヤマメ)には激しい焦燥感が表れている。人の生も世界の歴史も、数分間のコンテンツになって動画共有サイトで消費される。一体何が評価されているのか不明な動画の再生回数が、天文学的な数字になる。作品からは不可解な現象が嵐のように現れては消えていく、価値観の迷路のような混沌とした状況で一人、置き去りにされたような情景が浮かぶ。

この詩の主体はドン・キホーテで購入した包丁を手に〈インターネットを走る電撃〉になろうとするが、それはゴルフクラブを振り回す〈鶏の被り物をした青年〉と大差がない。混沌を抜け出す道には到底思えないのだが、同時にそれを完全に否定することもできないように思う。いずれ人類は肉体を捨て、ネットワークの中で生きることを選択するかもしれない。そのときに重視される価値観がどのようなものになるのか、思うほどに気が重くなる。

キーボードや液晶、スマートフォンを通じてネットワークに発信されるおびただしい言葉に批判を浴びせる「一畳の平和に甘んじる」(プラネット)。同時に自己が抱える矛盾や欺瞞にも目を向ける姿勢がある。この詩の饒舌さがまさに〈無遠慮に蜘蛛の巣を這う〉言葉たちを表しているのだろう。「目蓋」(今山燈治)は〈暗くなければ見えないもの／見えないように隠すべきもの／隠しながら伝えるべきもの〉という冒頭から一貫して、同一の対象が持つであろう相反するイメージを対比させる。〈かたちない、ただそこにあるもの〉で終わる。読み手がさまざまにイメー

ジを仮託することができる、広がりのある作品だ。

〔非生物に容易く崩された薄氷／氷割れから噴出した疲弊と憎悪／腐敗した匂いの濁流／あつけなく飲み込まれて寒夜／ステイホーム、ステイホーム／助けてください非生命の神／ステイホーム、ステイホーム／爆弾なくとも世界は壊れる〕「命なき光よ」（凜藤海）。選外だが二〇二〇年をよく表した作品だった。未曾有のパンデミックで大学も止まり、さまざまな価値観が揺さぶられ、問い直される中で作品が寄せられた。選考会はオンラインで開かれた。応募作にも未知のウイルスとの遭遇を題に取つたとみられるものがあつたが、入選作をあらためて見返すと、直接的な言葉としては表れてはいないようだ。

ただ人間とは何か、生きるとは、といった普遍的な問いに立ち返つた作品に、よいものが多かつたように思う。それもまた、さまざまなものが止まつた世界で個の営みを見つめ直した成果と言えるのかもしれないし、全く関係がないかもしれない。

今回の応募作は二十二編と決して多くはなかつたが、作品を前にして自己を省みることを強いられるような、質の高いものが多かつた。正賞の出ない年が続いたこともあつたが、ここ数年はとても充実しているように思う。

（みやぎ たかひろ／外部選考委員・山之口貌賞受賞詩人）

若いぐちゃぐちゃな感情で

西原 裕美

二十二篇の応募があった。今回初めてびぶりお文学賞の選考を担当し、作品を読んでため息が出た。良い意味で、生きること必死な感性が強く迫ってくる。素直に共感することも多々あった。私自身も受賞した皆さんと一緒に、今後詩について切磋琢磨させて頂けたらと思う。

正賞『こんにやく』（綾村湯葉）について

綾村さんは3作品送ってくれていたが、どの作品も非常に引き込まれ、読んだ瞬間にこの人が正賞だと思った。タイトルの付け方にも注目したい。「こんにやく」という脇役的な食べ物の名前をつけることにより、謎めいて読者を作品に誘うきっかけを作っている。詩の内容からは、自分自身の感覚の不確実感、死への執着がありながらも、「諦めてエアコンを消してしまうと／＼なんか暑いような気がしてホツとした」というような、ふと現実感にホツとするような、生への執着も感じさせる。そんな曖昧で絶妙な感覚を描くことが出来てしまっている。他の作品に比べても秀でていると感じ、正賞に選ばせていただいた。

佳作『人間裁判』（綱取汐音）について

人との関わりの難しさを、皮肉たっぷり描いていて魅力的だった。何を基準にすれば、人間関係を評価できるのか分からないという曖昧さに振り回されるような、怒りさえ抱いているよう

な様子が伝わってくる。ただ、詩の最初で同じ言葉を繰り返すことで、詩への導入を邪魔していないかは検討してみても良いかもしれない。

佳作『死亡遊戯フタマル』（葬ヤマメ）について

この作品の現代的な言葉や場面は、若者の心を掴むと思う。アンケートに「天皇」と書いてみたり、「爆弾が落ちたら学校休める」とネット上に呟いてみたり、道徳的には思えない人の就職が決まっている。言葉の重みや厚みが失われた現代社会ではネットに軽はずみな言葉が溢れている。その様な情景が溢れたこの作品は、令和の時代だからこそ残しておきたい作品である。

佳作『一畳の平和に甘んじる』（プラネット）

中盤の（ ）を使った連が良いと思った。誰かのデュエット曲を聴いているような感覚に襲われる。それは、ただ（ ）の中に適当に言葉を入れているのではなく、きちんと作品として意味の繋がりや良い音の言葉を選んでいるために起きているのだろう。

佳作『目蓋』（今山燈治）について

最初は、この詩の魅力に気づかなかったが、もう一人の選考委員が選んでおり、繰り返し読むとみると面白い。ほとんどの連がそれぞれ逆の意味を孕んでいる。「守られながら傷ついている」など、どちらともつかない感覚を描いているように思う。難しい言葉を使っているわけでも無く、激しいインパクトがあるわけではないが、両価的な気持ちを表現したことが伺える。

正賞を取ったからといって、完璧な作品であるとは限らないし、完璧な詩人では無いと思う。

それはつまり、今回受賞された方々についても、もっと良い作品を書く素地があると期待しているということである。

今回とても良いと思う作品の中に、言葉の使い方が間違っているとと思われる箇所があった。その為、その詩を賞に選ぶことが出来なかった。感情的に言葉を紡いでいくと、ミスが出てしまうのは当然だし、あまり気にせずに沢山書いて欲しいと思うが、提出する前に言葉の概念を調べて、ミスの無いように気を付けてみてほしい。また、同じ言葉の繰り返しを多用することについて、良い効果を出している時と、それが作品の内容を妨げていることがある。自分の使い方がどのように読者に伝わるかも見直してみしてほしい。

以上のような選評を書かせていただいた上で、最後に言うのも筋違いな気がするが、他人の意見に左右されすぎずに書き続けてほしい。今後は就活や仕事、結婚や子育てなど、現実の生活に追われて、詩作と生活の折り合いをつけるのは難しくなると思う。毎日、朝から晩まで詩のことで考えて生きていけるような環境にある人は少ない。また、若い時期を抜けると、駆り立てられるように描いていた気持ちも少しずつ冷めてくる瞬間が来ることもある。賞を取ったら、評価へのプレッシャーを感じることもあるかもしれない。何を描けばいいのか、何のために書いているのか、分からなくなるかもしれない。でも賞を取るためでもなく、評価されるためでもなく、書くために書くのではなく、ただひたすら、何かに駆り立てられるように、あなただけの書きたいものを書き続けてほしいと願う。

(にしはら ゆみ／外部選考委員・山之口貌賞受賞詩人)

第十四回琉球大学びぶりお文学賞 選考経過

【募集期間】 令和二年七月三十一日～十月三十日

【応募総数】 小説部門Ⅱ八編 詩部門Ⅱ二十二編

【応募者所属内訳】

小説部門 琉球大学Ⅱ二編（人文社会学部Ⅱ一編、法務研究科Ⅱ一編）、沖縄国際大学Ⅱ六編  
詩部門 琉球大学Ⅱ十一編（法文学部Ⅱ三編、人文社会学部Ⅱ二編、観光産業科学学部Ⅱ一編、

農学部Ⅱ四編、理工学研究科Ⅱ一編）、沖縄国際大学Ⅱ十編、名城大学Ⅱ一編

【応募者学年内訳】

小説部門 二年次Ⅱ一編、三年次Ⅱ四編、四年次Ⅱ二編、大学院Ⅱ一編  
詩部門 一年次Ⅱ三編、二年次Ⅱ四編、三年次Ⅱ九編、四年次Ⅱ五編、大学院Ⅱ一編。

【選考会議】

小説部門

開催日 令和二年十二月二日（水）

選考委員

西森和広（国際地域創造学部教授）、高瀬裕人（教育学部講師）、  
村上陽子（沖縄国際大学総合文化学部准教授）



詩部門

開催日 令和二年十二月一日（火）

選考委員 宮城隆尋（山之口貌賞詩人）、西原裕美（山之口貌賞詩人）

【追悼 上村豊先生】

第一回から第十三回までの『琉球大学びぶりお文学賞作品集』の装丁デザインをご担当いただきておりました、本学教育学部准教授上村豊先生が令和二年七月十日にご病気によりお亡くなりになりました。先生は、毎回受賞作が決定すると、作品を読んだ上でその世界観を装丁として表現されました。作品集の表紙を見て受賞作品を読み、さらに表紙を見れば、各受賞作のテーマ等が凝縮して装丁に込められていることを改めてかみしめることができました。毎回多くの方が先生のデザインされた装丁を楽しみにしておられました。

関係者一同より謹んでご冥福をお祈りいたします。

# 第14回 琉球大学びぶりお文学賞

募集締切：令和2年10月30日（金）必着

発表：令和2年12月上旬予定



【応募要項】 ※詳しくは附属図書館 web サイトをご確認ください。

1. ジャンルは小説・詩の2部門とし、両部門の重複応募を認めず。
2. 日本語で書かれた未発表作品とします。
3. 同人誌などにすでに発表されたものは選考の対象外です。
3. 応募資格
  - ・沖縄県内に本部が所在する大学・大学院大学・短期大学・高等専門学校に在学する学部学生（高等の場合、本科4年次以上）及び大学院生。
  - ただし、過去において受賞となった作品の作者は、同一部門に応募することはできません。
4. 応募方法 ※附属図書館 Web サイトにテンプレートを用意しています。
  - ・小説部門・詩部門ともに、A4判横長用紙にタテ書き、1枚につき30字×40行、文字の大きさは12ポイントとし、ページ番号を入れてください。
  - ・小説部門の応募原稿は、20枚程度とし、1人1編の応募とします。
  - ・詩部門の応募原稿は、1編2枚以内とし、1人3編までの応募とします。
  - 書き始めにタイトル、氏名を明記する。ペンネームも可とします。
  - ・別紙に、住所、電話番号、メールアドレス、氏名(◎(本名・ふりがな)、氏名◎(ペンネーム・ふりがな)、大学名・学部・学科(大学院の場合は研究科)、学年、年齢を記入し、応募原稿に付けてください。応募用テンプレートの使用も可能です(附属図書館 Web サイトをご確認ください)。
  - ・応募手段は、直接持参、郵送、Eメールのいずれかとします。印刷する場合は、右頁を綴じてください。
5. 募集締切 令和2年10月30日(金) 必着
6. 応募に際しての注意事項
  - ・応募原稿は返却しません。
  - ・個人情報及びびぶりお文学賞に関する連絡以外には使用しません。
  - ・受賞作品は冊子『びぶりお文学賞作品集』およびインターネット上に公開します。応募した時点で公開に同意したものといたします。
7. 著作権の取り扱い
  - ・入賞作品の著作権は、琉球大学に帰属します。

【小説部門】

受賞作 1 編  
副賞 = 10 万円分の図書カード  
もしくは同額程度の情報端末

佳作数編  
副賞 = 1 編につき図書カード 5 万円分

【詩部門】

受賞作 1 編 副賞 = 1 編につき図書カード 5 万円分  
佳作数編 副賞 = 1 編につき図書カード 1 万円分

【選考委員】

小説部門 / 西森和広 (国際地域創造学部教授)  
高瀬裕人 (教育学部講師)  
村上陽子 (沖縄国際大学准教授)  
詩部門 / 宮城隆尋 (山之口褒賞受賞詩人)  
西原裕美 (山之口褒賞受賞詩人)

【送付先および問い合わせ】

〒903-0214 沖縄県西原町字千原1番地  
琉球大学附属図書館 保存公開係  
電話：098-895-8697  
E-mail: tsokinawa@acsu-ryukyuu.ac.jp



第十四回琉球大学びぶりお文学賞受賞作品集

発行日 二〇二一年二月二十八日

編集 琉球大学附属図書館

装丁 阪田 清子（沖縄県立芸術大学准教授）

発行 国立大学法人琉球大学

〒九〇三―〇二一四

沖縄県中頭郡西原町字千原一番地

印刷 株式会社 近代美術

## 第14回

### 琉球大学 びぶりお文学賞

#### 小説部門

受賞作 **或いは**  
凜藤海（琉球大学）

佳作 **泥中の眠り**  
葬ヤマメ（沖縄国際大学）

**この血漿を巡る物語と共に**  
プラネット（沖縄国際大学）

#### 詩部門

受賞作 **こんにやく**  
綾村湯葉（沖縄国際大学）

佳作 **人間裁判**  
網取汐音（琉球大学）

**死亡遊戯フタマル**  
葬ヤマメ（沖縄国際大学）

**一畳の平和に甘んじる**  
プラネット（沖縄国際大学）

**目蓋**  
今山燈治（琉球大学）

## 第14回

### 琉球大学 びぶりお文学賞

#### 小説部門

受賞作 **或いは**  
凜藤海（琉球大学）

佳作 **泥中の眠り**  
葬ヤマメ（沖縄国際大学）

**この血漿を巡る物語と共に**  
プラネット（沖縄国際大学）

#### 詩部門

受賞作 **こんにやく**  
綾村湯葉（沖縄国際大学）

佳作 **人間裁判**  
網取汐音（琉球大学）

**死亡遊戯フタマル**  
葬ヤマメ（沖縄国際大学）

**一壘の平和に甘んじる**  
プラネット（沖縄国際大学）

**目蓋**  
今山燈治（琉球大学）